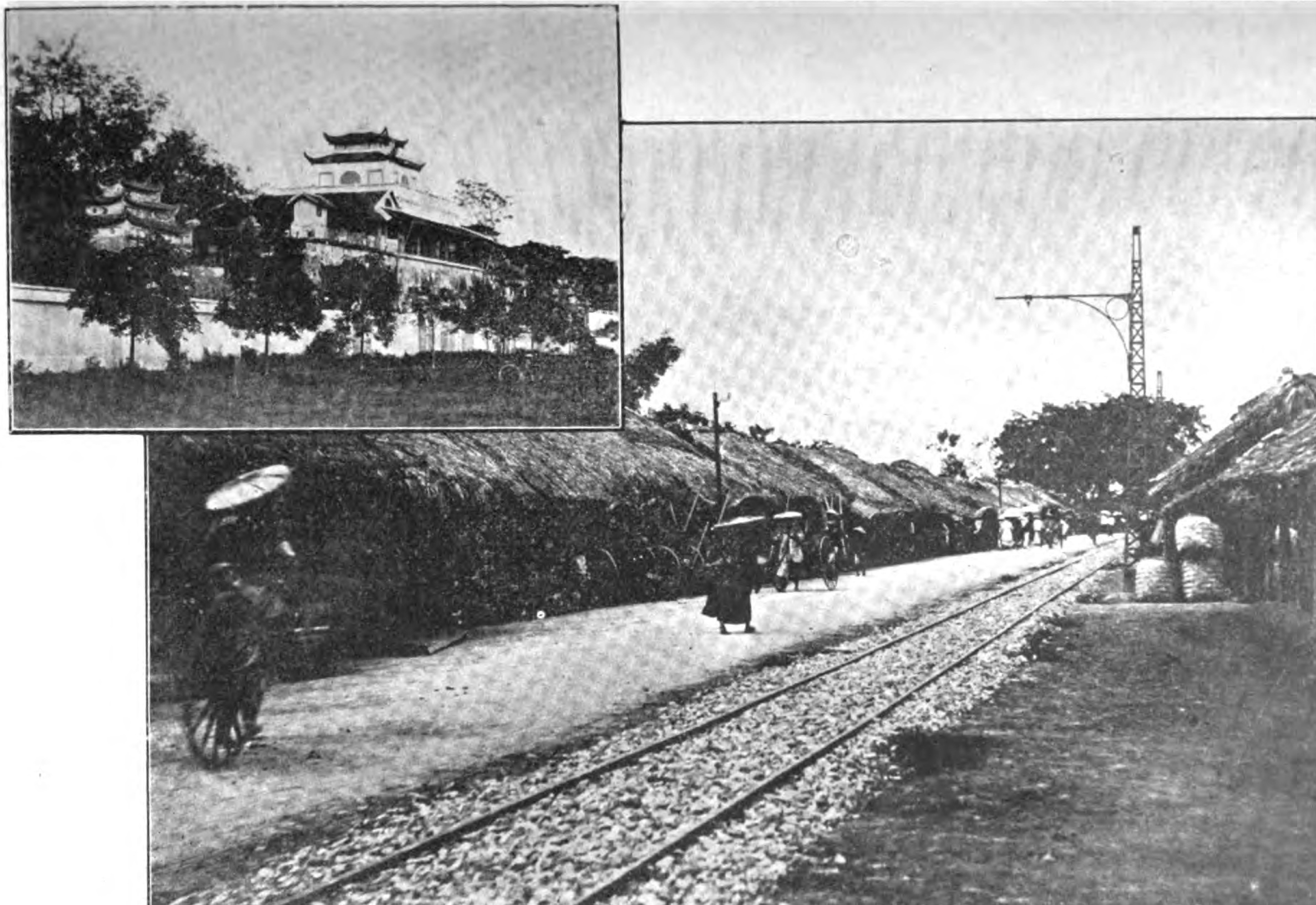
# 中央公論

## 本號目次



（佛領ハノイの舊王城及土人街）

N. 168

中央公論



第十八年
第貳號

# 賄賂國民

國民の將に零落せんとする、各國皆病的現象を一にす。而して賄賂の盛行は慥に衰亡國民通有の一病症なり。

試みに世界各國の現狀に就て見よ、第一流の國民よりも二流三流の國民に於て、獨立の國家よりも半獨立半亡の國家に於て、果して此病菌の蔓延甚しきを見ん。蓋し賄賂の風習は、其國風敎の墮敗と、綱紀の紊亂を事實に顯はせる第一のものなり。國家の健否を診せんと欲する者は、先づ其國の個人に向て袖の下の利目奈何を撿せよ、最も是れ簡便たる鑑別法ならん。

一

伊太利西班牙は歐洲の二等國なり、素より東洋衰殘の各國とは其撰を異にすと雖、既に徐々亡國の行程に向ひつゝある下弦時代の國民なり。賄賂病は既に其國民の全躰に浸み渡れり。其本國を見舞ふ者、其殖民地に遊ぶ者は、誰れも皆其警察其稅關に至るまで、如何に此賄賂が彼等の慢性病となり居るかを覺らん、監吏巡查等が小賄賂に依て犯罪を見逃がすは彼國に於て尋常の事なり。時として習ひ性となりて嚴めしき鐵製の兜を着けたる警官が、漫遊の旅客に向て路頭に公然錢を乞ふが如き奇觀をすら見るなり。萬般の國情伊太利に酷似し、人種の弱點ラテン族のそれと全く一致せる國民は、果して警誡するところ無くして可なりとする歟。

一

土耳古に行け、波斯に往け、埃及に遊べ、印度に遊べ、諸種の亡國病に依て既に亡びたるもの、今や亡びんと

しつゝあるもの、悉く汝の眼底に映じて我が國民に生ける警誠を與ふべし。埃及や印度や全亡の國家は既に世界の一等國に支配さるゝを以て、賄賂病の如きはよし其人民に先天性の遺毒とはなれるも、却て表面は匡正せられつゝあるを見る。土耳古や波斯や愁に半亡の國家たるが爲め、賄賂病の病毒却て劇甚にして上は廟堂の大臣より、下は太道の苦力に至るまで、悉く此病氣に犯かされざる者無し。地位も名譽も、生命も財産も、天國の沙汰も地獄の沙汰も、只緊つて一の賄賂に有り。原被兩告贈賄の多少に依て裁判を決するが如きは尋常の事のみ。外來の漫遊者若し土人の通辯を雇はば、一個の雜貨すらカスリを取らるゝこと無くして之を購ふを得ざるなり。國を擧げて泥棒根性となれるものは實にこれらの國民なり。

一

支那は現今世界著名の賄賂國なり、公然賄賂用の貨幣として特別に製造されたる金塊を有する國は、世界廣しと雖只此支那有るのみ。曰く匯金、曰く壇務、曰く地方官、曰く訟事、是れを公邊の四大賄賂と云ふ。知縣の株を買はんとするに賄賂の相場現今二百兩より三百兩、知府は五百兩より千兩、道臺は三千兩より二三万兩、壇務の如きは其土地に依て大高下有り、有名なる四川鹽州のそれの如きは五六万兩の贈賄を要す。若し他日支那の新聞に相場附録なるもの添附せらるゝあらば、各種賄賂の時價を示すこと他の文明國株券相場の如くすること最も必要ならん。上天子より以て下庶人に至るまで四億の民衆賄賂病を以て自ら亡びつゝ有り。彼の有名なる支那最負のロバートハート氏すら、税關の吏員丈けは到底支那人を使ふ能はざるもの、此病毒に感染せざる支那人は四億分の一個すら見出だし能はざるが爲めのみ。

一

韓國も亦支那と同じき賄賂國なり、官を賣り、事業を賣り、機密を賣り、人を賣り、國を賣る。僅々一百万圓の賄賂は優に韓國の全朝庭を買收し得べしと傳ふ。然れとも今日買收されたる日本黨も多少の追增しを與

へて謗へば明日は露西亞黨となる、恰も一國を世界强國の前に競賣の貨物として拋げ出したるが如し。死に瀕せる病國の現狀又憐むべからずや。

一

然れども韓國を嗤ふ能はず、支那を罵る能はず、波斯土耳古を嘲る能はず、况んや伊太利西班牙を卑むをや。今や我國も亦一の賄賂國民となれり、世界各國に然かく自白せざる可らざる場合となれり、下弦時代の半亡國民と同一の徵候を呈しつゝあるを否む能はざる國民となれり。三十餘年前曾て幕府の末路も此賄賂病の爲めに倒れたり。維新改造、辛ふじて一時姑息の治療を爲したるが如きも、遺傳の病毒猶根治されざるあり、頻々として其臭を此所彼所に漏らす。敎科書事件の如き則ち最近の一事例に過ぎず。

一

彼れ敎科書問題はこれ只一局部の小破綻のみ。仔細に診し來らば、我國何の階級か此病に罹らざる、何の部分か此病毒の瀰蔓せざる、個人も團躰も、私社も公衙も、東海清廉の君子國を擧げて今や此賄賂病の爲めに腐爛せんとす。校長視學官の拘引の如きを以て驚く勿れ、網に入るものは常に細鱗にして呑舟の魚は却て平氣なり、乞ふ明判官の手をして獨り末流に止まらしめずして頭首に向はしめよ、獨り文部省のみに止まらしめず更に農商務省に向はしめよ、陸海軍に向はしめよ、有ゆる方面に向はしめよ。瓜蔓全部の根を絕つに非ずんば、決して一國の廓清を望むべからざるなり。

吾人は强ち國家の前途を悲觀せず、公平に判斷して我國民の決して支那人朝鮮人の如くならざるを知る、印度人土耳古人の如くならざるをも知る、然れども西班牙の如く伊太利の如きは慥かに有り、今に於て良心の麻痺を恢復せずんば、朝鮮たり支那たり土耳古たり印度たるもの一世紀を出でずして來らんとす。痒を搔くの快を貪らんが爲めに疥癬を保存するが如き手緩き手段は、國政料理の任に當る者の最も避けざるべからざるところなり。往年パナマ事件に就て收賄の事有る、佛國の內閣は直ちに一大變動を生ぜり、既に下り坂に

向へる國民なりと雖、猶流石に佛蘭西なりと云ふべし。世界新興國の一と自負せる我國に於て、其局に當れる閣臣が自ら責任を明にすることを知らざるが如き、何等無耻の所業ぞ、畢竟支那朝鮮半亡國の大官と何の撰ぶところあらん。

あゝ賄賂國民の時事又知るべきのみ。

# 吾國の大學生と社會

## 教育

一國の精神元氣はその國の學生に依て輝發せられざる可らず、而して學生の花たる大學生の如きは尤もその責に任ずべきものなり。吾人は歐米諸國の學生の活潑邁往の行動を傳聞する毎に未だ必ず是等諸國の强大なる所以を感嘆せずんば能はず。

顧みて吾國の學生を見るに唯腐敗墮落の聲のみあり、唯光炎なし氣魄なしとの評のみあり、是れ豈に世界に頭角を脫せんとする吾國の元氣たり精神たる可き學生の事ならんや。素より吾人は世の論者の如く一概に吾國の學生を以て腐敗し墮落したるものとは信ずる能はず、中に或は腐敗墮落生を混するは勿論なりと雖も、多數の學生は率ね勤勉にして能く其學を修むるものたるは獨り吾人の觀のみならざる也。唯光炎氣魄なしと云ふに至ては吾人も略、憾を同ふせざる可らざるを奈何せん。

歐米諸國に在ては大學は總ての方面に於ける一大勢力なり。而して吾國に於て大學と云ふも私立大學の如きは勿論、宮尊民卑、政府の事業とし云へば何事にても難有がらるゝ國柄に於ての官立大學すら果して何等の勢力を社會に存し居るか。帝國大學とは唯赤煉瓦の巍々として屹立し、多數の角帽生徒の出入する處たるを知るの外、社會は大學及び大學々生に對して何等の重量を感し居るか。山川大學總長を始め、各分科大學々長及び各大學敎授は大學生の眼よりしては何れも皆誠に立派なる人物として敬尊さるゝ所なるべしと云へども、彼等にして一歩校外に出て去るとせんが社會人は

果して彼等の人物風貌を仰望せんとするか。況んや學生輩に於てをや。社會の勢力としては彼等は蓋し何にてもあらざる也。

想ふに是れ大學が社會已外に別居して光炎氣魄の以て社會人を揺撼するの機會なきに依らずんばあらず。之を歐米諸國の大學に見るに、ユニバシテーセツトルメントの如く、又ユバシテーエキステンシヨンの如く、大學教授若しくは大學々生等が大學の光明を社會に赫耀するとに孜々として怠らず、或は貧民教育に從事し、或は矯風慈善の業に奔走し、又或は社會教育とも云ふべき學術講談會を各地に開催し、社會人の智德を開發するに熱心なるが如き、吾人の常に艶羨措かざる處なり。歐米諸國の大學が社會に重視さるゝ素より其所なりと云ふべし。

顧るに吾國今日の大學々生等は單に死字に對して死學を研究し能事畢れるものとなすが如く、彼等が社會に對し何事を企畫し何等の活動に關係したるかは今日迄吾人の知る能はざる所なるのみならず、彼等は自家の學問を表白し、智識を廣布し、盲を啓らき愚を導くが如き學者の寧ろ本領とも稱すべきものすら未だ多く試みたるを見ず。

ペストの恐るべき、素より云ふを待たず。而も無智なる都人士の多數今や此恐る可き病毒と咫尺しながら、冷々淡々として相知らざるものゝ如し、之を警覺し能く防禦殄滅の道を講ぜしむるは醫科大學々生等の適當なる任務なり。而るに彼等にして之に對し未だ何たる運動の爲されたるを見ず、又爲さんとするものあるを聞かず。又今日の大問題として尤も天下人の耳目を聳動し居るものは所謂教科書事件なるものなり。事件の火の手は已に三府廿七八縣に蔓延し、今日の如くして進まば其及ぶ所殆んど測る可らざるものあり。吾國風教上の一大事變、世界に對して顏色なきの大々醜陋となす可き也、而るに一國最高の教育に從事する大學教授及びその教育を受け居る大學々生の徒にして、之に對し何等かの意見を表し、何等かの義憤を發し國民の良心を喚起したるものありや。彼等の無爲、無能、無

勢力なる多くを云はずして知る可きなり。

素より吾國の大學、始めよりして是の如きものにあらざりし。而も一度、帝國大學が官吏養成所となり、肩書販賣所となり、詰め込み教育機關教育となるや、教授等は一意重きを學生に强ひ、大學々生とも云はるゝものをしてひたすら得點にのみ汲々とし、試驗及第をのみ心配し餘力の又讀書巳外に及ぶ能はざらしむ。而して彼等學究連は眞學問眞研究の特に人物の品性の陶冶の如きは寧ろ社會と近接し社會に活躍飛動するより來るものなるを解せざるなり。近來大學出身者が往々にして迂濶空疎、世用を爲さずと評せらる率ね是等の弊に生ずるに非るなきか。

されば帝國大學巳外の私立大學と稱するものゝ如きは如何なる形勢ぞ。慶應義塾は夙とに一代の偉人故福澤翁の感化力に依て存立する所のものなり。今や翁亡しと云へども翁の主義精神は依然として留存すべきの筈なり、而るに慶應義塾は社會教育者として今日抑も如何なる勢力を放發し居るか、彼等は脩身要領と云へる好恰のバイブルを有しながら寄附金募集の機械としての外、その宣傳に就て如何なる氣炎を社會に揚げ居れるか。又た早稻田大學は當今の大政治家大隈伯の統率する處、その勢力正に帝國大學に抗すべしと稱せらる、而も早稻田大學が大學として社會を感化風動するもの果して何物かある。尠くとも都下百万の人士は早稻田學生の皷吹に依て道德上、智識上何等の負ふ所かある、見來て官立と云はず、私立と云はず、吾國大學の社會的發進の意氣なき行く處として皆然らざるなし。

大學の權能を擴張し、一大學の社會的勢力を增大にせんとは世の論者の屢々提起する問題なり。或は大學總長にその所在地の警察權を附與すべしと云ひ、或は議院內に各大學の代議士を有すべしと云ふが如き悉く皆至當の要求なるべし。爾れども大學をしてその要求を遂盡せしむる程に社會に重からしむるものは實に大學の實力に待たざる能はず。吾國唯一の帝國大學すら未だ獨立の基礎の立てるを見ず、僅かに國庫の支辨に待つあるを見るも吾國大學勢力の伸張未だ全く其時を知ら

ざるなり。

蓋し吾國の今日程社會敎育の必要なる時代はあらず。物質的進捗は纔かに面目を備へたるが如きも、社會一般の無知盲昧なる殆んど文明的智識道德に於て空乏するものといふべし。而して之を諷諭し笞鞭し善化區導するものは實に學者の任なり。而して堂々たる日本の元氣精神たるべき大學々生として是等の天職に對して一の作す所あらず、少くとも都下の講壇をして空しく他人に一任せしむ、抑も是れ彼等の面目となさんや。

都下の講壇纔かに數ふべし。而も尙之を神田にしては錦輝館あり、基督敎靑年會館あり、本郷にしては中央會堂の如きあり、三田にしては惟一館の如きあり、何れも借て以て彼等が社會敎育場に充つべきものならずや。

されば吾人はユニバシテーセットルメントの如きは暫く措きせめてユニバシテーエキステンションの一部としてなりとも吾國大學生の社會敎育に突進せんことを勸告せざる可らず。即ち是れ彼等の大學を社會に重からしめ、彼等の光炎氣魄を發輝する唯一の機會たるべければなり。知らず吾國の大學先づ吾人の說を實にせんとするもの、帝國大學なるか、慶應義塾なるか、抑も又た早稻田大學なるか、吾人の切に聞かんと欲する所即ち是のみ。

# 萬國東洋學會に就て

文學博士　高楠順次郎

客冬十二月佛領河内（ハノイ）府に於て開きたる万國東洋學會は、原とコングレ、アンテルナショナル、デキストレーム、オリアンと稱せしも、會議の結果コングレ、アンテルナショナル、デゼチュード、デキストレーム、オリアン(万國東洋學會)と稱することゝなり、今回を以て第一會となし、永久河内府佛國東洋學院內に存立せしむることゝなれるものなり、余輩は我邦より其招聘に應じて該會に參同したる一人なるを以て、茲にいさゝか該會の準備及び結果に就て報ずるところ有んとす。

△學會の準備

一、發起委員會は巴里に在り、セナール、コルデイエ、メーナール、バルト、ブレアル、アミー、シヤヷン、レビー、ロニー、エーモニユー、ギメー知名の學者十七名より成る

二、組織委員會は河内に在り、フイツー、ペリヨ、パルマンチエー、ユベーア、メートル、ゴダールセオン、等十八名より成る

△學會の成立。。。。。

一、政府、學會の代表者を出せしもの

獨國　伯林王室人種學博物館（ドクトルステエーチル氏）

澳國　帝國政府及維納博物館（參事官ヘーゲル氏）

錫蘭　亞細亞協會支部（ボナパルト、ワイヅ氏）

支那　佛國公使館（ボナン氏）
帝國主稅關（ビリー氏）
亞細亞協會北清支部（ルミエトーア氏）

米國　エール大學（リブンウオース氏）

フインランド國　ヘルシングフオース大學（ドンチル教授）

佛國　刻文美文學士會院（セナール氏）
佛領亞細亞協會（大使館書記官ルフエーブル、ポンタリー氏）
佛國大學（ユベーア氏）
博物學公館（ブワー教授）
國立博物館（ユペーア氏）
人類學會（ダンジヨイ氏）
亞細亞協會（ヤドロール氏）
殖民海事學會（デユブイ氏）
デユブイ氏は初めて河内紅河を溯り土人の襲擊を受け爲に淸佛戰爭の起るに至りたる最初の旅行者たり今年七十四歲
佛國古學協會（日本佛國公使館コルビザール少佐）
巴里地學協會（ガルニエー小尉）

和蘭國　アムステルダム地學協會（ストペラール氏）
海牙府王室學院（ドクトルブランデス氏）

英領印度　亞細亞協會孟買支部（マクミラン

氏）

佛領印度　印度政府（ドクトル、コルデイエー氏）

蘭領印度　印度政府及バタビア學術技藝學會（ドクトル·ブランデス氏）

佛領印度支那　柴棍農業會議所（ゼチー氏）
印度支那學會（モアイン氏シヤペル氏）

伊國　王國政府（羅馬大學ノーセンチニー教授（ボロンヌ大學伯爵プレー教授）
（香港伊太利總領事ボルビセリ氏）
フローレンス高等學院（ノーセンチニー教授）
ボロンヌ大學及亞細亞協會（伯爵プレー教授）

日本　帝國政府及東京大學（高楠順次郎）
亞細亞協會（ドクトルベルツ氏）
獨逸博物人種學會（文學士フローレンツ氏）
帝國東洋學會（文學博士南條文雄氏、藤島了穩氏）

マダガスカル　マダガスカル學士會院（ジユリー氏）

那威國　學士會院及クリスチアナ大學（リーブライン教授）

暹羅國　王國政府（ゼルルニー大佐）

以上正式の代表者二十七名、外に會員として出席せるもの五十四名、この外發起組織會員の出席せるもの廿二名あり總數百三名なり、我國よりは右に掲ぐる委員の外陸軍少佐岡澤慶太郎、臺灣農商課長柳本通義の兩氏出席し、會員中白人以外の學者として出席せるもの我日本人あるのみなりし。

△學會の開議及遠征

十二月三日午後四時　準備會議

一、役員の撰擧

(1)總會役員

會長　フイノー氏
副會長　ヘーゲル氏、リーブライン氏高楠氏
書記　ペリヨ氏、ストンチル氏、
會計　コンメイユ氏

(2)別會役員

第一印度部門

會長 サクミラン氏、プレー氏

書記 コルディエー氏、フォンテニユ氏

第二日本支那部門

會長 ボナン氏、フローレンツ氏、ノーセンチニー氏、

書記 リーベンウォース氏メートル氏、

第三印度支那部門

會長 プランヂス氏、ゼルニー氏、

書記 マドロール氏、パルマンチエー氏、

(3)音譯法制定委員會

會長 セオン氏

委員 パボンノー氏、カディエール氏、デユムーチエ氏、フイノー氏、ゼルエー氏、ホアンチョンプー氏、ペリヨ氏、シモナン氏、

(4)印度支那言語學書委員會

會長 ゼリニー氏

委員 ブランデス氏、カディエール氏、フイノー氏、ユベーア氏、メートル氏、パルヤンチエー氏、ペリヨ氏、

(5)梵漢佛教字書委員會

會長 フイノー氏、

委員 南條氏高楠氏(編纂)メートル氏、ペリヨ氏(譯補)

この委員會は字書の實際の編纂に従事するに非ずして、出版の体裁進行、事務等に就き、意見を提出する權能に止まる、實際の編

輯は帝國東洋學會の事業なり、

十二月四日午前十時　開會式

(1)印度支那總督ボー氏演說
(2)東洋學會フィノー氏演說
(3)澳國政府參事官ヘーゲル氏祝辭
(4)和蘭政府委員ブランデス氏仝
(5)伊國政府委員ノーセンチニー教授仝
(6)伊國文部省委員プレー伯爵仝
(7)暹羅國政府委員ゼリニー大佐仝
(8)那威國外國協會リーブライン教授仝
(9)日本外國協會ベルツ教授仝
(01)佛國協會ユーベーア氏仝

同　日午後二時　總會

(1)ノーセンチニー氏　一六二六年ベルチノー氏東京報告の原書及譯書
(2)ブランデス氏　爪哇の古代
(3)ゼリニー氏　暹羅語の研究、印度支那古代地理研究に關する計畫
(4)高楠順次郎　印度數論哲學の論書と漢譯金七十論の比較
(5)フローレンツ氏　日本古代の美文
(9)ユベーア氏　印度支那史前の史料

十二月五日午前八時半　總會

(1)カヘン氏　露國に於ける東洋語の教育(メートル氏代讀)。
(2)リーブライン氏　アメノフィス四世の名に就ひて
(3)同　日　イオの神話に就ひて
(4)シヤヴン氏　支那古代地圖二葉(ペリヨ氏代讀)
(5)プレー氏　中世印度地圖の研究
(6)フワウンツ氏　日本佛像衣物儀式に就ひて

同　日午後二時　第二日本支那別會

(1)ルミエーア氏　日本新聞の起原(ベルツ、メートル、ウンツ等評論)
(2)有賀長雄氏　日本歷史に於ける主權の思想(メートル氏代讀)
(3)岡本芳次郎氏　「壺阪寺」の獨譯(フローレンツ氏代讀)

(4)高楠順次郎　唐代鑑眞の東征傳及安倍仲麿漂流の航路（ベル、ツ、リベンウオース、メートル、フワウンゲ等評論）
(5)フローレンツ氏　西鶴小說の研究
(6)メートル氏　鎌倉以前歷史文書評論
(7)藤島了穩氏　眞宗略史

十二月六日午前八時半　第一印度別會

(1)マクミラン氏　マラチ語俗歌
(2)コルデイエー氏　印度梵語醫書の發見
(3)フイノー氏　十二世紀に於ける東甫塞病院
(4)リープラン氏 プレー氏　パニとプニの字源に就ひて
(5)フオーゲル氏　印度ラホーア博物館に於ける健陀羅の佛像（フオンテニユ氏代讀）
(6)ジヤンセーチーモデイ氏　波斯の古書に見へたる支那の記事（マクミラン氏代讀）

同日同時　第二印度支那別會

(1)ダンヂヨイ氏　安南社會に於ける婦人（パルマンチエ氏代讀）
(2)ルミイル氏　モイ人種と南洋人種（同氏代讀）
(3)ソンデイエプ氏　バサク地方に關する古傳說（セオン氏代讀　ゼリニーメートル、カデイエーアシヤペル等評論）
(4)ユベーア氏　印歐詩傳の支那譯に就ひて（メートル氏代讀）
(5)ボニフワシー氏　東京蠻人種の俗歌（ゼリニーセオン、ペリヨ、リテル、ベルツ、メートル、ユベア等評論）
(6)ヘーゲル氏　東西亞細亞の金銅の太鼓に就ひて
(7)パルマンチエー氏　安南古學上の新發見（古波王の金庫及ドーンドオン地方の發掘）

同日午後二時　總會

(1) マスペロー氏　タイ語(暹羅)の新音譯法（フイノー氏代讀）
(2) フオンテニユ氏　南天竺のプラーナ傳說（音譯調査委員會附托）
(3) レビー氏　チヤンドラゴーミン（義淨傳に月官大士とせるもの）の時代に就ひて（ペリヨ氏代讀）
(4) パリ氏、ホンナ洞窟の刻文
(5) モノー氏　印度支那の地質學
(6) ベルツ氏　東洋人種研究の結果
(7) ペリヨ氏　新たに得たる支那書籍に就ひて
(8) 同　氏　支那公試の改良
(9) シユライチル氏　世界共通文字の計畫（ペリヨ氏代讀）

十二月七日午前七時　遊行

(1) 北寧縣　慈山府　亭榛神社、紅雲山寺、柳杏公主廟、
(2) 訓道郷　古城、村市、
(3) 古法郷　李朝八帝の廟所

十二月八日午前八時半　總會

(1) リーベンウオース氏　一八五六―一八六〇年間淸歐戰爭に就ひて
(2) 南條文雄氏　法華經三譯比較の結果、梵本校定の終結（フイノー氏評論）
(3) カデイエー氏　カンピン(廣平)の史的考定
(4) マウス氏　印度支那社會學（ユベーア氏代讀）
(5) プワー氏　支那及印度支那の實用植物
(6) コツト氏　東京に於けるタイ人種の動
(7) ニユエンカクヒユエ氏　ボチヨントアン墳墓の碑文（セオン氏代讀）
(8) チヤンパンナン氏　タイソン(西山)及ピンテー山の石碑（パポノー氏代讀）

同日午後二時　總會

會長フィノー氏　決議要項

(1) 當學會は第一回万國東洋學會(プレミエー、コングレー、アンテルナショナル、デゼチュードヂキストレーム、オリアン)と稱す

(2) 東洋に於ける各學會は務めて國人の同働研究を奬勵すべし

(3) 佛國東洋學院は務めて古代都城の發掘に從ひその結果は悉く他の古學參考品と共に東洋學院に蒐集すべし

(4) 當學會はプレー伯が印度支那古代地圖に關する研究を進行することを望む

(5) 安南語音譯方法の改定

(6) タイ語音譯方法の改定

(7) 當學會は常磐井、南條、高楠三氏の計畫に成り佛國政府の補助に仍り佛譯すべき梵漢大字書に對し(一)歐洲東洋學者が編纂に必要なる助言を提供せんことを望み(二)日本學術の光榮を顯はすべき此事業に向つて日本政府があらゆる方法によりて之を奬勵せんことを望む

(8) 當學會はゼリニー氏の印度支那言語學書(フィロロヂー)の發行を望む

(9) 梵學書の組織的發刊に關して印度デルヒ梵文書籍館より提出せる案件は第十四回万國東洋學會に提出すべきことを期す

十二月九日及十日　遠行

支那疆域探見

(右は河内シュナイデル印刷所發行の第一回報告に依る)

右にて學會は閉會したるが、佛蘭西政府は來會會員に對し往復の旅費を支給し、饗應極めて丁重に、四方の來會者をして毫も遺憾無らしめたり。

抑も佛國が此東洋學院を河内に置き、留學生を出だし、圖書館を設け、種々古學の參考品を蒐め、新著又は雜誌を刊行して研究の結果を報ずる等、世界學術の進歩の爲め鋭意其費を惜まざるは實に感嘆すべきものあり、今回博覽會の中央館として規模の大東洋に其比を見ざる陳列館の如きも、博覽會後東洋學院の參考品陳列館となし、圖書館の如きも別に之に附屬して鐵庫を有する完全なるものを建築せらるべしと云ふ、其企畫一として余輩をして健羨せしめざるものはなきなり。已に現今に於ても河内東洋學院圖書館は優に東洋學に就て世に吹聽するの價値有り。將來に於ては東洋學第一の大圖書館たらんことを期せるものにて、余輩は不

華にして書函が柴棍より河内に徙りし際とて、嚴封未だ開かれず、目錄未成の時なりしを以て其內容を完全に知るの便無かりしも、一見已に大に注目すべきを覺えたり、則ち西藏一切經は一冊の缺なき完本を有し、余輩が久しく望みて得る能はざりし蒙古譯一切經も亦此處に完存し、道藏も又美本有り、その他支那歷史叢書の類も悉く備はれり、我國に傳はりて四田氏の手に依て刊行されたる大越史記の如き我國のは缺字多く只方圓の符を以て、補ふところ多きも此圖書館には完全なる原版の存せるあり、余輩は之を借りて塡字を爲さんと欲せしに東洋學院長は之れを開版するの希望有り且つ日本に於て印刷せんと云へるを以て之れをやめたり、その他近時支那に於ける珍本として萬國東洋學會に披露せるもの丶中左の數書は特に珍奇なる史料なりとす。

| | |
|---|---|
| 西夏文字法華經 | 一帙 |
| 景日本延喜刊本文選 | 一卷 |
| 緬甸館來文 | 一卷 |
| 暹羅館來文 | 一卷 |
| 西天館來文 | 一卷 |
| 高昌館來文 | 一卷 |
| 回々館來文 | 一卷 |
| 百譯館來文 | 二卷 |
| 八百館來文 | 一卷 |
| 西番館來文 | 一卷 |
| 松潘属包蒔等西番譯語 | 一卷 |
| 泰寧屬沈邊等西番譯語 | 一卷 |
| 建昌屬木裡爪別各西番譯語 | 一卷 |
| 永樂大典 | 數部 |

こは佛國東洋學院のペリョ氏が清國遊學中得たる所にして其外數多し、余輩は今更の如く彼等が能く其尋ぬるところを知り、見れば必ず之を失はず、識見と富力と兼ね具ふるを感ぜずんばあらず。

余輩今回の行は當初に企畫せし如く、學會參列の傍ら廣東探見交趾探見東蒲塞探見南京探見の四目的を有したりしも、其半ばは風候險惡の爲め目的を達する能はず、やゝ失望したりしと雖大躰に於て得るところ少からず其殘憾を償ふて餘りあり、其詳細の結果は更に稿を改めて述ぶるところあらんとす。

特に記憶すべきは佛蘭西政府が我帝國東洋學會に於て編纂さるべき梵漢大字書に對し、其佛蘭西譯の爲めに一萬圓を補助することゝなりし一事なり、余輩は彼國

政府が學術發達の爲めに熱心にして且つ宏量なるを感謝すると同時に我國の政府及び各本山各富豪諸氏等の此際大に梵漢大字書原著完成の爲めに一臂の力を借さんことを希はざる能はず、渺たる南亞細亞の一部府に於てする猶此の如きの目的、此の如きの規模を以て、世界學術の爲めに貢献せるに非ずや、東洋文明國の首座として、列國より期待せらるゝ我國が、其東洋學に於て、遂に他の人後に落ちんことは余輩の忍ぶ能はざるところなり、東洋學の中心が我國より漸く南方に移るに至らざらんことを我帝國の學術の爲め我國民の位地の爲めに切に希望せざる能はず。

# 教科書事件善後策

山縣悌三郎

教科書事件は、實に近來の大疑獄にして、目下嫌疑の爲めに拘留せらるゝ者、縣知事、書記官、文部視學官、文部圖書審査官、府縣視學官、諸學校長等、無慮百餘名の多きに達せんとす。教育界の神聖を汚し、教育者の威信を失ひ、學校子弟教育の上に惡感化を及ぼしたるのみならず、延いて外國に對して、我國官民の如何に腐敗し墮落せるかを暴露したる事、蓋し之より甚しきはあらざるべし。誠に慨嘆に堪へざる所なり。

抑も此事件は、其由來する所既に久しく、賄賂公行の醜事は教科書檢定審査の制度と共に始まりたるものなれば當局者にして若し帝國議會の建議、其他識者の注意に耳を傾け、教育界の一大弊源たる教科書審査會の制度を廢し、且つ文部の檢定に關して部下の監督を嚴にしたりしならば、かくまでの失體をあらはさざりしならんに、當局者の不明と曠職とは、終に我が教育界に千歲拭ふべからざるの汚點を刻したり。

されど事すでにこゝに到る、今更いふも甲斐なし、余は唯其善後に就きて及ぶ限りの講究をなさんとするの外なきなり。

而してこの事件の爲めに差向き善後の始末を附けざるべからざる事は、

第一、教科書に就きて

第二、教育界の人物に就きて

是れなり。

昨今教科書に就きて問題となれるもの二あり。一は所謂國定教科書說にして、小學教科書は一切文部省にて編纂發行すべしとの說なり。他の一は自由選擇說にし

て、教科書は現在の儘にてよし、唯審査會を廢して各學校の自由選擇に任すべしとの説なり。

凡そ一利あれば一害の之れに伴ふは事物の免れざる所なるが、教科書に關する以上二個の方法に就きても亦然り。

先づ教科書を國定とするにつきて其利とする所は、

一、從來の如き書肆贈賄の弊を絶つ事、

二、國民教育の統一を圖り得べき事、

等は其主なるものなり。されど亦之れに伴ふ所の弊害を擧ぐれば、

1、所謂役人の仕事として其進行の捗取らざる事、

2、文部省一派の偏狹なる思想を注入せらるゝ惧れある事、

3、漸く發達し來れる民業を阻碍する事、

等なり。僅かに一個の國定修身書の編纂のみにも、數名の編纂委員が、明治三十三年四月より着手して猶未だ脱稿を告ぐる能はざる位なるに、一切の教科書を今の文部省にて成就せしめんとするは到底望むべきにあらざるべし。又從來教育當局者間には、社會の進運に伴はざる一種の頑迷なる氣風行はるゝを以て、(殊に修身科及び教育勅語の解釋に於て然りとす。)其精神にて國民の教科書を編纂せられん事、なか〳〵に我等の堪へざる所なり。又國民教育の統一といふ事も其主義方針にして正しくば、我等は之を希望せざるにはあらねど否らざれば統一せらるゝ事は却ッて迷惑の至りなり。又歐洲諸國の多くの例に照らし、社會の進步に鑑みても、民間にて教科書を發行する事をば一切禁止するといふ事は少しく穩當ならざるにあらずやと思ふ。又自由選擇の方法は、今の審査會制度に比すれば固より優る所多しと雖も、たゞ教育社會に廉恥の心缺けたる今日の如き甚しき時に當りて、書肆發行のものゝみを以て各學校の自由選擇に任ずるときは、贈賄の弊は廣く各學校(又は教育團體若くは其地方の有力者)に及ぼし、從來は審査會、若くは之れに關係を有する者に限りしを、今後は汎く之を蒔き散らす事となるべし。要するに從來病患の局所々々にありし者が、全身に散漫するに至るべきなり。又此方法の一弊害は、圖書供給の不行屆なる事なり。人の知る如く、小學教科書の需用は年々二千五百萬冊に上り、從來其多くは東京書肆の發行に係るを以て、若し自由選擇法に據りて、全國幾萬の小學校各々其好む所の圖書を用ふる場合には、

發行元に於て其出版の圖書が何拾萬冊必要なるべきか確たる見込の立たざるが故に、營業上の損失を恐るゝより、東京の書肆は從來よりも自然內輪に見積りて其製造をなし、地方の書肆も亦其仕入を扣へ目にすべし、隨て學期間際に至りて供給不足し、學校生徒は其需要の圖書を得る能はざることあるべし。

要之余の意見は、以上の二説を折衷して、姑らく左の如くなさんとするにあり。

第一、　審査會を廢し從てこれに附帶する諸規定を全廢する事

現行の審査制度の弊害ある事は、固より明々白々にして言ふ迄もなく、之を廢すべきは勿論とす。隨て之れに附帶する諸規定を廢するの結果、縱ひ四月一日前に此事件の裁判確定するも、小學校令施行細則第六拾三條(審査又は採定に關し刑に處せられたるものゝ發行に係る圖書は、裁判確定の日より五ヶ年間之を採用する事を得ずとあり)によりて、一時教科書供給の杜絶する患を免るゝことを得べし。

第二、　文部省は迅速に教科書を編纂發行する事

文部省は今より悠々閑々たることなく、大に勉勵して既に着手したる修身書及び讀本はいふに及ばず、先づ義務教育年限の教科書を急ぎ成就して、次いで其以上の程度のものに及ぼし、非常の速度を以て編纂發行を成し遂ぐべし。而して決して各科唯一種の用書に限らず、成るべく各種各樣のものゝ出版せられん事を望む。其方法は編輯局(課)を置き職員をして編輯せしむるは勿論、汎く適當の學者教育家又は著作家を撰びて之れに編纂を囑托すべく、場合によりては懸賞募集の法にも依るべく、或は相當の價格を以て民間の良書を買ひ上ぐべし。

但余は文部省が從來の如く委員を設けて之れが編纂の任に當らしむる事に反對す。此後縱ひ委員を設くるやうの必要ありとするも、其委員はたゞ編纂着手の初めに當りて、編纂の大體の方針順序及び學科程度等を定むるだけに止むべし。其人々が各自筆を執りて合議編纂することゝならば、俗に所謂船頭多くして舟は必ず山に登らん。

第三、　文部省の編纂發行せる教科書は汎く翻刻を許す事

これ余の意見中の最も大切なる部分にして、文部省自らが出版製本の模範的原本を發行するの外、猶一定の制裁の下に、汎く各地方の書肆に其飜刻を許し、以て自然の競爭を爲さしむべし。是れ一は其の價格を廉にし、一は其供給を普ねからしむるの道なり。

### 第四、書肆の編纂發行せるものも亦文部省のものと同じく自由に競爭せしむる事。

書肆發行のものにても、文部省のものに比して其書の品質定價等に於て優れたる點あるものなきにあらざるべし。若し文部省のものにして、其主義如何にも偏狹なるか、又は編纂其宜しきを得ざるか、或は地方々々の情況に適せざるが如き場合には、之れを斥けて民間のものを隨意に採用せしむる便利あるべし。蓋し余の眼中にては文部省をも亦一の書肆と見做したるなり。

### 第五、教科書の採擇は各學校の自由に任す事。

從來の如く書肆の出版に係る教科書のみの中にて各學校に自由選擇を許すときは、書肆競爭の弊、賄賂はたと小さくなりて却りてひろがるの患あれども、既に文部省發行のものあり、尙ほ其上に地方々々の書肆にて飜刻せるものもあり、供給十分にして、或は品質良く、或は價格廉に、自ら教科書の標準となるべきを以て、書肆が是迄の如く粗惡高價なるものを、專ら賄賂によりて採用せしむること容易ならざるに至るべし。又贈賄者收賄者共に强いて不正を行けんと欲するも、從來の道廳、府縣廳下唯一ッの審査會に比するに、各學校に於ては其周圍狹く、從て環視者の注意嚴密なるを以て容易に其意を逞ふすること能はざるなり。要するに文部省發行のものと、民間發行のものとの間に、優勝劣敗の理に據り、經濟的原則に從ひ、需要供給の道行はれて、自然に品質良く價格廉なるものならでは採用せられざるに至り、到底賄賂などいへる忌むべき病毒の侵入すべき餘地なきに至らしめんと欲するにあり。

右は教科書事件善後策中、教科書に關する余の意見の大略なり。若し夫れ視學官、府縣視學、郡視學の廢官、學校長任用令の改正、其他教育界に用ふる人物の採擇法に就きは、他日を期して述ぶる所あるべし。

（右は一月廿二日氏の談話を筆記したるものなれば、文責は全く記者に在り）

# 動物に對する歐洲思想の變遷

本田増次郎

（一）

上古の事は素より傳説に據つて知るを得るのみてあるが、先づ希臘に於ては種々の話がふるくより傳はつて居た。象は理性を備へ仁愛の情あり兼ねて宗敎心をもつて居て日月を拜する。モーリタニヤの林中ては或る河の邊に群集して、新月毎に象が禮拜を行ふと信じた。又河馬（ヒッポポタマス）自ら樹血する時は刺を以て血管を貫き、粘泥を塗つて其傷を療治する法を知つたもので、結局刺絡の効能を人類に敎へたといふ。塘鵝（ペリカン）といふ一種の鳥はわが子を養ふために自殺して其肉を與へる、蜜蜂もその王の掟を犯した時は自殺して罪を謝するものだと謂つた。

或る鷲が一少女を深く愛慕して居たが、其娘が夭死したので火葬をすると、その鷲がその火に身を投じて殉死した。その義鷲を祀つた宮がセストスにあつた。犬が主人に殉死した例は昔しから澤山あつたと見えるかかゝる忠義な犬の一匹は天上して星となつた、それが即ち犬星（ドッグ、スター）だといつた。又海豚（ドルフィン）はわが子を愛し音樂を好み、殊に凡て幼なき者を深く愛するので多くの美しい傳説の源となつて居た。啻に俗人のみならず、有名な博物學者も此動物の徳を嘆賞して居るくらゐで、後世に至つて初代の基督敎徒は、海豚を以て救世主が人類を愛護するの表號とした程である。

かゝる傳説が原因ともなり又結果ともなつて、希臘人はまづ動物に對して大なる敬意を表して居た事が分る。俗間にこんな傳説が勢力をもつて居ると同時に、哲學者中にも人の靈魂と同じやうな理性を具へた靈魂が動物にもあると說いた人が多かつた。ピタゴラスの一派の如きは、人の靈魂は死後動物に輪廻すると說いたし、又ストアック派其外の學者は、人類及び動物の靈魂を以て、均しく世界萬物を運轉活動せしむる神の靈の一部分であるとした。

又古代に於て法律を以て動物を保護した例も少なくない。牛は當然農業國に於て昔しより特別の尊敬をうけたもので、埃及では現に牛を神として拜んだ。「穀物をこなす牛に口籠をかく可らず」といふは猶太人が牛を保護した法律て舊約全書の申命記に出て居る。羅馬

の初代に於ては、牛を人類の特別なる共勞者として保護し、之を殺すものを死刑に處するといふ法律があつた。希臘にも同樣の法制があつたといふ事である。『鹹や雀は宿りを得、燕子はその雛をいるゝ巣を得たり、萬軍のエホバ、吾が王、吾が神よ、これ汝の祭壇なり」といふ舊約詩篇の句は、エルサレムの神殿に巣くふ鳥類を神の賓客とした思想で、希臘人と同樣の考をもつて神殿の鳥を保護したとの事である。又ゼノクラテスといふ學者は、鷹に逐はれたる窮鳥が其懷に入りたるを助け、之を放ちやつてさて其弟子を顧みて、仁者は己れに依り頼むものを拒むものでないと曰ふた。甚しきは小鳥を苦しめた小兒を死刑に處した例が希臘にあつた程で、まづ希臘時代の思想は動物保護に十分重きをおいたと謂つて宜しからう。

(二)

羅馬時代に移るといふと、獸畜殺戮の遊戲、鬪牛、鬪鷄、鶉を鬪はす事まで勵奬して、尙武の氣象を養ふ助にするといつたなどは無論仁心の發達を害したに相違ない。隨つて當時の政府が動物保護などに心を用ゐたらうとも思はれぬが、しかし羅馬の文字に現はれた思想を窺ふと、羅馬人が動物をいたはつた優美な情が見える。ルクレシャスは其子を犧牲として神に献ぜられた母牛の悲哀を描寫して居る、プルタークは强壯にして能く我れに仕へた牛を如何に老朽したればとて他人に賣り渡すに忍びぬと謂つて居る、ジュウェナールは一雀の死を弔して雙眼に涙を浮べた一人の羅馬の淑女を傳へて居る。又アポロニャスは國王に狩獵に招かれし時たとひ君主の寵招あるも人道を如何せんと言つて之を峻拒したし、アリヤレは山を超え谷を渡りて狩りまはさるゝ間に幾多の娛樂を獵者に與へた兎を、更に殺すは人情の忍びざる所だと主張した人である。

しかし羅馬人の動物哀憐は、右にあげたやうな一種感情の發露したものには止まらない、別に儼然たる教訓の形をなして行はれて居たのであるが、此教訓の元祖といふはピタゴラス、エムペドクリスなどの哲人である。而して其議論の根據は靈魂輪廻の說で、ピタゴラス學派の羅馬を風靡すると共に肉食を避くる人が多くなり、波の有名なセネカの如きも禁肉主義を奉じた一人であるといふ。然るに一種の獨斷說とか假定說とか謂ふべき輪廻說に據らず、單に自然の感情に訴ふるはかりでもなく、別に一旗幟を樹てゝ仁道哀憐といふ道德觀を根基とし、其上に立つて熱心に動物保護を主張

した一大明星は即ち希臘のプルタークで、基督教起つてより千七百年間の文化も之れに匹敵する思想を産出し得なかつたのである。

（三）

然らば基督教時代の動物觀は如何といふに、舊教新教と區別して論ずる必要があるが、カトリック教は斷然輪廻說を排斥し、人類の外に神の救拯にあづかるものなしと說いたから、對動物の道德には殆んど貢献する所がなかつたのである。此點に於ては舊約全書のみを聖經として奉じた猶太教の方が、新約即ち基督教に優つて居たと謂はねばならぬ、新約時代になつては、神人の關係とか人類博愛の熱情などに精神を集中して、下等動物の事などは殆んど度外に置いて、之を念頭にかくるは徒事空想に過ぎないと見做すやうになつた。かく舊教は動物の權利とか保護とかに全く冷淡なりし間にも、僅かに一種の同情を動物に向くる事を間接に教へたものがある。それは即ち聖徒傳中の出來事であつて、基督教初代の師父司教などの中には、隱者となつて東國の沙漠歐洲の深林に幽居して居たのが隨分あつた、それが絕えて人と交らぬ寂寥のあまり、自然の勢で動物と相親しむに至つたために、樣々の傳說が起つて來たのである。

隱者に呼び留められて鳥が飛行を止めたとか、獅子やハイエナ（獸名）が隱者の脚下にひれ伏し仕へたとか、人世の利害に心を閉ぢて死灰枯骨の生を送つた人も、動物の苦悶を見ては其心忽ち門戶を開いて哀憐の情油然として起り、動物もまた聖者の德に化して其野性を變じたといふ話しが幾つもある。聖シオンの外出する時は猛獸がその屈從をする、彼れまた井より水を汲み與へて其勞を犒ふた。ある埃及の隱者は沙漠中に美麗なる庭園を拵え、椰樹の下で其手から獅子に果實を食はせた、聖ピーメンが寒夜に凍慄すると獅子が來て之を溫めてやる。聖ポールといふ隱者と埃及の聖マリヤといふ尼は共に死後獅子に葬られたといふ事。又ゾシマスといへる老衰せる一僧がシーザリヤに旅行する時、驢馬に其荷物を負はせて行つた所が、獅子が來て其驢馬を食つてしまつた。ゾシマスが其獅子を叱責すると彼れは大に恥ぢて、驢馬に代つて其荷物を城門まで運んで謝罪した、聖ヘレナス聖パコミヤスは共に鰐魚の背に跨つてナイル河を渡り、聖スクティナスは海の怪物に乘つて愛爾蘭土海峽を渡つた。

鹿が聖者のために隨伴したり、荷物運びをしたり、耕

話などをしたとか、或は聖者の死後其遺物を人に傳へたなどの傳説は甚だ多い。基督が鹿の形をなして獵者に窮追せられ、忽ち轉回して額上に十字架を揭げ出し、人の聲にて獵者を諭し改宗せしめたといふ話しもある。聖エラスマスは生前殊に牛を保護したので、死後其祠前を過ぐる毎に、牛は自ら進んで拜跪したといふ。聖アントニーや聖ブリッヂェットは豚を守護し、聖コランバは馬に其死を豫告せられた人である。聖コルマンは牡鷄、廿日鼠、蠅を其三友として居たが、鷄は時を告げて讀經の勤行を促がす務めをする、鼠は惰眠に陷つた時其耳をかぢつて目を醒まさせ、蠅は讀書中思想岐路に迷ひ又は用事あつて座を離れた時、讀み止めた處にとまつて居て枝折の用をしたといふ、或る隱者は狼と食を共にするを常として居たが、ある時狼主人に先だちて家に歸り、ひもじさの餘り一塊のパンを盜んで食した。それで慙愧に堪えなんだと見えて其後一週間全く僧菴に來なんだが、再び來た時は頭を垂れて深く悔ゆる有樣であつたから、隱者は其頭を撫しつゝ平常の二倍の食を與へて赦免の意を示した。一匹の牝獅子が悲嘆の職を放ちつゝ或る隱者の處に來て、强るて其子の居る所へ伴ふて行つた。見ると其子の獅子は盲目であつたので、祈禱をしてやつたら目が開いた。翌日其親獅子は野獸の皮一枚を齎して隱者に謝恩の意を表した。

かゝる傳説を擧ぐれば際限もない事であるが、要するに隱者が山野に生活して人を離れ動物に近づいた事と、人類の不德を動物にて代表する思想と、基督教外の迷信が復活混入して來た元素とでもつて、人獸同氣といふやうな奇譚を生み出したのである。素より妄誕の話ではあるが、しかし昔しの人は全然之を信じて居たのであるから、自然それが動物を敬するとか憐れむとかいふ方向に、人心を感化する力のあつた事は快して疑ふ可きでない。

又史的事實として信據すべき二三の例を擧げやうなら、ヴェニースの聖ジェームスといふ十三世紀の隱者は、伊太利の兒童が鳥を糸に縛つて弄ぶを見る毎に、之を買ひ取つて放ちやるを常として居た。これは主(即ち神)の小鳥だと言つて放したとの事である。アシヽの聖フランシスのいふには、「予もし皇帝に謁するを得ば、神の愛のために、予を愛する愛のために予が姉妹たる雲雀を捕へて禁錮する事を禁じ、牛や驢馬を有するものはクリスマスに特別の馳走を與ふべき事を、國

民一般に布令あるやう願はんものを」と。

しかし前言へる如く、大躰からいへば舊敎は動物哀憐を敎義として說いた事は殆んどないので、此點に於て回々敎ブラマ敎などが慥かに基督敎に先鞭を着けた事は歐洲人の一般に承認する所である歐洲に於て此思想の初めて勃興したのは、宗敎改革後僅かに十八世紀の事で、動物哀憐の業は實に新敎國民の功に歸さねばならぬ。彼の宗敎改革の勇將ルーテルは兎狩を見て悲痛に沈み、これは惡魔が人の靈魂を追逐する姿だと謂つたさうである。今日でも舊敎國たる西班牙や伊太利（殊に南伊）の如きは、歐洲中で一番動物虐待の行はれて居る處で、佛蘭西の如きも動物保護の業があまり進んで居ない。新敎國の中でも英米二國は此運動が尤も隆盛で、英國では一八二四年米國では一八六六年に、正式の動物虐待防止令が出來て以來今日では非常な進歩をなして居るのであるが、近世の事を委しく記するは別の時機に讓つておいて、爰には唯古今の大變遷をざつと畧述するまでゝある。

# 日本人と南米諸國

## イスパノアメリカの研究

今村良治

頃日ロイテル電報は頻々として南米ヹ子スエラと歐洲強國との間に起れる事件を報道し、ヹ子スエラといへる固有名詞は漸く人口に膾炙するに至れり、されどこの國名を正しく發音し得るもの及その如何なる國柄なるかを知れる人は極めて尠少なり。

ヹ子スエラ合衆國はイスパノ、アメリカ諸邦の一にして十六個の姉妹國を有す。いづれも獨立共和國なり。此等十有六個の國名を擧げ得るもの果して幾何ぞや

蓋、イスパノ、アメリカとは英語の所謂スパニッシュ、アメリカにして西班牙の亞米利加といへる義なり◎第十六世紀にコルテースなるもの墨西哥を征服し、ピサーロなるもの亦南米に遠征して秘露を略取し漸次その領地を擴張して之れを西班牙王國の屬領となしたるよりこの名稱を附するに至りしものなるが、後、第十九世紀に入り米大陸に於ける西班牙領地は相踵いで獨立し各共和國を建設するに至り、今やイスパノ、アメリカなる語は一轉して、米洲に於ける西班牙語使用國を意味する稱呼となり、墨西哥、グワテマラ、サン、サルヴドール、オンドゥラス、ニカラグワ、コスタリカ、コロムビヤ、ヹ子スエラ、エクワドール、秘露、ボリ

ヴャ、智利、亞爾然丁、ウルグワイ、パラグワイ、及西印度諸島中のサント、ドミンゴ、玖馬、合せて十七個の共和國とプエルト、リコ二島を含む。之れに葡萄牙語を以つて國語とせるブラジル共和國を合せて一に拉典亞米利加の稱あり。

然り而して、單に大師といへば僧空海を意味し、大閤稱號は獨り豐臣秀吉に限らるゝ如く、亞米利加といへる固有名詞は一般に北米合衆國のみを指すの語なりと解釋せらる、如何にも北米合衆國は新世界隨一の富强國にして、北米合衆國なくむば米洲なきが如き觀ありと雖、その面積は漸く全大陸の五分の一にして、單に北亞米利加洲のみにつきていふも、その半分に足らず。イスパノ、アメリカ全躰を合算したる面積は大凡北米合衆國の面積の一倍半に相當す。亞米利加といへる貴重なる名稱は單に之れを北米合衆國のみに占有せしむ可らざるなり

イスパノアメリカ諸邦の面積は通計約四百五十万平方哩にして實にわが日本帝國の面積に二十八倍し、人口は精確なる統計を得る能はずと雖、總計約四千一百万と註せらる。太平洋を横斷して米大陸に移住を企つるわが同胞は掌大の地を爭ふて隣人の增怨をかふを要せず。

明治の新造熟語の一なる洋行といへる語はその流行極めて盛なり。曰はく學術研究、曰はく漫遊、曰く商况視察、その目的の那邊に存ずるを問はず、一概に歐米に旅行することを意味し、纔に海外出稼といへる一語によりて下等勞働者の渡航と區別せらるゝに過ぎず。而かも所謂洋行の目的地を問へば大抵いづれも、歐洲に在りては英、佛、獨を主とし、稀れに、露、墺、瑞、伊、蘭、白の諸國に志すものあれども、その希臘、西班牙、葡萄牙に赴くものに至りては其の數實に寥々たり。又米洲に在りても北米合衆國にあらざれば即英領加奈陀にして未だ多く墨西哥以南の諸國を歷訪したるものあるを聞かず。嗚呼此等の諸國は遂にわが邦人の一遊を値せざるか。

思ふに太平三百年の長夜の睡眠に耽り、浦賀の砲聲にその春夢を破られて蹶然起き上りたる新日本は、文物制度何くれとなく歐米先進國の長を採りてわが短を補ひ。一日も早く彼等と肩を比べむと欲し、その準備に多忙なること、恰、かの試驗前に於ける學生の俄勉强ともいふべき有樣にして、毫も他を顧みるの遑なく、專心、教科書たる英、米、佛、獨をのみ學びたるに

よるなるべく、参考書たる第二流國が度外視せられたりしは亦時勢の然らしめしものならむ乎。如何にも今日の南歐諸國及、拉典亞米利加諸邦は物質的文明の中心にあらず、また、進歩したる學藝の花園にあらず。結局吾人は此等の諸邦國に師事して多く習得すべき必要あるを認めず。然り、吾人は多年熱中して歐米の先進國に學べり。その文化を傳承して能く之れを消化し、日清戰爭に於ける勝利といへる光榮ある卒業論文を提示して文明國の伍列に加はれり。學校生涯を了りたる日本帝國は何時まてか狹隘なる寄宿舍の一室に籠居して、徒に英雄髀肉の歎を洩すべき。今や吾人は世界の表面に吾等の羽翼を試すべき時機に達せるなり。見よ、彈丸黑子の大和島根、豐公既に三百年の昔時にその狹小を歎じたり。連年人口は過剩を告げ、土地は痩瘠す。吾人は今にして同胞活躍の一新舞臺を得るに非ずむば有爲の大和民族は豆大の島中に相鬩ぎ、飢え、渇き、遂に骨肉相食むに終らむ。吾人は何れの處に向つて吾人活動の天地を求めむ。眼を上げて見れば太平洋中に布哇列島あり。同胞數万此所に勞力を供して働く。されどこは隸附たる小島の一群、日本人活動の舞臺としては餘りに小なり、南洋に濠洲あり、北米に加奈陀あり、合衆國あり。されどその門戸は日本人の前に閉されむとす。歐洲の南に阿弗利加洲の横はるあり。されど天然の遠隔といへる墻壁を設けて日本人の殖民を拒み之れを歐洲の民に與ふ。獨り墨西哥以南の諸邦は沃土廣濶、人口稀少、之れに國を建つるの民は優柔なる拉典人種（主として西班牙人）と愚昧なる土人となり。清韓兩國に於いて勢力を扶植し得たる日本人は拉典亞米利加に於いて成功せざるの理なし。謂はずや雞口となるも牛後となる勿れと。濠洲若くは北米にアングロ、サクソン人種の褌を擔ぐよりも、去つて中南米に獨立の事業を營むに如かず。太平洋廣しと雖、その水は此方に有爲の帝國に接吻し、彼方に希望の大陸を抱き、人間航海の術を知りて以來、海は彼我の間を隔絕するの深淵にあらずして却つて兩者の聯絡を開通する大道たり、見よ、中南米はわが對岸の隣國にあらずや、又見よ、日本の地勢は亞細亞の北部を背にし胸襟を開きて中南米に向へるにあらずや。イスパノ、アメリカは天然が吾人に賦與したる大和民族活動の舞臺にあらざるか。然り、イスパノ、アメリカは吾人の來るを待てり。墨

西哥、及秘露に四ヶ年を費したる予の見聞は予を促してこの大膽なる斷言を敢てせしむ。

さりながら予の言を疑ふの士極めて多かるべし。蓋、地理學に暗き人々の眼に映ずる中南米諸國はかのスタンレーの探險以前に歐洲の眼に映じたる暗黑阿弗利加よりも更に一層暗黑なるべければなり。

例せば南米秘露國の如きはその緯度より見れば純然なる熱帶國ならむと思はるれども、其の實氣候は頗溫和にして殊に天災地天の稀少なることは地上の極樂たるの觀あらしむ。地震、海嘯、洪水、旱魃、暴風の頻々たるわが日本國の如きは却つて地獄の光景あり。然るに同國に出稼したる勞働者約八百名の內、一時多數の病者死亡者ありしを見て、世人は直に秘露國を以つて瘴烟蠻雨の地なるが如く想像し、甚しきは同國に移民を渡航せしめたるを非とし、頻りに論難を逞くしたるものさへあり何ぞ地理學の素養なき甚しきや。何が自らその愚蒙を公言するの無邪氣なるや。しかも秘露國は之れがためにわが邦人の間に誤解せられたり。わが同胞は暗愚にして將來有望なる秘露國を見棄てむとす秘露國の事情に關しては遠からず稿を更めて世に問ふの機あるべしと雖、一言茲に氣の毒なる秘露國の爲にその究を事ぎ憫笑すべき愚蒙者の說を排し、兼ねて我人がイスパノ、アメリカの事情に疎き一證となすものなり。

要するにイスパノ、アメリカは日本人の植民地として、日本商品の需要地として、概言すれば日本人活動の舞臺として、わが同胞の最注意し且深く研究すべき土地なるに拘らず、これが事情に通曉せるもの極僅少なるは遺憾の至なり尤、前にもいへる如く此等の諸國はいづれも西班牙語を以つて國語とし、官報、新聞、雜誌法令、書冊悉く西班牙語を用ひて刷行す。從つて英佛、獨語の著書によりてイスパノ、アメリカ諸邦の事情を悉知せむとするは頗、困難のことにして到底充分にその目的を達し得べしとも思はれず。而かも我が邦に於ける西班牙語の研究は、悲しい哉、漸く外國語學校に於いて之れを敎授するに止まり、未だ廣く研究せらるゝに至らず。吾人は先づ西班牙語學の研究を大に盛にすべしと絕叫せざるを得ざるなり。蓋、言語の相異は個人と個人の間に思想の交換を妨げ友情の發達を阻害する如く、國と國との間に於いても謬見誤解を生ぜしむるものなればなり、

聞く、外國語學校の西班牙語研究生はその數極めて僅

少なるのみならず、彼等の父兄若くは知友にして西班牙語の研究を批難するものあり。難者の言に曰はく西班牙王國は今や將に衰亡に垂んとす、而かも文學上の傑作あるにあらず、科學の名著あるにあらず、何が爲に汲々として亡國の言語を學ぶやと。嗚呼何ぞ量の小にして見識の狹且陋なるや。

西班牙語は單に西班牙王國に限りて使用せらるゝ言語にあらず、米洲に十七個の同文國を有すること既に述べたるが如くにして、尚、阿弗利加の一部に及び、わが南隣、弗律賓群島、マリヤナス及カロリナス諸島にも行はる。文學上の名著にはセルヴンテスの稗史、カルデローンの戯曲ありて世界文學の傑作を以つて目せられ、學術上の大著述また尠しとせず。日本以外に通ぜざる日本語をさへ學ぶ外國人多きにも拘らず、國は假令ひ小弱なるにせよ十八個の獨立國に國語として使用せらるゝ西班牙語の研究を度外視するは何んたる陋見ぞや、敢て言はむ、同文獨立國の數よりいへば西班牙語は世界一なり。西班牙王國はその領地の大部分を失ひたれども西班牙語は今尚、依然として羨むべき廣大なる領域を有すと。

西班牙語の研究を普及せしめよ。而してその教科書としてイスパノ、アメリカの地理書と歴史を採用し、尚進むでは此等諸國の法律を研究せしめよ。これイスパノ、アメリカ諸邦をわが國に紹介する第一の捷徑なり。

同胞よ、イスパノ、アメリカを學べ。イスパノ、アメリカは文化の精粹を蒐めたる國にあらざるが故に、吾人の之れに學べと言はず。只之れを研究して今少しくその事情に通ぜよと勸むるのみ。蓋、イスパノ、アメリカ諸國はいづれも幼弱なる少年なれども、かゝる幼弱なる少年こそ將來大に望を囑するに足ればなり。

あゝ學者よ、イスパノ、アメリカに遊べ。墨國の古代文明は歴史家に研究の好題目を與ふべし。南米の森林は博物學者に珍奇の材料を供すべし。印度人の奇習は人類學者を驚かすものあらむ。優艶すみれの花に似たる詩文は文學者を恍惚たらしめむ。

旅行家よ、ポポカタペトル山頂に皚々たる白雪を踏みアンデス山中の雲に嘯く亦愉快ならずや。

事業家よ、商業にまれ、農業にまれ、鑛業にまれ、鐵道にまれ、工業にまれ、航海にまれ、爾曹の敏腕を揮つてイスパノ、アメリカの新天地に日本の勢力を扶植せよ、歐洲人に先鞭をつけられなば爾曹の活動すべき舞

臺は復、地球上に之れを得ること難し。イスパノ、アメリカを研究せよ、或る者は研究し、然る後往きて遺利を占めよ。或る者は先づ往け、往きて後に或る物を學べ。

イスパノ、アメリカの研究は目下の要急問題なり。

## 刺句撥句

▼疑獄越年

元日や夫子貧にして獄にあり

▼懸賞長歌

世を渡る三百圓の守り札

▼視學入水

老い去りて今此恥を水の中




海外 大勢

## 非門戸開放主義

### 露國の滿州及び波斯に對する政策

支那に對する露國の對度怪しむべき處多きは言ふまでもなけれど、近時傳ふる所によれば滿州は或る密約により又々露の手中に皈せりと云ふ、夫かあらぬか聖ペテルブルグの半官報は滿州より露軍の眞に撤退せる旨を頻りに吹聽し、傍ら此は素々無理强ひせられし行動なれば、其報酬として商業上に偉大なる權利を獲ざる可らずと主張しかの「ノウエウレミヤ」の如きは公々然其社説中にて門戸開放反對即ち他の各國民をして漫りに侵入を許すべからざるを唱へ、此は露西亞百年の政策に害毒を與ふるものなりと叫べり。

聖ペテルブルグの「ノウイークレー」紙は常に國土膨脹殖民地擴大の主

張者なるか、此問題に付き論じて曰く、露國が滿州に於て特權を獲得せんとするは實に正當善良なる方策にして、俠氣ある我撤兵には必らず何等かの大なる報酬來らざる可らず、而して其は商業上の絕對的特權を政府保護の下に得るの外なかるべし、と、「ノウエウレミヤ」は非門戶開放問題を支那に限らず、近時露西亞が鐵道其他の事業に就て漸々勢力を扶植せる波斯に迄論及して曰く、

門戶開放主義なるもの丶眞意義を言はゞ、其は只目前の利益又は土地占領を目的せる諸强國が後進未開の國に對する自分等勝手の主義のみ、見よ支那に於ける門戶開放は拳匪の蜂起を來せるにあらずや、蓋し如此事例へは、其國有の慣習は宗教 制度等を金科玉條として遵守せる人民が外來文明の急潮に突然襲はるゝ時は必ず起り來る可き結果ならんのみ、凡そ此等の未開國をして平穩無事の間に文明開化の域に達せしめんには、其國に對し深き同情と親和力を有せる一友邦のみが眞の扶助者たり、開發者たり、得可き事は人の熟知する所なり、而して露西亞は支那に對して實に無限の同情と親和を有し、其近時の紛擾に付ては到底超然として對岸の火災視する能はざるものなり、試に波斯をして彼の如く廣く各國に向て門戶を開放せしめたりとせよ、無數の外國冒險者等は滔々として侵入し、遠慮なくかつ幾年來の舊慣を打破し、擾亂の裡に投せしむべし、されどももし單に露西亞のみに我東方國の權利を有せしめば如何？

「ノウエウレミヤ」の最後の一節に說いて曰く

吾人はかの無謀なる該外國と異なり、先基督教の博愛寬容の主義を彼國に移すべし、即ち史の示す所回々教人民中に此主義を植ふるの任は吾人に附與せられたるなり。見よ、土地占領の爲にあらず、自國民は新市場を供給せん爲にあらず、只吾人は此人道なるものを宣傳せん爲にかの中央亞細亞の荒野を拓けり、彼地に於ける吾人の成功は通商上より見れば實に言に足らず、されども其代りには永久不滅折れず枯れざるものあるにあらずや、吾人は中央亞細亞の諸種族よりして吾人の行動に對し不信、抵抗、嫌厭等を享けし事一度もなく、却て彼等を基教に導き、頑迷不靈の徒をして從順柔和の民たらしめたり、かの獨逸の如き、英吉利の如き只單に商業上の利益と土地の占領を目的とせるもの、如何ぞ支那人と波斯人とを同化誘導するを得んや、亞細亞に於ける未開野蠻の諸國を導かんものは世界廣しと雖只我露國あるのみ。

と、勝手なる熱を吹ひて滿州及び波斯の露の勢力下にあるべきを說けり

## 猶太人問題

猶太人問題則ち世界に四散して各國民に忌み嫌はれたる猶太人か一團となり、亞細亞の本國に一獨立國を建てんと希望せる問題は露西亞羅馬尼亞等が彼等に對して採れる壓伏的政策の爲めに增々氣焰を高め今や全歐洲識者の論議を引起し其大多數は猶太人に同情と希望を寄するに至れり歐洲基督教者たる立場より此問題を論ぜる知名の士の論議は蓋し吾人に取て多少の興味無くんばあらず

英のソールスベリー卿曰く

「ジオニズム」は幾多の壓制と戰はざる可らざるも遂に成功の曉ある可し、猶太人はパレスチンに一の模範的政體を建設するの資力と智識を有するものにして、これに依て亞細亞の商業をして未曾有の盛況に達せしめ得べし、彼等今日の四割五分の人民にして吾人の希望せる一國の體裁を保てる狀況に復皈せんか小亞細亞盛況の豫想は必ず現實のものたらん、而して土耳古皇帝が其領土內に於て猶太人の自治政體建設を禁止す

べき事由は一も存せず、如何となれば二千五百年の長日月間其氣力を抑へて壓制の下に屈せし此人種には充分に現代の進歩に伴ふを得可き勢力と耐力を有せるを以てなり。

▲佛蘭西の前總理ブールジェー氏曰く

猶太人は他人種に對し餘りに個人的に、餘りに不調和的にして、同化混合する事難し、ジオニズムはかの排猶太人主義に對しては實に必要ある戰爭たるなり。此排猶太人主義たるや深く猶太人の自由精神を抑壓し彼等をして他と競るを得ざらしむる事猶太人の性質の夫よりも尚幾十百倍せるものなり、而して今や猶太人は新來の種族として堀起し、勇敢に大膽に其離利の新開展を求めつゝあり、吾人は彼等が豐富なる智的教育を有せるを見て多きを彼等に期する能あり、ジオニズムは排猶太主義の消滅劑として起るべし、一度彼にして起たば後者は存在の必要を失ふうべし。と

▲巴里大學の教授マサリック氏は曰く

余はジオニスムニ對し深き同情を有するものにして、現今佛國に於ける國民主義なるものよりも尚多大の價値あるものなりと信ず彼の主義や進歩的復活的にして遂には我全世界の文明を改革するに至るべし。と

▲有名なる晉の小說家マキシム、ゴルキー氏曰く

余は猶太人種に對し深く同情すると共に其享けつゝある壓制を見ては實に悲涙を禁じ能はざるものあり、余は彼等の大膽にして何物も彼を抑ゆ可らざる精神を嘉みす、彼等の血管は眞紅の血流常に燃へつゝあり、而して傍ら其捧持せる主義が世の輿論を引起せるは其主義の决して空想にあらず、現實に堅固なるものたるの證跡あるを見て余が心は雀躍せり余は彼等が此大主義を持して彼大事業を成功し、彼等卑劣賤陋の號を却て壓伏せんことを希望す。と

▲教授ヒーマン氏曰く

猶太人若し今日にして起つ事なくんば其は猶太人全體の自殺と稱するを得べし、彼等は只に權利を有するのみならず又實にせざる可らざるの義務を有せり、彼等が今日有せる主義は決して夢想に終る可らず、見ずや歷史は幾多埋沒せし國民の奮興せる實例を示すにあらずや、然るに獨り猶太人にして其を爲す能はざるの理あらんや、況んや彼が如く天賦の才能を有せる人民に於てをや、彼等にして激烈なる戰鬪手段を以て崛起するも其は遂に無效なるべし、されども今日彼等が採れるは皆悉く平和的道德的なれば彼の再興は蓋し决して不可能の事にあらず。と

此他幾多名士の議皆猶太人興起の有望を說くものにして、一人として排猶太人主義を說せるものなし、されども只露西亞に於てのみ其排猶太人主義の新聞雜誌は之に對し嘲笑の言を放てるを見る。

## 來る可き獨逸兩黨の軋轢

獨逸中央黨に對する社會民主黨の作戰計畫は全歐洲の注目を引けり、而して兩派何れも相比敵せる二大黨にして各員皆能く首領の指揮に從ひ團結頗る强固ならず爭鬪は中々激烈なるべしと思はる、而して兩派爭鬪の焦點は全一にして平民の投票を獲得するにあり、その中央黨は南方諸洲の農民間に强固なる根底を有し、社會民主黨は大都會に於ける傭備者間に勢力を振るひつゝあり形勢如此なるにもし來る總選擧の結果中央黨民主黨に一歩を讓るに至らば、皇室の威嚴を殺ぎ皇帝維廉の勢も大に減ずべし、と傳へらるヴアチカンの政府御用紙「オプセルベートルロマノ」曰く

社會民主黨が來る總選擧に當り大に中央黨と戰ひ、ライン地方にて

さへ之を淩がん事を目的せるは種々の事情に依て最早疑なき事なり、而して民主黨の各派は宗教上より言ふも經濟上より見るも今日は尤も自黨の好運機にして、かの稅率問題の如きは中央黨に對しては一の爆烈彈たる可し、而して社會民主黨は中央黨に依て農業地に與へられし、保護の過當な事に聲言して、以て加特力教派勞働者間に軋礫を生せしめんと努力しつゝあり。

と併し此ウアチカンの半官報は眼前に迫れる爭鬪に付ては何等の意見をも吐かず、翻て獨逸に於ける中央黨機關紙の態度を見るに頗る冷然たるものにして「コーニッシュフォルクザィツンク」の如きは民主黨如何に勢力あるも、如何に奮獅の勢を以て攻め來るも中央黨は少しも恐るゝ所なしを濟ませり。

## 海牙仲裁々判所は兒戲に終らん

和蘭首府海牙（ヘーグ）の万國平和仲裁々判所は何等の故障軋轢も起る事なくして第一回の判決を終へ、問題たりし米墨兩國間の「加特利力教教徒資金事件は全く合衆國の勝利に皈




THE EVOLUTION OF SOCIAL DEMOCRACY IN GERMANY.—From *Jugend* (Berlin)

し、墨國は百四十二万六百八十二弗餘の賞金を年賦四万三千五十九弗餘宛支拂ふ可きことにて落着せり、次に公判場に上る可きは、日本に於ける外人家屋稅問題にして題亦容易に終結を告げざる大事件なるべし、此外仲裁々判所に提供せられ居る問題は實に夥しきものにて南米各國對歐洲諸國及北米に關するものゝみにて已に八件あり、されば今後暫時の間仲裁判所は公判に隙なるべしと云ふ、然して如此威嚴赫々たる法廷を以て兒戲に類すると一言に嘲笑するは實に不當なれども、此平和裁判所は世に幾多の不平を鳴らすもの多く無用の長物と消るは殆んど今や公然の秘密と云ふも可なるべし

英國評論の評論記者ステッド氏曰く

露國の威勢に恐怖し、又世の囂々たる歡聲に促されて萬國平和會議に調印せし國々も今日となりては海牙裁判所の解散を喜ぶもののみならん、余は去年十月此裁判所を參觀するの機を得、併せて將來建築さる可き家屋設計書を見たり建築は五ヶ年繼續にて其費用は甚だ少なく一ヶ年僅かに百磅なりと云ふ、又家屋の后には美麗なる小庭園を作り、壁には此建築に付て力ある各國皇帝大統領宰相全權委員等の肖像を揭ぐべく、

公判廷は各國の紋章及名稱を附せる椅子を供へ各仲裁委員の着席用に供せらる、而し他の室は圖書室にして其書架を満たす爲に支出する年々の購入費僅に四十磅のみ、此外休息室、書記室及び他の必要なる室々を供へあり、如此小規模のものあれば、仲裁々判を臨時のものとすれば此建物は實に能く其目的に協へり、されどももし何事によらず國際間の出來事は此處に提供して判決せらるゝ樣になる時は此の如き建物にては不充分にして又不便極まるものたるべし。

建築上よりの非難如此なるに更に他方を顧みれば、無形上に於て仲裁々判所は充分世の信用を得可きかと云ふ疑問あり、之に付ては全く倫敦なるスペクテートル紙論じて曰く

仲裁々判の一大困難は、爭論者等が其判決者に充分の信を置かざるにあり、從て其判決に對し容易く服從せざるべし、素より完全なる信用を博す可き裁判所を設くるは不可能の事にあらざる可きも、今日にては未だ設けられず、よし又設立せんとするも其の所に一大障害の存するものあり、此は未だ何人も說かざれども、各外交官等は充分に熟知せる處のものあり、而して又激烈なる賄賂行使又は判官の買收運動行なはるゝに至るべし、かくて其判決は世の信を繋ぐ能はず其效を奏する能はず遂に仲裁々判所は一箇無用の長物に終る可し。

又此裁判所に於ける言語の混合は、調査糺問辯論等の上に於て非常の煩雜を來たし、爲に豫期せられざる困難を惹起し、或は判官の數を減し、或は訴人をして失望に終らしむる甚少なからず、現に前回の米墨兩國間の敎徒資金問題の時の如きも、委員中マンセット氏の如きは佛語は勿論英語も十分ならず、合衆國の諸員は何れも佛語に通達せされば英語を以て辯し、從て一々譯解を加へざる可からさるに至れり、或日の如ぎは米合衆國の辯護人ペンフイールド氏は立派に自國語たる英語を以て論辯せしも、對手の墨西哥委員たる白人「ベルナエル」氏は之を了解するに充分の語學なきを以て明日に答辯を猶豫せられん事を請ひしも、初はマルテンス博士の灣見にて直に拒絕されしも、ベ氏は了解し能はざる質問に對して即答する能はずとて堅く自己の權利を主張して動かざりよなり幾多交渉の后漸く氏の請求通り翌日迄延期せられしと如此事例頻繁なるより法廷の混亂と公判の遲延する事は實に夥しきものあり。

如此有形無形共に仲裁々判所に對しての缺點を今後絕滅せざる限りは到底露帝の目的の万一を果す事難かるべし

# 海外雜纂

## 加奈陀政府と大阪博覽會

### 同國農務省より我社への報告

來る三月より開設さる可き我が大坂博覽會は、世界各國の協賛多き中にも加奈陀は、殊に力を盡くして自國産出製品等の出品に務め、其代表事務官ウイリアム、ハッチソン氏の如き已に來朝して大坂にありて事務に鞅掌しつゝあり、然るに頃日彼國農務省は、我社に一書を送て其計畫及出品中の最も重要品たる麥粉に付て長き報道を寄せたり、茲に要點を抄譯すれば、曰く

我加奈陀より大坂博覽會に出品する中にて最も重要なる事は、オッタワ州の老熟なる麵麭製造師ゼームソン氏が自から渡航して會場にて加奈陀麥粉を用ひて麵麭の製造をなし、加奈陀粉の眞價を日本國民に

示さんとするにあり、元來我加奈陀の麥粉は甚だ良好なるものにて實際の分析上最上のハンガリー粉より蛋白質の量殆んど一割多く、從て粘氣強く燒上り實に見事なり、されば日本國民にして此點に注意せば必ずや需要非常に增加し、昨年の輸出額八千四百十弗に幾十倍するに至る可し而して加奈陀粉にては最上の麵麭を得るは勿論、量に於ても又他國産麥粉に遙に超越するものあり、或第一等の麵麭燒人は三樽の加奈陀粉を使用せしに一樽よりは百四十六磅、一は百五十一磅、一は百五十二磅の最上麵麭を得たりと云ふ、而して又運輸交通の上よりも云ふも、加奈陀日本間は交通尤も頻繁にして且つ安全なれば從て運賃其他の入費も少なく、彼此の便利此上なし、今や我本國は日本と兄弟の盟をなし、我國亦弘く門戸を開ひて日本の來るを俟つ、好機之に超ゆるもの何時か亦あらんや云々(下畧)

## 新發明潛水艇

每年一ヶ月間に平均百八十艘の船舶は其貴重なる人命と價ある貨物と共に海底の藻屑となりつゝありと云ふ、而して之を救ふ方法の完からざると全然に、一度海底に埋沒せしものを拾上ぐる法の如き實に不備極まるものなりしが、玆に伊太利人シグノル、ピノーなる人は一の小潛水艇を發見し以て容易に此等の收拾をなし得可しと公言せり、而し此發覺に關し博士カーロ、イベルチ氏が「時事評論」に寄せたる論說を見るに曰く

レグノルピノーの名聲は蓋しマルコニーにも劣らざるものあるべし彼は元來機械師にして其發明せし潛水艇はかの潛水々雷艇の如く破壞殺諧の所業をなす爲にあらずして、空しく深海の水底に埋れる實を再び世に顯はさん爲なり而して此水艇の効用を聞くに

(一)此潛水艇は長さ漸く三メートル位のものなれどもよく百五十メートルの深海底に沈むるを得、發明者は少なくも百四十回の試驗を行ない百三十メートル海底にて充分の動作をなし得るを確めたり

(二)僅々二人にて十二時間一度も海面上に浮ぶ事なく以て安全に從事し得可し。

(三)海底に沈沒せる物品は如何なるものにても艇の硝子窓より明に見るを得、

(四)艇は一秒間三メートル平均速力にて昇降移動自由自在なり

而して海底の如何なる場所にても思ふ儘に留置し幾時間にても水に動さるゝことなくして止まること得、而して其運動は電氣の推進機を附せるものにて其は單一の車輪にて構造甚だ巧妙なり、

此の有益なる潛水艇の發明者は又他にも一種の水中透見器とも稱すべきものを發明せり、而して此は前述のものよりも尙一層の聲譽を博すべきものなり、今水中の或る深さに沈める物體を明に見る爲め、又は其物體を寫眞せん爲か或は其物體を引上ぐる最良の方法を案出せん爲に此器を用ゆるは効用偉大なるものあるべし、發明者は自から數回の實驗を地中海にて試せしが其結果は甚良好にして、當時彼の用ひしは極めて下等の品なりしも、周圍千五百メートル立方約一万五千メートルの海面に於ける諸物體は一として之に反映せられざるなかりきと云ふ、されば此ピノー氏の發明たる二種の物品にして眞に實用に適するを得ば今後海中より拾收せらるべき品の價は蓋し非常に莫大なるものあるべし。

## 世界各國美術館第一の名畫

フレデリック、ドールマン氏は歐洲大陸各國の美術館に向ひ、其所藏に

か丶古畫中にて最好なるもの丶撰擇を請ひて得たる返事を二「スツランドマガジン」に掲げしが、其中より各名畫の名稱丈を擧ぐれば即ち如左、但し之は氏の請に應じ各美術館にて各審査官立會ひの上決定せしものなりと云ふ

佛國ループル美術館所藏　レオナルドドヴンシ筆ラオジオコンダ
和蘭アムステルダム仝　ラムプラント筆　夜警
仝　海牙　ポールポツター筆　牡牛
伊太利ヴエンナ　ルーベンス筆　イルデフオレソアルター
獨逸伯林　エイツク筆　ウオーレツプオプラム
仝　ドレスデン　ラフアエル筆　マドンナ
仝　ミユーニヒ　ムリーヨ筆　賞瓜
アントワープ　ケンチマスチー筆　デセントフロム　クロッス
伊太利フローレンス　ピツチ、ラフエアル筆　ラマドレナデラセジオラ
仝　ウイツジチヽヤン筆　花
羅馬ブルゲーゼ　チヽヤン筆天の愛と地の愛
ヴアニスのアカデミー　チヽヤン筆　處女拜天
プラード　ヴエラスケエス筆　メニナス

# 碧眼錄

▲現獨逸帝 は毎年クリマスに贈り物として十万八千圓を消費し玉ふ

▲英皇太子 は毎年の例として二千圓の品物をクリスマス祭の贈物として水兵へ下賜せらる

▲英國より 印度と支那へ送り出したる前年のクリスマスカード及び贈り物は二千五百個の郵便大袋を要せり

▲全獨地方 郵便局のみにてクリスマスには毎年四千人より五千人の臨時雇員を要す

▲シカゴ大學へロツク.フエラー氏が投じたる寄附金三千万圓に上れり同大學は全く氏一人にて出來上れり、去年一年中には三百万圓を寄附せり

▲紐育には 四十一万人の獨逸人あり

▲獨逸にて 兒童の義務教育年限は男兒十四才まで女子十三才まで

▲布哇島は 面積に比較して世界第一人種の混雜せるところ

▲印度には 一万七千人の猶太人有り其三分の一は歐洲より移りしものなれとも三分の二は已に大古ソロモン王時代に移住せるものなり

▲ストライキの二割八分は單に賃金を増すの請求、一割一分は單に時間の減少を請求する爲めに起る他は兩方又は他の原因より起るとは歐洲統計學者の語るところ

▲燕は鳥類 中體温高きものゝなり華氏百十二度より下らず

▲綿の種類 總計六百、其中四百は亞細亞に、二百は亞弗利加にあり

▲マニラより濠洲に行く航路は太洋航海中最も島多きところなりマニラ濠洲間全く陸地を見る能はざるは僅に二日

▲西藏の湖水にてMANASANOYARAと云へるは世界最高の湖水なり、海拔一万九千呎より二万呎のところにあり

▲山羊を試みたるに五百七十五種の植物中僅に七十三種を嫌へり、豕は二百四十三種の植物中僅に七十二種を嫌へり

▲懷中時計 は通常一秒間に五回キチ〳〵の響をなす即ち一年に一

億五千七百七十八万八千回キチ々々の音を出だすなり

▲露帝より英の皇室へ毎年クリスマスに贈る物品は露國特産の鱘魚を以て常例とし玉ふ

▲ルーマニア國にはクリスマスにダニユーブ河上にて禮拜式を行ふを習慣とす

▲人間の脉搏は百八度以上になりし時、九十三度以下になりし時、共に危險なり

▲全身の血液は二分間毎に一回心臓を通過す

▲四肢を持てる動物中、蝙蝠は最も歩行することの拙なる動物なり

▲北極圏内には微細ながらも花を着ける植物の數七百二種あり

▲英國海峡を通過する船舶は、一日平均九百艘より一千艘に上る

▲英國水夫は十万人に就て百九十九人の發狂者を出だし、工夫機關師は十万人に六十六人の發狂者を生ず

▲英國人の生れること最も多き月は、正月二月三月の三ヶ月なり

▲佛蘭西の衛生局は小兒滿一年の間に一回、十一歳より二十一歳の間に一回種痘の檢査を行ふ

▲英國カンターベリーのセントマルチン寺は全國にて現今猶用ひつゝある寺としては最古のものなり

▲歐羅巴各國中里數の最も短きは露西亞の一バルス（一露里）にて、距離千百六十五ヤードに過ぎず

▲白耳義アントワープの禮拜堂には九十九個の鐘有り




# 洋鬼の日本觀　下

A story of the yankees of the east

ゼラード、フオーク

## 樹木の愛養及び其細工

日本人は公園などの樹木を決して毀損することゝなく、よく天然の發達を遂げしむる、そして其爲には幹や枝に支柱を立てたり又は針金で引張つたり、往來の妨げになるのも構はず行つてる、又彼等は頗る樹木養成法

に長じて種々の盆栽など云ふものに、目を驚かすものがある、例令は中には高さ三呎に満たない立派な松や楓の齢已に三百年以上のものがある。

京都に近き琵琶湖と云へる湖水の岸に一本の大松樹がある、それは地上數呎の處から枝が四方に岐れて、殆んど水平線狀に走り、約一エーカーの地を掩ふて居る、如何に日本人が自然物の保護に熱心なるかは此松の樹の手入を見て充分分る、重なる大きな枝の下には花崗石の大きな柱を立てゝ重量を支へ、小さき枝はほんの細枝迄殘さず釣竿の竹の樣なものを電信線の針金で卷付けて下からは各々支柱を立てゝある、そして波に洗はるゝを防ぐ爲に半圓形の石垣を築ひてある。もし此木が亞米利加の都會近くにあつたなら、イッの昔に薪として切倒されてるであるてあろう!

またかの有名な菊の花は種々の動物、或は古代の武士、或は戰爭の狀況など、皆此花を其儘利用して拵へ上げ、色彩なども巧に配合して、實物を見る思ひをせしむる、而して之に用ゆる菊花は皆殊に其目的の爲に作られたものである。

實に日本人は世界各國民中樹木を最も愛養し、又巧みに細工する人民である。

## 忘るゝ能はざる中禪寺湖

三百年前に生存せし日本の大英雄が、我遺骸を安置すべきの地此處ならでは有るべからずとて、殊に選定したと言はるゝ日光、實に彼の眼力に違はず風景の雄壯華麗稀れに見る所で、殊に其殿堂の美と麗とは如何に彼の勢力が偉大なりしか、如何に此地が日本に於て最も神聖なる土地として崇められて居るかを想像せしむるに足る、其日光の街を出てゝ、かの有名なる神橋の架する小川に沿ふて、或時は薄暗き谷間を潜り、或時は峻嶮なる丘を越ゑ、或時は白布の如き飛瀑の下をすぎ、又或時は火焔の如き深紅の色せる紅葉の間を通りて、火山灰の堆積數百呎に及べる錐圓狀の丘に沿ふて攀ぢ上れば街を去る五哩弱にして、千五百呎の高所に來て居る、此所から少しの間樺や杉林の中を行けば中禪寺湖の傍に出づる、湖面は水深緑色を帶びて、四方は凡て高山に圍まれ、中に八千五百呎の高さに聳ゆる秀麗なる消火山がある、そして此湖水の排水が落下せる第一のヶ所は恰んど三百呎の懸崕であつて、其所より一哩以上の間は激流奔放天馬空を行くが如くで、爲に兩岸は犬牙晋ならぬ有樣である、蓋し此邊の景色は此美

の國に於ける美景中の更に美なるものであろう。此湖畔に一に一のホテルがある、素より純粹の日本食は所謂贅澤家なる吾々泰西人にはどうも適當しない、併しほとんど半日の間の山登りに充分空乏を訴へて居る我胃嚢は何物かの供給を請求してやまない、そこで余は旅館に入りて晝飯を命じたが、其用意調はない先に熱き日本酒の一瓶は胃の機關を運轉せしむる燃料として持て來られた、此酒と云ふものは鳥渡ビールとブランデイーの混合した樣なもので、米の汁で作られる、そして薄ひ酸味を帶びたるセリー酒の樣な味を有つて居て、嗜好ある人には充分の快醉を取ることが出來る、やがて用意が出來たとの報知を得て、余はどんなものを食はすだろかどんな料理が並べてあるだらうかなどゝ考へながら食堂に入つた、而して我食卓に供せられたものは、曰くスープ、曰く生々した湖水の魚のフライ、犢のシチユー、燒肉、パンケーク、プツデイツング、及最上の佛國赤葡萄の一瓶で、凡ての食物は最も多く、味も口に適して、盛れる器は皆極めて清潔な磁器、硝子、銀製のもので、侍んべる給仕は可憐なるムスメサンである、加之食堂の玻璃窓より眺むれば、大噴火山脈は四方に蜿蜒重疊して、彼方には淡青靜かなる鏡面の樣な湖水がある、其畔りには三四の小屋が散在して幽邃閑雅な趣を示して居る、又湖心微風に搖ぐ小舟の帆如何にも深き詩味を現はせる樣に見へる、余は多時此景色の美に打たれて世を忘れてたそして此美景とかの美味か飽迄賞玩した報酬は心附けを加へて尙僅々一弗の金で四十錢の剩りが出來た。

人が老年になつた時には、種々昔の思ひ出に馳るものて、隔世の感かすると云ふが、恐らく余も其境に至つたならば、かの燃ゆる樣な紅葉の色も、淡青清朗な空の色も、又は深綠の湖水も、削つた樣な絕壁も、奇々怪々なる瀑布も、かの火山も此森林も、只漾々たる一塲の幻影の如くに思はれるであろう、併し此午食は確かに心の底に殘て決して消ゑ失する事がなかろう、そして其に聯關してかの秀麗も、此閑雅も、明に余が腦裡に書き出されて、かくて余は永く中禪寺湖を忘れまい！

## 日本の見世物

日本では手品見世物など、何れも舞臺が最も外部にあつて、只一枚のカーテンで道路と境をされてる、今や演じ居る物の一番妙所に至つた時一寸其カーテンを引

上げて、往來の群集や通行人に一瞥を得させ又直ぐに下して了まう、つまりそれて外方から覗き込まして中に入る氣のない連中ても、其妙所に引付けられて、直に切符賣場へ驅込む樣にするのだ、又此中には人數の定まらぬ一の音樂隊があつて、演技者の中て、一寸隙のあるものなどが、好々に合奏するのてあるから、三人位てやつてる時もあれば、二十人の大勢てやつてる時もある、そして其樂は重に亞米利加の樂譜中て活潑なのや、愛國的のものが多いが、素より奏樂は頗る不完全なものてある、或劇場ではメァアザーアンマザーウオズアイリッシユの歌を數時間引切りなしに奏して居たのを聞ひた。

## 生噛りの文明や不消化の進歩は今に消滅せん

殆んど二十五世紀の間、日本人は自分の要する所に應ぜる、百般の方法、手段などを工夫して、遂に其を發見し、依て以て孤獨の生涯を安樂に送つた、而して今や突然世界の有力なる國民の仲間に入り來りたが、もし今より强大にして殘酷なる或國民の爲に大打撃を蒙ることがなかつたらば、今に强國の一となるであろう、近頃迄彼等が聞きも考へもしなかつた現代の發明を着々應用せる其敏捷と、諸方面に於ける現代の智的進歩を獲得する其巧妙は、ヨーァの腦より湧き出づるミネルヴァの神話を新らしくしたものと言ふべしてある。

今日ては彼等は尙貧乏に苦しみ、生噛りの進歩や不消化に弱て居るし、又對立に困難なる諸强國の賦課に打撃されて居れども、國內は絶へず嘗て見ざる急速の進歩をなし、已に現世紀の文明は凡て應用され盡したと言はれて居る、もし文明なる語の意味が物質的に限らるゝものならば此聲言は嘘てない、而して他の方面宗敎に付ては彼等は吾人の敎導を待たないものてある、世界何處の地方に日本人の如くよく文明を應用する才智を持てるものがあるであらうか、又他の國民中或は最高の文明國中ても古來の習慣凡俗と全く異なる事物思想を日本の如く巧に同化して少しの損害もなからしめ能ふものがあるであらうか?

我々は日本人に對する非難を聞く事が甚だ多ひけれども、之等は重に其人の職業上商賣上彼等中の最も下等人民との交際をする人の口からする事が多くて、併も夫は不正の利を攫まうとして却て看破され失敗した仲間なのである。

# 明如上人の逸事

大内青巒

故本願寺法主光尊上人の行實傳記などいはん類のものは、之をものすべき人ありて、ものすべければ、やがて委き事を世に公にせらるゝことあるべけれど、予は三十餘年このかた、不思議にも深き因緣ありて、上人に昵近したること久しければ、おほかたの知り得ざることを、見もし聞きもしたること亦た少なからず、されど今あからさまに他人に告け知らすへき要もなきを、ことさらに言葉にあらはし筆に載すべきにも非す、その中には折にふれて同志の人に物語りたることありしふしも無きに非す、今この際に其の曾つて物語りたる一二點を、筆にものすることゝなしぬ。

△

上人は多くの貴族中に比類まれなる聰明にして品行正しく且つ進趣の氣象に富みたる人なりし、そは貴族にしてはと云ふに非ずして、いづれの階級に置くも常人に傑出せる人なりき、道理を考へ時勢を察し利害を見ること明らかにして、しかも小心翼々たりしかは、内外百事變化劇しき時世にあたりて、三十餘年間の寺務に聊かも失敗なきことを得たりしなり。

△

佛敎我が國に弘まりてより一千三百年、明治維新の初めほど逆境に沈淪したることは聞きも及ばす、排佛毀釋の暴擧は、寧ろ粗忽なる壯士輩の常として尙ほ恕すへきも、維新の事業やゝ整頓の緒に着くべかりし明治五六年の交にあたり、大政府の命令として敎導職といふものを置き大敎院といふものを建て、佛敎諸宗を神道の附庸の如くし、上は國學者神官巫祝等より下は徘徊者流賣卜者俳優落語家軍談師までも、其の謂ゆる神道敎導職といふものに補任し、而して天臺の座主も眞言の長者も南禪妙心永平總持の勅賜禪師の大和尙も、東西本願寺の門跡法主も、皆彼の神道者の下位に附きて、政府の都合よく定めたる三條敎則といふものゝ趣意を庶民に說き諭さしめられて、各自の奉する佛道の敎意宗義は交え說くことを許されさりし時節ほど、殘酷にも亦た滑稽なることは、三國傳來二千數百年の佛敎史上またと再び見聞すること能はざる奇々怪々の現象にはあらざりしか。

△

上人はやくも其の時勢の非なるを見て、この殘酷にも亦た滑稽なる逆境に入るに先たつこと兩三年、何事も歐米諸邦に倣ふ世のさまなれは、彼の國々の宗敎制度を視察するの急務なるを思ひ、速かに自身に洋行をと心ざしたるに、不幸にも前住光澤法主の遷化にあひて、寺務相續の大任に當りしかば、自から洋行することの叶はざりしは、如何ばかりか口をしかりけん、遂に連枝なる梅上澤融師に島地默雷赤松連城二氏を添へ、岩倉公の歐米視察に隨伴せしめて、彼の國々の宗敎制度等を觀光せしめられたるぞ、實に我國宗敎者の海に航して歐米諸邦に赴きたる權輿なりしなり。

△

果して其後彼の奇々怪々なる境遇に立たざるを得ざるに至り、德川氏累代の香華所たりし增上寺本堂の本尊を撤して神鏡を樹き、之を造化三神の神殿と稱し、朱に塗りたる三門の前に白木の大鳥居を立て、三門の樋上には傳敎弘法兩大師を始め、諸宗祖師の眞影を掛け、諸宗管長が紫緋の袖をつらねて、神道者流の後に隨ひ、四つ手八つ手の打ちかたなど習ひつゝ、無相福田の袈裟を破りながら魚鳥など捧げて、謂ゆる神前に拜跪する有樣、實に目もあてられぬ慘狀なりしかど、諸宗各派の高僧碩德など言はるゝ人々、誰れ一人も之を怪しむもの無きのみかは、中々に佛法囘復の幸運にほこる者さへ少なからざりしこそ淺ましけれ、然るに上人は時々海外なる島地赤松諸氏より、彼の國々の景況を報しこしたるを讀む每に、慷慨悲憤に堪えずして屢々落淚せられ、神經を痛められし極醫師の懸念おほかたならぬこともありけり、予は其頃日夜親しく左右に侍したりしかは、今も尙ほ其の情况恍惚として耳目の間に在り。

△

されと逆水の激流に敵すべきにも非されば、心ならずも諸宗各派の人々と共に彼の大敎院に出仕して神道者流の下風に立ち、口をしき月日を過こせるうちに、やがて島地氏は歸朝して彼の地の樣子委しく復命し、且つ一日も早く神道と分離して、佛道諸宗相提携し專はら釋尊の遺敎を擴張して、歐米諸國にまでも廣宣流布せしめたまへと勸めまゐらせしかば、上人歡喜踴躍して先づ鄰山なる東本願寺の光勝法主および專修寺錦織寺佛光寺等の諸法主に謀り、眞宗各派連合して他の天台眞言禪淨土等の諸宗を誘ひ、神佛各自に其の信奉する所の敎義を以て、國家にも社會にも盡す所あらん

との議を提出せしに、浸ましや天台眞言等の諸宗派に於ては、一人も此の議に賛同するものなく、眞宗のうちにても佛光寺と興正寺は諸宗と共に神道に随ふこととなりしかは、已むを得す兩本願寺と専修錦織兩寺とのみ、四山合従して神道及ひ諸宗の連衡せる大敵にあたることとなりしに、政府も亦た今は先非を悔ひなからも、非を遂げんとするの情なきに非す、且つ神道諸宗の防禦はげしきために、容易に分離の願を許さす、紛々擾々の間に兩三年を經過して、遂に政府は上人等の願を許せるにも非す、神道諸宗の意を容れたるにも非す、根抵より改めて自今神佛合併布教相成らすと云へる一片の命令に、大教院を廢せしめたるは明治八年の春の頃なりしが、其の間の苦辛慘憺いかばかりなりけん、今は昔の物語りに過ぎざれど、現在今日諸宗各派が、とにかく各自に門戸を張りて、其の祖師開創の宗義に依り、學問なりとも布教なりとも爲し得らるゝは、皆これ上人の賜ものなりきと云ふことを、長く記憶して忘れさるやう心がくべきことにこそ。

△

上人の宗意安心に於ける、當然のこととは言ひなから、實に一宗の頂顛を蹈み祖師に代りて化を董すの任に堪えたるものありし、或時某老宿が世間より異安心なりとの嫌疑を受け、遂に上人の裁斷を蒙ることとなりしに、上人は命して某の常に領解する所の趣意を答記せしめ、其を批判して字句までも訂正せられたることあり、其時も予は親しく左右に在りて、其の實況を見聞し、且つ其の批判訂正したる所をも、原口針水老人と共に一覽したりしが、他の學術文章等の上より言へは、到底企て及ふへきにも非ざる、某の安心領解を褒貶したる、其の一言一句も苟くもせさる、又其の字句修正の妥當なる、予の如き門外漢は更にも言はす、其の宗門に於て碩學高徳一世の師標たりし針水老漢も舌を卷きて驚歎し、眞に高祖聖人のりうつりたまへるにやなど言ひしことありし、こは僥倖もあるへく天才もあるべけれど、また其の人となりの一斑を知るに足りなん。

△

近世の高德と聞えし淨土宗の行誡上人は、月こそ違へ宗祖大師の忌日に往生すべしと言はれ、四月二十五日に大往生を遂けられたりしが、今光尊上人の往生は宗祖大師の月忌なる一月十六日なりしこと、其の平生に祖師を慕はれたる程も思ひやられて、偶然とのみ言ひ

難く覺ゆるぞかし。

△

皇太子妃殿下の姉君なる籌子姫は、故皇太后陛下の慈慮を以て、幼少の頃より本願寺にて養はれ、遂に上人の長子にて本願寺第二十二世の法主たるべき光瑞師の夫人たることに許嫁せられたれとも、光瑞師滿二十五歳に達せされは、實際の結婚せられすとのことなりしが、第二子たる今の錦織寺法王も亦た、皇后陛下の玉の御聲もかゝりて醍醐侯爵の姫君を一條公爵の家に養はれ、客冬許嫁の禮は擧けられたれとも、なほ滿二十五歳に達せされはとて、名のみに止まり未た其の實に就かせたまはすと聞けり、此の一事を見ても上人の家庭教育に如何ばかり心を用ゐたまひけんと、推し量られて有り難し。

△



上人の宿痾は數年前に發し其後屢々危篤に迫りしこともありしに、長子光瑞師の洋行を許したるのみならす、其の中央亞細亞を横斷し葱嶺を踰えて印度に到るの危險を妨けす、思ふまゝに其の意志を遂けしめられたるが如き、上人かつて先考の喪にあひて、渡航の志を果さゝりしに懲り、光瑞師をして十分に其の宿志を繼かしめたまひしなり、されど今より僅に四五ヶ月を經れは、無事に歸朝して歐亞横斷の辛苦艱難を莞爾の間に物語らるべきを、遂に其の期に及ばして往生したまひたる、お心のうち如何にありけん。

△

上人平素一の嗜好なし、たゞ和歌は天才にやおはしけん、また暇あれは好みて歴史を讀み、殊に古への禮儀作法を喜ひたまひしかは、諸般の法要儀式等に大に改良を加へ、梵唄聲明音樂等に至るまで、頗ふる面目を

一新し、之を他派にくらふれは、ほとんと同宗には非さるかと思ふほとのこともあるに至れり。

△

上人十數年以前より頻りに著述に志を勵まし、種々の考證等少なからされど、中に就く「佛會紀要」と題せる一部の著書は、實に我か佛教界と歷史界とに向ひて、貢献する所頗ふる大なるものなり、蓋し昔は朝廷に年中行事といへるものありて、一年十二ヶ月中朝廷に於て行なはせらるゝ事ども甚た多き中に、正月後七日の御齋會を始めとして、十二月の佛名懺悔會に至るまて、佛事法要に關するもの亦た甚た少なからす、然るに今は唯御修法の名殘を敎王護國寺に遺したるのみにして、其の他は悉く行はれさることとなりしかは、現在實際に之を見聞すること能はざるのみならす、其の事情を詳記したる書籍さへあらされは、今のうちに諸書を考證して完全なる記錄を作らされは、千百年の間朝廷の上に行はれたる佛事法要の名だも知るもの無きに至らんといふことを、上人深く嗟嘆せられて、多くの歷史および諸書を涉獵し、皆自から筆を執りて其の要點を抄錄し、先つ其の正月の御齋會のみにても、初めに「御齋會考證」といへるもの三冊を作り、順次是の如くして其材料を集め、遂に組織整頓して、一部の「佛會紀要」を脫稿したるなり、是の書ひとたひ世に公にせらるゝに至らは、朝廷に於ける千有餘年の佛事法要燎然として火を視るか如く、歷代の聖天子いかに三寶を崇敬したまひしかを窺ひ知るを得て、吾人佛敎を奉する者の必要は言ふも更なり、世の歷史を學ふ人の上に於ても、いかばかりの參考にかなりなん、斯ることこそ實に上人の如き富み且つ貴とくして、而して佛敎界の泰斗たる人に誠にふさはしき事業なれ、おほかたの暇だにあれは圍碁點茶書畫骨董などのみ玩あそび、甚たしきは酒色に溺れ遊蕩に流れ、身をそこなひ法をけがす輩の如き、少しく此に反省して慚愧するところあれかしと思ふになん。

## 同

前田慧雲

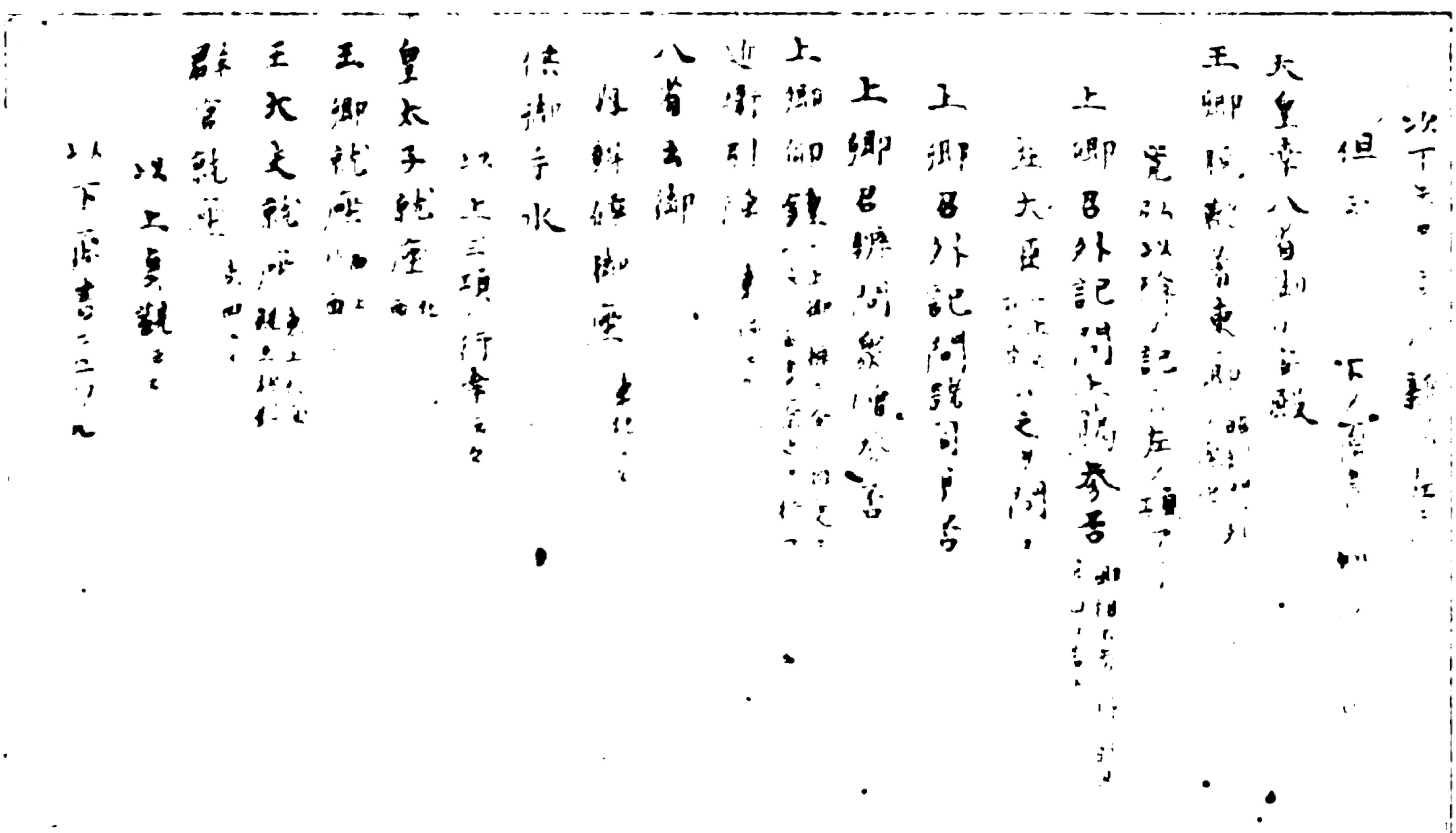
今回遷化せられたる本願寺法主大谷光尊明如上人は、維新の大變革に遭遇せられたる方なれは、その事蹟に關しては、記すへき事極めて多く、且つ歷史上吾人に資するものも少からされは、上人の生前に親しくその話

をきゝて之を記し置くは、有益のことならんと思ひ、曾て此事を上人に申し上けたることあり、上人はそれも然るへしとて、履歴様のものを手記して拙者に示され、之を基礎として當時の事情形勢等を余が親しく話さんに依て、それを筆録せよ、中には他に憚かる事柄もあれは、人に示すナヨとて、伏見三夜莊に於て、一二回談話せられたりしが、その後、雙方差支ありて、遂に等閑となり、之を果さゝりしは、幾重にも遺憾に思ふことなり、今日上人曾て示されたる履歴様のものを、篋底より取出し、愴然たること久しかりき、此に録載せん歟と思ひたりしも、餘り長けれは、略すことゝしぬ、然るに上人事歴の大畧は、既に諸新聞にも掲け、且つ之を記するは、必しも拙者には限らす、別にその人もあることなれは拙者は、今此に上人の逸事とも謂ふへきものを記さんと思ふ。

△

上人は眞宗の教義に通達し居られたるは言ふまでもなきことなるが、和歌は造詣極めて深く、歴史にも通せられ、又朝廷の故實、勅會の儀式等にも、精通せられて、而して此等の事を綿密に調査するは、平素その嗜好の存する所にして、三十年間、法務の餘暇は、專ら力を此に竭されたりと謂も不可なき程なりき、明治七八年頃より、朝廷の勅會及叡山等の大會の表白文、咒願文、並に儀式作法等に關する文章を蒐輯し始めて、竟に褎然たる大册十巻許をなせり、之を龍谷叢書と題す、又殿上障子年中行事の内にある佛會の起原沿革及儀式作法等を、國史令式及公卿日記より抜鈔せられしもの、是亦十餘巻あり、題して殿上障子年中行事佛會考證と云ふ、此等は、その寫字は、固より侍者の手に係れとも、文章の選擇は、皆躬親しく其書に就て之をなされしなり、右二書のみにても、貴族の業としては、既に多とするに足るへきものなるが、此の外に、別に上人の一大著述あり、即ち佛會紀要と題するもの、本篇、後篇、第三篇、是なり、抑此の書は、我邦歷代の聖帝賢后が、佛教を尊崇あそはされし叡慮を廣く一般の國民に知らしめんとて、勅修に係る佛會の起原沿革、及その佛像・經典・儀式・作法等を、考證的に大要を記述したるものなるが、上人が之に著手せられしは、蓋し明治十五六年頃が、その始ならん、拙者は明治二十四年五月、東京より京都に移り、新法主の學事主幹を命せられしが、此の時より、上人の依囑によりて、其事業の補助を申し上げたり、紀要の最首に、掲けし

御齋會の部は、以前既に半分程は原稿出來居りしが、拙者の補助を申したる後、大凡四回程原稿を改められたり、初めは極めて考證的に記述せられしも、是にては、その要旨を得がたきの恐れありとて、最後には、たゞ大要を記するを旨とすることゝし、一會でとに、起原沿革、佛像、經典、儀式、作法等の章段を分てり之に就ても、感すへきは、上人の精魂氣魄、是なりとす、綿密に綿密を重ねて、詳かならさるものは、飽まて之を調査せすんは置かすと云ふ風て、是が爲めに、拙者も兩三回、南都の興福東大藥師寺等へ、記錄取調に赴き、叡山の大會をも、態々參詣したることありき、上人も寸暇あれは、必


天皇幸八省
上卿召外記問
上卿召
八省ニ御
皇太子就座
王卿就座
以下原書ニ

（佛會紀要草稿の一節）

す此事に拮据せられたりしが、明治三十一年五月に至て須磨の別莊にて、漸く本編三百紙許のもの、脫稿を見ることゝなりぬ、之に引續て、後篇に著手せられ、又第三編をも著手せられて、昨秋に至て、一什全部を完成せられたり、

我邦佛會の歷史は、世上の國史學者も、未た着手し得さる所なるが、上人が貴族として、且つ法務忙劇の御身として、此の如き大編を脫稿せられしは、實に宗教界の爲めに賀歎すへきのみならす、史學界の爲めにも深く其勞を謝すへきものなり、右佛會紀要は書生學者の著述とは事異り、その文章は、佳麗よりは寧ろ質朴を旨とし、その口調は、流暢よりは寧ろ簡約を本としたる

ものにて、前にも云へる如く、考證の風を避けて、要旨を示すを勉めたるものなれは、一見するときは、格別勞力を費したるものゝ如くならされとも、實は前に云へるか如く、時間を惜ます、親切なる精神を以てなされたるものにして、他の營業的著述とは大にその撰を異にせり、昨年十二月、上人東上の時、拙者は築地本願寺に於て、上人に謁し、談偶〳〵佛會紀要の事に及ひ、その出版を勸め申したれは、余もその意なきにあらす、然るに今一往校正を要するものと思ふ、依て歸山の上原稿を取纏めて、其方に送るへけれは、校正せよとの事なりし、何そ知らん、此時が上人の御訣別なりとは、拙者の謁せしは、十二月廿二日の午後なりき、今や纔に十餘日を隔つのみにて、其人幽明を異にす、悽愴何ぞ堪へん、乃ち左の一首を口占せり、

廿年恩遇毎蒙招。疇昔謁時情特饒。旬日何知判今古。背窓寒雨夜蕭々。

上人が右佛會紀要を著述せらるゝに付き、その親切なること、今一例を擧くれは、紀要本編に東大寺授戒會の一編あり、その中に、筑前觀音寺下野藥師寺の沿革を記入せんとて、本編起草の際、上人は、その調査に苦まれ、拙者も諸書を遍捜したれとも、何事をも發見することと能はす、已を得す、その、まゝにして置かれたるが、昨年、拙者が謁せし際、觀音寺の文書が、近來少し出てたることを申し上けたるとき、上人は非常に喜はせられたり、その用意の深きこと、概ね此の如し。

△

上人は貴族なれとも、その見識は極めて斬新なるものあり、先年拙者に對しての御話に、其方等が頻に宗門の改革を云云すれとも、宗門を改革するには、先つ第一に建築物を改造せされは、實行は出來ぬ、朝廷の如きも、その建物が以前の禁裏のまゝなれは、迚ても今日の如き改革は出來さりしなり云云、又本願寺集會の事に就ての御話に、本派に於て、末寺の者が本山に對して言論を憚からさる樣になりしは、三業惑亂がその原因なり、維新の際、本山の改革を實行したるは、諸宗の中にて本派が率先者なり、是も三業惑亂の結果と謂ふへしと云云、此等の眼光は、紈袴者中に於ては、罕に見る所なりとす、昨年十二月、拙者の謁せし時、上人は、近來宗門に於ても、佛事に用ゆる唱歌を製定するの必要に迫れり、眞宗教義中に於て、何れの部分を唱歌に製するを適當なりとする歟、其方の意見を認めて送れよと垂囑せられたりしが、今は右の垂囑に答

へ甲すことに及はさることゝなりしは、誠に遺憾の至なりとす、然るに、他日眞宗内に於て、唱歌を製定せらるゝことあるも、その創意は、之を上人に歸せさるへからさるなり。

（六）

上人は、近來本山の祖師堂鴻之間、飛雲閣等を始め、其他別院の創建・沿革・及建物等を、一一調査して、一部の本山誌を編輯せしめ、佐々木狂介之に從事して、一往脱稿せりと云ふ、是亦上人の傳を記するには、必す載すへき事件なりとす、明治廿七八年の役に、上人が各師團を慰問せられしとき、拙者も隨從したりしが、當時上人の勉勵には、誰れも感服せさるものはなかりき、その時、紀行を錄し置きたりしが、本山にて之を各師團慰問紀要と題して活刷せり、その中に、當時の狀を大略記し留きたり、上人化導の勞を知らんと欲するものは、披て見るへし。

右の外、上人の逸事に就て、拙者親く知れるもの、猶ほ多くあれとも、姑く他日に讓ることゝせん。

（氏の談話に依る）

# 善魔曰く（其七）

青柳有美

▲西郷隆盛の亂と江藤新平等の叛とは、都を京都よりして東京に遷せし結果なり。

▲遷都は國家覆滅の最大因なり。羅馬大帝國の衰亡は東西帝國の分裂に其源を發すれども、此の分裂は都をローマよりしてビザンテイヤムに遷せしに因る。周室の分裂衰滅も都を東遷せしに起り、後魏の破滅も又遷都に基因す。

▲神に祈るべし。神に感謝すべからず。

▲女子に對する最大慈悲は、之を教育せざるにあり。

▲女もし劣情の勃然として心中に制へ難きものあるに至れば、必ず首を稍々横に傾け、眼球を叉ちへに廻轉して四十五度に睨み、口もとに少しばかりの微笑を漂はしむるを法とす。

▲餘り多く女を愛し續けたる男は、その變化として己れを愛する女の、常に側に侍らんことを希ふに至る。是れ放蕩家の不思議にも妻を迎ふるに熱中し、遂にそのノロケに日も夜も足らざるに至る原理なり。

▲後の代、もし日本に謀反人出でなば、そは必ず臺灣と其守備隊とに據るべし。しかも、今の生蕃地に陣取られなば、その兵數たとひ少數なりとて、之を討伐するの難き猶ほ米國のアギナルド軍に於けるが如けむ。

▲知らずや、恩給は官界の大事件なるを。

▲朝に源氏を送り夕に平氏を迎ふるもの、豈に獨り女郎のみかは、官立學校の教師と生徒とも又然かなり。

▲中等教員は生存競爭の劣敗者なり、なほ耶蘇教の傳導師に同じ。故に、中等教育社會は是れ競爭劣敗者の隱遁所なり、なほ希臘の神殿に同じ。

▲秋山定輔とは、心竊に第二の星亨を以て自ら任ずる人ならんか。

▲或る日本人曰く『西洋人は妙に宗教に熱心なものだ』と。されど、西洋人も又必ずや曰ひつゝあるべし『日本人は妙に忠孝に熱心なものだ』と。

▲多讀を誇るは愚に近し。

▲鷗外は到底獨逸學者たり。博識なれども創見なし。逍遙先生は到底英吉利學者なり。不行屆なれども創見あり。乞ふ外道に踏み入り給ふ勿れ。

▲早婚は手淫に勝る。

▲動物に保護色あるは、人能く之を知る。されど、植物にも又保護色あり。茸の色の如き即ち是れなり。蓋し抵抗力の弱きを補はんとするものか。

▲非凡なる役者の身體は、人體に非ずして人形なり。

▲世界の國語中、連接語(Compound Words)の多きこと、獨逸語の右に出づるもの、恐らくは有之まじ、以て獨逸人の思想が、如何にツギハギ的にしてセコンドハンドなるかを窺ふに足らむ。

▲戀の心は、人の最も順境にある時に當りて炎々たるものなり。又最も逆境にある時に當りて炎々たるものなり。

▲或る野蠻人の間には、結婚の當日新郎となり又新婦となるもの、共にしばし逃げ隱くるゝを儀式となす慣習ありとか。人性の自然が結婚を嫌厭するものあるや知るべし。

▲プルタスの妻ポルシャだに、なほ且つ數々良人の秘密を漏さんとする心ありけり、あゝ天下の大事、決して之を女に知らしむべからず。

▲男あり、もし或る女を切愛すれば、相對せる時、必ずやその女のエキスプレッションを眞似んとす。

▲花川戸には、鼻皮屋多し。

▲嫉妬の妙藥は接吻なり。

▲我が封建の代に於て、各藩皆な學館あり、これ今の大學なり。故に各藩學館の講師は、維新以後、大學起るに及んで、皆なこれが教授たるの實力あるを示せり。されど。維新の改革者甚だ愚にして、悉くこの學館を破壞せり。是れ數多の大學を滅せるなり。而して。今に及んで始めて大學增設の必要を說く。あゝ鈍なる哉日本爲政家の經綸眼や。

▲されど、獨逸以太利などの諸國、今既に大學の數甚だ多きものある所以は、革命と共に封建時代にありし各公侯國所屬の學館を破壞せず、却てこれを助長し、遂に發達せしめて今の大學たらしめしに因るべし。日本の明治改革家もし明ありせば、我が國早く既に又二三十の大學あるべかりしものを。舊各學館の所藏書のみにて、實に好個大圖書館の基礎を數多く作り得られしに非ずや。

▲故に、明治維新前の日本は、普通教育の普及遂に今代に及ばずと雖ども、大學教育の發達は、却て勝れり。

▲就眠は大事業なり。快く眠ること夜中僅に八時間ならんと欲せば覺醒すること日中まさに十六時間ならざるべからず。

▲哲學者なるものあり。迷信家の所說を聽いて以爲らく『如何にも馬鹿氣たものだ』と。されど迷信家をして若し哲學者の議論を聽かしめば、又必ずや言はん『如何にも馬鹿氣げたものだ』と。迷信と哲學と、其馬鹿氣たるや共に一なり。

▲コムモンセンスは迷信と哲學との中間なり。

▲或る友より送られし短歌。

白浪のおとなき方へ行く舟も
風ぞ便りのしるべなりける

▲友の不幸ほど、人をして快感を催さしむるは無し。

▲女は現在に滿足して將來を慮らず。故に、絕えて苦むことなく、常に嬉々たり。故に、女は先天性樂天家なりといふを得んか。詳しく言へば、淺薄なりとのこゝろなり。

▲希臘人は婦人の觀劇を嚴禁せり。蓋しこれによりて其感興を害せらるゝ恐れあればなり。

▲二十歲の未通女は、同年の人妻より美なり、生氣の鬱勃たるものあればなり。三十歲の既婚婦人は同年の老孃より美なり、安心の胸の內に宿ればなり。

▲文明人の唇が野蠻人のそれよりも薄くして輕きは、文明人のオシヤベリにして唇を用ひること多きより、自然陶汰の結果、輕便に進化せるなり。

▲元素は、遊離の狀態に於て存在すること甚だ稀なり。此くの如く眞理も又迷信と化合せずして存在すること甚だ稀なり。

▲鐵道員と海員との風貌美は、實に流動美を立證す。

▲日本の建築に、曲線を用ひること殆んど皆無にして、直線のみを綜合するは、一に材料の木材なるにもよれど、又日本人の性情が餘りに急激にして、圓轉滑脫の洒落なきを證す。

▲生存競爭の行はるゝは、宇宙が經濟主義によりて組織せらるゝ故なり。而して記臆の優勝劣敗は、腦髓經濟の爲めなり。

▲調和も相反せるものゝ合躰なり。不調和も相反せるものゝ合躰なり。たゞ兩者の異るところは、配合等の差如何にあるのみ。

▲日本の妻女が、其德操を全ふするを得るは、藝者あるの賜ものなり。

▲發見は多くの研究を要せざれども、大なる心を要す。

▲之を歷史的に論ずるも、宗教と美術と形而上學とは、科學よりも古し、隨て又科學よりも知るところ多し。科學萬能主義の愚、一瞥瞭然たらずや。

▲奈良扇子に畫かるゝ繪は、これ奈良朝時代に輸入せられたる朝鮮畫の風趣の、其儘今に遺れる物なるべし。

▲躰貌を醜からしむる如き運動は、是れ即ち有害の運動なり。

▲クラシズムの代表者は彫刻にして、ローマンチズムの代表者は繪畫なり。

▲ショウペンハウエルは宗教家なり。

▲男女交際に關する取締の、日本にありて嚴重なるは、是れ實に日本人の助平人種たるを證す。亞米利加の兒童、日本人を見るや必ず背後より叫んで曰く『チヤバン。スケベイ』と。

▲同情は、天賦の本能なる種族永續性より起る。故に、同情は利己心と矛盾せず。

▲基督教は東洋人には有りふれたる宗旨なれども、西洋人には珍らしき宗旨なり。

▲歐米に基督教博愛說の行はるゝこと盛なるは、彼等人種の利己心頗る激烈なるを以て、之を融和制御せんとする天の配劑なり。

▲文明排斥論の現はれし如く、學問排斥論の起ること必ずや近きにあるべし。

▲伊藤侯の野心は、常に先登第一の功名を占むるにあ

り。卅五年末朝野の大衝突は、是れ萬骨枯れて伊藤侯は立憲政治家の態度を演ぜしめしのみ。

▲チエムバレン今回の南阿行は、アングロサクソンの光榮なり。チエムバレンもし大和民族ならば必ずやこの敢勇なし。刺客を恐るればなり。

▲エキスプレッションある製作物とは、感興に充ちたる聯想を誘起し得る如き製作物をいふ。

▲統一の美は破壊を非定して存在を表彰するにあり。

▲高山樗牛晩年大に悔てアセリたれども惜むべし遂に學者として死し、解説と祖述とを以て終れり。

●●●●まだ／＼大にある●●●●

## 成功實例　一私人（四）

北條環翠

### 熊本貧兒寮主塘林虎五郎氏

上

（一）

貧に生れて貧を憂ひ、目的の爲めには手段を撰ばず殆ど盗賊に等しき所業を以て富を致したものは世に少なからず在る。而して彼等の成功するや、世は其舊惡を追窮するの遑なく唯其金光を再拜して富豪と崇め紳商と尊ぶのである。曾々其等の富豪紳商が慈善と稱して幾分の金圓を世に與へても彼自身に於ては唯廣告の爲めか或は罪亡ぼしに過ぎないので。擅に酒肉に飽き人倫を犯し不義の快樂に耽つて居るのである、かゝる富豪が如何に貧より起つて身を立て家を成し世に尊ばれて居ても吾人は我「成功實例」に加へる勇氣を持たない。

獨立獨歩、俯仰天地に愧ぢざる一私人、徒らに寶を積んで獨り貪らざる義人、我西陲の一城市に貧兒を子とし友として其生涯を貧より貧に送る塘林虎五郎氏は慥かに我實例に數ふべき一人である。

（二）

貧の字と貪の字と其形頗る相似て、貧者必ず貪る、一旦其志を立て身を擢んでゝ世に投ずるや、必ず貪り集めて他を顧みざるは殆ど人の天性で、到底他人の身を思ふ暇がないのである。然るに聖人は我幼を幼として人の幼に及ぼすを仁とすといつた、其貧を貧として人の貧に思ひ及ぼす者は仁者ではあるまいか、聖人と稱すべきであらう。

塘林氏が熊本城下に生れて年拾一歳、西南の兵火に罹

つて見る影もなき其家さへ灰燼に歸したのである。亂平ぎて故地に歸つても其貧しさは以前に勝る一家族て、氏は魚菜を賣つて幾分か糊口を助けて居た。猶且此時に於て氏は惡少年の爲めに朱に染まつて母の慈鞭を受けた事がある、これ今日貧兒寮の存する谷川の源流葉末の一滴だから殊更に記して置くので、凡て人の親の子に對する心盡しは、僞り多き世の中に唯一つなる人心の至誠である、當時父母が慈悲の折檻も幼年なる塘林氏の身には感じがなかつたそうで、學に就かしめんとしても弟妹と共に八人の家族では三度ながら粟粥啜るさへ足らぬ勝ちの境遇だから、せめては三遷の古の教へを學ぶ樣にと戸長役塲へ慈悲の手に引かれて小使に出たのである、恰も氏は年拾三歳、程なく壺川小學校の一種の學僕になつた。こゝて氏は二宮尊德翁の生ひ立ちに感じて翁にも劣ならぬ苦學をした。

最初獨學て讀本位は讀み得る樣になつたので、市内の寺原町といふ所に儒者山口壽綱といふがあつたから其塾に入門した。朝三時に起き夜は十二時に寢る事に定めて。寒暑風雨の別なく必ず規定の時間より出てゝ附近の祠に學業の上達を祈り塾の門前に行つてもまだ未明てある。常に傍の薪小屋て復習を試みて居た。以來氏が陸軍教導團に入る迄一日も怠る事なく、遂に一家の沈倫を見るに忍びず、子養はんと欲すれど親待たずといふ韓詩外傳の語に勵まされて、當時の三圓の月給を擲つて軍隊に身を躍らしたのである。

(三)

入營するに當りて氏が家に居ないと、一家飢に瀕すると聞いて、取消願を出したけれど、事遲れて其甲斐なく、いよ〳〵行く時に月一割の高利金を返すべく入團旅費の中から引去つて母に渡した。「世の親は愛兒の初旅に一厘たりとも多く持たせて首途を送るのに、旅費を削りて家の負債を償はしめるとは何たる情なき親ぞ」と母は絶え入る許り泣いて詫びせられとある。凡そ此れ程の悲しき別れは世にあるまい、生別死別に優る悲劇てある。

氏が入團以來一週間に二拾錢宛の手當をも其一半を貯へて月末には必ず鄕家に送つた。嗚呼此可憐至孝なる年少軍人は朝夕顏を洗ひ口を嗽いて故鄕の氏神に祈るのである。我歸鄕するまでは我命を縮めて兩親に無事平安を與へ給と、武州鴻の臺(敎導團所在地)に於ける氏が兵營の殘夢は常に貧に痩せるたゞ一家の面影を宿して居た。

（四）

明治廿一年四月春風駘蕩の好時節、氏は陸軍軍曹となつて歸國した。直に熊本の軍隊附となり日々兩親の安否を訪ふ事を得る身になつたのである。果して父母の安否如何、當時氏の家は熊本北辰小學校の一隅にあつて父は學校の番人であつた。氏が在國中一家の窮乏益々極まり、高利の負債が山の如く積んで居るから、憐むべき軍曹は營中で高利貸の嘲罵を受けて思はず帯劍を撫する事もあつた、嗚呼いつまで氏は貧苦に追はるゝ事か、而も既に其身を立つに及んでも猶其家の爲めに。

北辰小學校が廢せられて一家路頭に迷ひ、漸く氏が才覺して建てたる掘立て小家も今は又債務の爲めに追ひ立てられたのである。一家七人の親子は破蒲團を負ひ、或は缺鍋を提げて茫然として行く方も知らず佇んで居るのである。軍曹の來を見て相抱いて血雨に浴ひた、これ軍曹錦を着て歸りし年の九月十日午後六時、夕烏の塒に急ぐ口の入合であつた。三界廣しと雖も棲むべき家もないから隣家に賴んで物置小屋に古疊を二枚敷いて雨露を凌ぐ事にしたのである。

（五）

以來二十二年と三年と兩度の元旦に二疊敷の小屋の隅で迎へられた。遂に父は貧苦の爲めに病に罹つて商賈（行商）もならず、年長の二女を奉公に出して、母は紙屑買になられたのである。軍隊の教官として士卒の上にあつた氏が。

紙屑はありませんか。ぼろの御拂ひはありませんかと巷に呼ぶなる母の聲を聞いては勇士も腸を斷たざるを得ない。此當時の氏の心情は！吾人如何に木强漢でも、胸塞がる心地がするのである。

一日氏は同聯隊の鵜殿少尉と新任參謀長から贈られた酒を、父が枕邊に齎した事がある。父は性來酒好きだから數十年來喉に送つた事のない美酒を得て感涙に咽んで絶叫した。一家の者の喜びも譬ふるに物なく、其歡聲家外に溢れて家主の聞く所となり「酒呑んで噪いて居るなら我が家に置かぬ」と怒られたのである、嗟乎他人の仁惠を喜んで家を失ふに到つて、恩は仇となり深夜雪の中で神佛を怨んで泣いて居た。遂に已むなく同業の紙屑屋を賴んで病父と共に其家の片隅に安堵したのである。

氏は翌日事の由を聞いて行つて見ると、鼠の巣の樣な所に一家ちゞまつて居るので、懐中に殘れる九錢を出

した儘物も云ひ得ないで兵營に歸つた。氏は其夜兵營の寢臺の上で喉に銃口を當て、既に自ら死なんとして、漸く思ひ止まつたのである。

（六）

遂に氏の母も亦「死んで貧苦を逃れたいと」いつたのを聞いて、氏は斷然軍隊を辭した。假令一身を水火に投ずるも如何なる賤業も痛苦も何ぞ厭はんや、一家の危急を之れ如何せんと、奮然請暇の願書を出して許可せられた日に、聯隊長以下の懇篤なる助言を得て、次で小隊長の室に行くと小隊長武井信光氏は金六十圓と記した一封を氏に與へて此金は君に與ふるにあらず、無期限無利子にて貸與せん、之れを資本として一家の窮乏を助けよ」と氏は一時茫然として嬉しさ餘つて物も言へなかつたそうだ。猶外に歩兵第十三聯隊下士有志中として拾四圓拾錢の金圓を贈られた。氏が營門を出づる時は回顧と感慨と、感謝と希望とで胸一ぱいであつたに相違ない。

（七）

武井小隊長及び舊同僚の勸めにより、兄弟が多いから豆腐蒟蒻などの製造を始めた。其當時の家財といつたら、家族七人の中に茶碗五個と缺けた釜一ッ、破蒲團が一枚で、市内の坪井横町といふ所に轉宅した。かの恩金を以て一半は高利貸の辛さしもとを免れ一半は資本にして、製造する豆腐と蒟蒻は軍隊の御用を蒙つた、朝は一家鷄鳴に起きて、氏が先づ大豆を搗き、母と妹とはそれを煮て豆腐を作り、病餘の父と弟とが揚豆腐を作る事となつた。隔日に蒟蒻と豆腐とを製造する手順で、猶氏は午後二時間市内濟々黌の體操教師を勸め、一家協力悪衣を耻ちず粗食を厭はず一生懸命に働いて、三年の程には漸く高利の負債も大方返して、舊恩を謝しつゝ三度の食事を一家相當になす事を得る樣になつた。

顧みれば西南役に兵火に罹つて家を失つて以來拾五年、其間貧苦は寸時も身を離れず、今日迄流浪し給ひし兩親はいかにも不運な御方である。兎に角「夜半に嵐の吹かぬものかは」といふ事もあり、樹靜かならんと欲すれども風止まずともいふから、風吹かぬ間に一時も早く兩親を安堵させたいと、氏は明治二十五年二月、一室を建てゝ父母に獻じた、これを父母安樂堂と名つけてある。

## 下

（一）

眞の同情同憐は其境遇が一てなければ起らないものである。躬自ら貧に居て、貧苦の骨身にしみた人てなければ貧民に對する眞の同情が起らない。過々富者の同情は一時的て金錢物品を惠むに過ぎない、之れに職業を與ふる程の厚き同情を持つものは殆どないのである。況んや貧に泣き饑に痩せて歪み曲つた彼等の精神を矯めて、根本的に其心身を養つてやらうといふのは恐らくは煖衣飽食の徒の思ひも及ばぬ所である。

塘林氏は思つた。彼も人の子である。人の子にして悲風慘風に包まれて知らず／＼闇路に赴く、哀むべきは貧しき人の子の行末てある。顧みれば幼時相與に物貰りに歩いた友達は今や大方放蕩無頼の徒となつてあらゆる罪業を犯して居る。然るに自分は幸にも兎に角に道を違へず父母を養ひ得るに到つた、これぞ恩師の餘光である。人は學ばざるべからず勸めざるべからずと一こゝに始めて貧兒敎育の素願を起した。何物かを彼等の心に與へて心の貧しきを救つてやりたいといふので、明治廿三年の末から翌年の末まで一年間其事のみを思ひ煩ふた、吾人は之を聖者の仁といふ。

(二)

一念こゝに萌しては今は寢食も忘るゝばかり遂に其熱血が胸より溢れて友人の池山、片山草野三氏を動かし二十圓宛の義金を得且自分も他て月賦返濟の約束で二拾圓を借りて、計八拾金を以て當時狐狸の棲家てあつた熊本市内の或る空地を拾參圓五拾錢で買つて、二間に五間の茅舍に古疊を敷き据へたのてある。實に明治廿五年四月、塘林氏が一家の餓死を救ふべく軍隊より歸つてから三年目、我幼を幼して人の幼に及ぼし我貧を貧として人の貧に思ひ及ぼし、到底長く其身を肥すに忍びなかつたのである。貧兒寮は遂に起つた。

當時氏は何等の資産あるなく、未だ其腹滿たざるに旣に著を人に與へんとするのだから、僅かに若干の書籍と一枚の蒲團が貧兒寮の財産で、最初六人の寮兒の中四人は家に歸り、殘る二人は塘林氏と共に一枚の蒲團の中で假寢の冷たき夢を結むのてあつた。

氏は早朝自宅に歸つて、豆腐蒟蒻を造り、午後は濟々黌の體操敎師に行き夜は寮に寢ねて貧兒に夜學を授ける事にして居た、勿論筆墨紙は氏自ら給與してやつたので、寮兒の增すに從つて益々困難になつた。

舊師の許に同窓てあつた人々も敎授を補助して與れたり或は世の仁者の賛成もあり旁々九州日々新聞の同情もあり、漸く盛大を致したから、百三拾圓て我家を抵

當にして更に二間に五間の教場と莨蒻製造場を建てたのである。當時既に寮兒六拾有餘名に達して學科は簡易科小學校の躰裁を備へて居た。夜間學業二時間、實習一時間、男子は莨蒻製造、女子は雜巾など刺するのである。

毎夜翌朝の午前一時頃迄かゝつて製造した莨蒻を寮兒の製作品と共に或は車に積み、或は籠に入れて各兵營に納め、午後は又躰操教師から一家の世話から、休む時なき心身の勞苦は激甚を極めて、一時氏は狂人と噂せられた事があつたそうだ。嗚呼これ誰がため、身も心も貧しき他人の子のためである。自ら未だ暖かならずして既に其身の皮を剝ぐものは我貧兒寮生である。

(三)

兎に角にして廿六年一月十五日に愈々貧兒寮の創立を世人に告げた。

以來僅かに六ヶ月間に拾一名の孤兒を收養する事となつたのである。初め毎夜通學して居たものが父を失ひ母を失ひ、或は家をも失ひ、居るべき所もなく食ふべき物もなく、餓え凍えて泣き徨つて居るのを捨て置く氣にはなれない、遂に塘林氏未だ室あらざるに進んで彼等の父となり母となり、以上の寮兒を育てはぐゝむ身となつた。資產家でも子供が拾人もあると其家が傾くくらゐであるのに氏は稍僅かに生長したる一個の貧兒に過ぎなかつたのである。だから貧兒と共に貧を共にして唯飢を凌ぐだけのつもりで、麥三升に米一升五合の飯を食ひ醬油の絞り糟に豆腐殼を入れた汁を啜つて居た。其後今日に到る迄拾年間、寮主初め寮兒は恐く陸軍の殘飯で露命を繫いで居るのである。

(四)

當時第六師團長であつた 故北白川宮から難有き思召を賜はり、後に貧兒寮の事が聖聽にまで達したといふ事である。

其後人に勸められて寮父塘林氏は寮母を得た。炊事を初め衣類寢具等の洗濯裁縫或は病氣の看護等は男の手では行き屆かぬから寮母を得て寮父の爲めにも、更に寮兒の爲めにも幾層の幸福を加へたのである。

然るにこゝに一事件が起つた、それは明治廿七八年の戰役で、氏は猶豫備の軍籍にあるから無論從軍した。寮兒に別れて軍に赴く氏の胸中は更に世の征夫に勝る感慨があつたに相違ない。跡に殘れる家なき二十名の寮兒は當時十九歲なる寮母の手一つに引き渡された。氏は威海衛攻擊の軍に加はり無事熊本に凱旋すると父母安

樂堂には父の位牌があつた。貧兒寮も幾分は荒れて居たけれども貧兒は大方無事で居たのである。以來養育部と通學部との二種に分け、孤兒院と感化院と併せた樣なものにして、世の同情者の熱血と寮内の者の勤勉とによつて現在に達した。

其間　皇太子殿下西國御行啓の際に恩賜を下された事もある、

今は收養兒童男女百十四名に達して、學業は尋常小學部と高等小學部に別れ、晝夜交替である、職業は手工部殘飯部、給仕部、行商部と別れて居る、若し夫れ熊本市に於て、肩から腋へ斜に白き布れを懸けて居る兒童があつたら、それは塘林氏の掬養する愛兒である。本寮出身者の成功しる者四十餘名、海陸軍人實業の學生、新聞記者、海外渡航者等知らぬ他國の我等さへ嬉しさに涙が溢れる樣である。況や寮父寮母に於ては千億の寶よりも「子に如かめやも」の喜があるに相違ない。

以上吾人が特筆大書せざるべからざるは、寮主塘林虎五郎氏は一個の豫備軍曹で、宗教家でも何でもない。唯此一事は實に吾人の肝に徹するのである。聊か世の宗教家に反省を乞はざるを得ない。



## 諷壇

### 新へなづち

久良岐

△白眼看他

世の中を何のへの字の富士の山扇ぶらりとかゝる初空

△笑堂福聚

をほほほほ、ゑへへへへへの、あははははは、いひひひひひと、笑ふをかしさ

△大江奇捷

大砲を物の見事に大江山、酒ッ顛童と投げ出しけり

△議會解散

吹くからに日比谷の蛙啼やみぬ、むべ山風をあらしと云ふらん

△臨時撰擧

此春はまたも撰擧と聞くからに人事ながら頭やむなり

△新年鼠病

嫁が君春の御慶はよけれども、鼷鼠はいつも疎濶なるべし

△屠蘇唱和

正月天下泰平國土安のんきな事も、お互ひに云ふ

△同

正月の年始に廻る馬鹿律義、行かぬ横着逃げる箆棒

△同

配達の向ふをはるの年始客、實に郵便はやすいものなり

△獄裡迎春

身から出た銹とはいへど正宗も此寒空に飲めぬ哀れさ

# 新罪言

監川

●勸學文

君不知乎眞宗皇帝勸學文。我爲先生請一讀。富家不用買良田。書中自有千鍾粟。娶妻莫恨無良媒。書中有女顏如玉。先生記其語。書中求福祿。白日校堂談仁義。暮夜黃金粲眩目。何圖縲絏及其身。伍他偷兒入牢獄。

●是綠林

奸商唯窺利。滔々害毒深。苞苴以萬計。
而動小人心。咄彼居教職。忘身殉黃金。
四知楊震戒。白日自照臨。相率投囹圄。
涕涙潸沾襟。盜賊同爲伍。低首徒呻吟。
嗚呼澆漓俗。書林是綠林。

●廿萬圓

一頭二千圓。百頭廿萬圓。豫算如此耳。廟議或其然。誰冠御用之二字。厚顏聳肩稱議員。君不見江東惡疫發。腐鼠一頭價五錢。

●其揆一

昔買購教員。政府購議員。彼罪若可罰。於理此亦然。貨賂濟私其揆一。彼羅網此翔天。君不見燕雀啄粒米。爲人所捉遭熬煎。又不見鷙鳥攫嬰孩。皷翼飛去高山巓。嗚呼大盜南面跨富貴。小盜赤族人不憐。

●爲君啓

朝探猛虎窟。夕涉毒龍淵。回首扶桑千萬里。損身一意奉瞿曇。風餐露宿無人境。太古積雪與天參。重關百二如坦路。萬死一生縱討探。千秋秘鑰爲君啓。天下相傳稱奇談。却憐十萬圓顚徒蠢々。朝暮何顏對佛龕。香火纔爲衣食計。聞此快事或少慙。

●常陸山

龍拏虎攫稱壯觀。東西力士分兩班。江東皷聲曉雲裂。一勝一敗十日間。甲乙丙丁月旦定。政界如今誰大關。藤侯縣侯隈伯輩。徒爲耆宿嘆衰殘。其餘碌々不足數。無復一個常陸山。

## ▲各動物の躰溫

華氏の検温器にて通常左の如し

| | | | |
|---|---|---|---|
| 螢 | 七十四度 | 蝸牛 | 七十六度 |
| 鯉 | 七十七度 | 牡蠣 | 八十二度 |
| 蛇 | 八十八度半 | 人間 | 九十八度半 |
| 馬 | 九十九度半 | 象 | 九十九度半 |
| 海豚 | 一百度 | 蝙蝠 | 一百度 |
| 鼠 | 百二度 | 猫 | 百二度 |
| 牝牛 | 百二度 | 驢 | 百三度 |
| 猿 | 百四度半 | 羊 | 百四度半 |
| 豕 | 百五度 | 雀 | 百八度 |
| 鳩 | 百九度半 | 雛雞 | 百十一度 |

# 思潮

## 臆病怯懦不公平の日本人

尾崎行雄氏

「教育時論」

抑も今日の日本人の如く、臆病、怯懦、偏頗、不公平の人間はない、宜しく此の弊を矯めて、公平にして勇氣ある、公明正大なる人物を養成しなければならぬ、かゝる人物を養成するのは、即ち教育家の任務であつて、而して如何にしてかゝる勇氣ある公明正大なる人物を養成すべきやといふ、其の方法は、是れば教育專門家の當に研究すべきことである、今日の教育社會は、只婦女子の如き人間のみを製造して居る、實に今日の日本人は、皆婦女子の如き人間ばかりで、男子らしき男子は殆んどない、悉く感情ばかり强き人間のみてある、感情に强いのは婦女子の特性てある、而も現今の日本人は病氣の婦女子も同様なもので、只感情あることを知つて更に其の他を知らないといふ有様てある、それて何事に關しても、常に喧嘩ばかりして居る、而も其の爭ひや、悉く皆感情的の爭ひのみてあつて、道理的の爭ひといふものは、殆どない、實に日本人の性格は婦人の如きもので、猜疑、嫉妬、狹隘、不公平、臆病といふものが、全躰日本人民の特質となつて居る、例へば新聞記者に就て見ても分る、彼等は人の話しを聞て、夫れを眞直に誤らず記すものは、恐らく一人もない、皆自分勝手の意見を加へ小理屈をつけて、其の話しの主意を誤つてしまう、予が今日まで新聞記者に話しをしたことは、何百遍といふほどてあるが、一人として予が話した通り、其の主意を誤らずに書いたものはない、しかるに西洋人は流石明晰なる頭腦を有して居るだけ、多く誤つたをは書かない、日本人はどうしても誤つてしまう、これといふのも日本人は虚心平氣といふことがなく、其の頭腦は水の如く澄んだものでなく、皆カタワにヒネクレて出來て居るからのことてある、實に日本人の頭腦は破れた鏡のやうなもので、如何に此方から眞直なものを以て寫しても、悉く皆曲つて寫るといふ風で、それだけ偏頗に出來て居る、片輪に出來て居る、

(中略)日本人が平生絹の長袖の衣服を着て、疊の上に座蒲團を敷いて、チンと濟まし込んで坐つて居るのは、どしても活動の民でないといふことが、一見して分る、優然として座蒲團の上に坐つて居る風は、朝から晩まで道樂をして居ると同じく、迚も國民の大飛躍大活動は出來ない、國人は家居日常、軍中に在るの觀念を持つて居らねばならぬ、然るに宴會にても出て居る樣な考へを以て、宴服ともいふべき長袖の衣服を着け、安閑として座蒲團の上に坐つて居るといふ風ては人民の進歩、國家の發達は迚も望みはない、世界何の塲所、何の時代を問はず、其の人民が常に軍中に在るの思ひを有して、日夜帶も解かぬといふ位までに、心掛けて生活して居る國は、必ず盛んに勃興する、歐米の國人は殆んど常に軍中に在ると同樣の生活をして居る、平生身の周りの始末をよくし、其の家に居るときも履を穿ちて居つて、イザ事があるといふときは、只鐵砲さへ持てば、其の儘書齋からでも、食堂からでも、或は亦客室か

らでも、直ぐ鎗飛び出すことの出來る樣に注意して居る、しかるに日本人の生活はどうであるか、平生宴會にても出て居るといふ風であるから、一朝事の起るに際しては、歐米人の如く鐵砲を提て、直ぐさま應戰するといふことは出來ない、先づ衣服を着け換へる、草鞋を穿くといふ騷擾て、新に其の支度をもなければならぬといふ有樣である、實に驚くべき悠々閑々たる生活をして居るのである、今日は兵火を交ゆるの戰ひこそなけれ、實に平和的の戰爭の時代である、此の大戰場に居りながら、イザといふ場合に直ちに應戰することの出來ない樣な生活をして居ては、迚も國を維持進步せしむることは出來ない、歐米人は兎に角常に戰場に在るが如き生活をなして居るものに近く、平生其の心に油斷がないから、總ての方面に於て進步が著しいのである、日本人もよろしく今日の生活法を改めて、常に安佚に居るが如き心を持たず、斷えず戰場に居るが如き氣にならねばならぬ。

# 日本人一般の誤解

文學博士　中島力造氏

「東京教育」

列強の米國を侮るなきは一に其富力の甚大なるに基くなり、如此なるが故に或時に於て、如何に兵備を整へたりとも、其後楯たり基礎たる富力缺乏せば、必らず外侮を防ぐこと能はざるべし。此の如く百般の事業、施設より列國間の競爭に至るまで、要する所富の一點に歸着するを以て、政府及國民一般に富を造り出すこと、即はち實業に向つて大に注意するは、實に世界の大勢と一致するものにして、且つ我國は山林、原野より、水産、鑛業に至るまで、收拓すべきの遺利、開發すべきの財源甚だ豐饒なるを以て、もし文明的の智識器械を以て之に從事せば、前途の好望は疑有るべからず。

茲に又余の觀察を以てすれば、世人一般に一の誤解を有するものゝ如し、我國は所謂日清戰爭には連戰連勝の偉功あり、北清戰爭には列國と同盟を成して、支那の內亂を治め卓拔なる軍事上の技倆を現はし、名聲を世界に轟揚したり、我國民の軍人としての働は、歐米に比して勝るとも劣ること無きは明かなれども、これを以て凡べての働に於ても然りと思ふべからず、然るに世間一般少くとも青年子弟中には、我國の軍事の優勝を以て直ちに全般の優勝の如く誤解する者尠からず、商人として實業家としての日本人の働は、歐米人のそれに比して非常なる懸隔あることに注意すること甚だ遲きは、日本將來の爲め實に憂慮すべきことなり。今我國と歐米との間に於て前述の差の由りて生ずる所を考ふれば、我と彼とは既に時代を殊にするに基くなり、即はち彼は久しき以前に封建時代を脫して、實業的社會組織を採用したるに、我は未だ封建時代的なり、之を以て我は武を尊び軍事に長ずるも、彼はそれよりも實業を尊ぶが故に、恰かも我の長と彼の短と相比較したるなり、これすら殆んど伯仲の間にありと稱すべき程なるに、若し我の短と彼の長とを相比し來らんか、我の劣ること日を同ふして語る能はざらんとす。軍事上の優勝は、益々助長すべきこと勿論なれども、實業といひ學問といふものゝ發達、亦甚だ希望せざるを得ず、軍備の整頓、實業の利便、教育の設備、悉く富ありて始めて可能ならば、國家隆昌を計るの第一段は富を造ること即はち實業より着手すべきは、事の至當なる順序なるべし。

然らば現在の如き實業家を以て、成功を期し得べきかと問はば、余は遺憾ながら否と答へざること能はず、外國人の如き我現在の實業家を信用せざること甚しくして、聞くに忍びざる酷評を發することも屢々なり、而して啻に外國人のみならず、余輩同國人に於てすら、堪へ難き破廉

恥なりと許すべき事實に接すること甚だ少からず、如此人々によりて營まるゝ實業の發達せんことは殆んど望みなき事たり、

# 日英社會教育の差異

「東京教育時報」　男爵　岩崎彌之助氏

余今回歐洲を漫遊せしこと、約八閱月固是一已の行脚的旅行にして、社會觀察の爲めに非ず、其目的とする所主として我身の健全靜養に在りて、又他を顧ざりしも其視聽に感ぜし事々物々彼國の社會の狀態たる、固より我國と同日の論にあらず、到る所の邦國皆秩序の整然たるを認む、殊に英國の如きに至ては社會の秩序整然として、禮儀廉恥を尊ぶの美風あること實に余の感服に堪えざる所なり、聞く所に依れば、英國倫敦に於ては每日出入する所のもの七十万人に達す、此等の者は或は停車塲に至り、或は渡船塲に至り、宛然人の山を築けるが如し、然るに各人は能く其秩序を守りて、些の混雜を見ざるが如き、我が邦人の到底及はざる所なり、或は汽車より乘降する旅客の能く其先後を爭はざる如き其禮讓を重ずること實に欽羨の至りに堪えざるなり。

更に各商店に就て觀察せんか、寶石店と謂はず、洋服店と謂はず、幾多の巨商豪賈軒を接して客を待つ、買うもの、素見するもの踵相接してして各店內を巡覽す、然るに一つの賣子なるもの立てるを見ず、邦人の目より觀察するときは如何に其無頓着なるかに驚かざるを得ず、余も亦是に至りて倫敦市中一の竊盜者一の万引なるもの居らざるやを疑はしめたり、若し之れあるとせは千金の重寶品は瞬時に盜み去るを得べく、万金の貨貨も尙は掌中に掩藏するを得べし、是れ其一譬喩たるに過きすと雖も、又以て如何に同市の社會制裁の强大にして、且つ道德の進歩せるやる察知するを得べし。

又家庭の狀態を觀察するに、其家庭の溫和なる生活中に上下の區別嚴然として、各能く其分を守れるあるに驚きたり、固より余の觀察たる一般を許すること能はざるべしと雖も、余の一二、訪問せし所の家、及び宿泊せし親友の家庭に於ては皆斯かる美風を認めざることなかりし。

# 我經濟界の前途に就て

「實業の日本」　男爵　澁澤榮一氏

近時米國の經濟界は非常の速力を以て發達し世人の見て以て驚歎する所なり、輸出は常に輸入に超過するを數億圓の巨額に達せり、而して之が原因は保護政策の結果有望なる事業は之を奬勵し、學問、資本、機械の運用運轉を敏捷活潑ならしめ、作業の規模を大にして以て生產費を減少せしむ、加ふるに廣漠無邊の土地は豐饒肥沃、各種の農產物は世界の市塲に供給しつゝあり。而して又外國市塲に優勢を占めんか爲めには海陸運輸の便を疏通し運賃を低廉ならしめ以て到着地に於ける價格の騰上を防ぎつゝあり。故に其生產額は世界に比して最も多く、其價格は遠き外國市塲に於て優勢を占む。是れ米國の對外貿易の日に益々增進する所なり。而して日本は之と全然反對の地位に立つものゝ如し、生產費增高して價格貴く、內國市塲に於て尙且つ外國品の競爭に難するの狀あり、將來の經濟界を想ふときは余は竊に寒心に堪へさるものあり。

果して然らは之に處するの途如何、原因既に明なり、之が善後の方法は原に還るの外なし。財政膨脹し國力に超過したりとすれば政費を節約し財政を整理し、勤儉貯蓄するにあり、此點より觀察すれば第三期の海軍擴張の如き或は之を廢止すべき必要あるにあらざるなきか、他の生產事

業を節減若くは之を廢止してまでも海軍を擴張すべき必要は余の殆んど發見に苦しむ所なり。余は具體的に某々の費を節減すべしと云ふ能はずと雖も、財政を整理し國力の程度に一致せしめんと欲せば比較的不生産事業を廢止すべきは蓋し當然の方法たらずんばあらず、又內國の工業に就ては政府は發達の中途にあるものには勉めて保護奬勵し、以て其發達を完全ならしめざるべからず、放任して顧みざれば我農工商業は獨り進歩せざるのみならず、海外の發達急速なるものに比して益々均勢を失し彼我の懸隔は年と共に益々甚しく、我は遂に劣者の地位に立たざるを得ざるべし。獨り內國市場に於て外國品の侵略する所なるのみならず、海外市場に於ても亦常に壓倒を免れざるべし、是れ豈に我經濟界の忍ぶ所ならんや、故に將來經濟界の發達を圖り內生産事業を進め外列國と對峙せんとせば宜く其本を研究して而後善後の方策を講ぜざるべからざる也。

## 社會組織の根本的改革

「六合雜誌」　矢野文雄氏

正しい事を爲すやうに教へられて、之を實行すれば遂に店を閉ぢなければならぬやうになり、不正を爲しても資本の多い爲めに勝つとの出來るといふのは、今の世の中の組織である、此の世界に飛び出して來て、道德上では必ず出來るとゝ教へられて居るのにソウ行かぬから遂に、絕望をする、しかし正しき行をして甘く成効したものも絕無ではない、が唯だ之れは現時の社會組織に於ては、除外例と見るべきである、斯る次第であるなら、宗教や道德の教ゆる所によりては、實際成功を見るとが覺束ないから、世の中は只だ法律にのみたより、法律の許せぬ限りに於て、如何なる事柄をも爲して成効を謀るやうになる、左すれば道德家や宗教家の教ゆる道德論はつまり其の型式や型ばかりで、之を實際に用ふる時には失敗する、失敗するから道德を悉く打棄てゝしまうのかと云ふに、又ソウでない、世の中の人々は孰れも一言一行悉く惡事を爲さうと思ふ者はない、唯だ行はれる部分だけ、自己に利益のある程度迄を行つてゆく、故に道德は隅から隅までというやうに、嚴正には行はれないのである、ソコデ宗教家道德家が働いて居ても、中々其の功が擧らず、幾ら其れを行はんとしても行はれないと云ふのは、全く今の社會組織がわるいのであるから、此の組織を改革して、十分に道德の行はるゝ社會組織にしたい、今の社會組織は工風して造た物でなく、昔から唯行きなりに成りたつたものであるから、之を改めなければ決して道德の行はるゝ社會になるゝは出來ない、人間の出來たのは、今より二億何萬年も以前の事であると云ふが、最初は弱肉强食、只だ腕力に賴つて相爭鬪して居つたので、專制時代を經て漸次現今の社會に進化し來つたのであるが、尙ほ昔時の殘り物が多く存して居る爲め、今日の社會がまだ大に不完全の狀態に居るのである、一弊が廢され又一弊起り、特權行はれ自由競爭行はれ腕力が漸く跡を絕つても又資本の力を用ゐる爭鬪が始まる、そうして又一の弊害を形成する、世の中の事は弊の生ずるに從つて之を改むるのは當然の事で、猶小兒の生長に隨つて其の衣服を改むるのと同樣である、現時自由競爭の弊害の著しき例を英國に取つて見れば、英國は一年の富の高が貳百四拾億圓であるといふが、其內僅か五拾億圓が實際仕事に從事し居る者の收入となつて、其の他の九拾億圓と云ふものは資本家の手中に入るのである其資本家は何人位あるかと云ふと、人口の九分の一の少數である、然るに其餘の多數が百四十分の五十より多くは取れない、そうして現今は器械力が發達して居るから大に人力を省き、英

英國に於ては殆んと六億人の働きを器械の力で爲して居る、故に英人は器械力を用ゐて、一人が十五人前の仕事を爲す割合になるのであるから、若し之れが實際正當に社會全体に分配されるとであれば、英人は一躰に全國人が、各人皆大に富んで居られればならぬ、然るに現實は中々左樣でない、一方に於ては、夜會に用ゆるハンケチーフの代價が、一枚参千圓もするのを持つ富豪が居るかと思へば、一方には又イースト、ロンドンの貧民窟の如きは一錢二錢のパンを一片さへも容易に買ふことの出來ぬやうな貧民が居る、一年に百四十億の生產力を持ちながら、斯る苦樂の甚しき懸隔を生じて居るのは、全く自由競爭から起つた弊害で、之れが爲めに資本家たる富豪は、益ゝ富み榮え、資本なき貧民は、愈よ窮苦を增すのみである、斯る弊害は遂に改むることが出來ぬであらうか、決して左樣でない、今の社會組織を改むれば必ず出來る、それには社會主義が大に興られねばならぬのである、社會主義は只だ一圖に競爭と云ふとを止めるとのみ思ふ者があるが、ソンナ淺薄なものではない、社會主義は本と經濟上の道理の上に確立して居ものである、生產の機關を個人の私有に放任して置いては、一般衆人の利益を害するから、先づ生產機關だけは社會の有、國家のものとする、之を共同とせば他に於ては競爭を爲しても妨げないのである、社會のものとしたならば、利息を拂ふの必要もないから、資本家が獨り暴富を極めるとなく、利益を一般に分配することが出來て、貧富不平等の弊害を救ふことが出來る。

# 教科書の自由採擇

「讀賣」　鎌田榮吉氏

予は今の審査會の制度には勿論反對にて惡しきには相違なけれど左らばとて國定教科書の設も善なしと思ひ止を得ずんば各學校獨ご別に教科書を選擇するを良と信ず。

現在の制度は腐敗を來したる原因にて賄賂も之に依りて起りしものに相違なきも餘りに收賄沙汰を恐るゝが爲め又收賄を防がんが爲め教育の根本たる實質を害する手段を執り別に恐るべき弊害を生ぜしむるは戒めざるべからず即ち國定教科書を作るに方ては最も此邊の戒心を要すと思惟す、成程雨が降れば傘を差すは當然の手段なれど左りとて從來の用意もなし居られざるべし。

元來審査會の如き少數の人にて一縣全般の教科書を左右すればこそ書肆も之を利用して種々の手段を施すにて現今の教科書屋は恰も賞金を遣ふが如し發覺せざれば巨萬の富を致し氣を能くして正當に出版するものは破產の運命に遭ひ居れる模樣なり故に今若し檢定法を改正し廣く個々に選擇せしむれば賄賂も何萬といふ學校に一々運動もなり兼ねまじく從來の運動方針を一變して正々堂々良教科書を作り廣告を盛にして實地に營業する事になるべし。

又國定教科書となす時は幾分か腐敗の範圍を縮少し能ふべきも出來文部省の方針には間違ひたる思想多く彼の道德上の觀念並に修養に關する事の如き最も甚しとす故に今若し文部省にて編纂する教科書が勢に良好なれば可なれど不幸にして不完全なるものなる時は全國一樣に採用せしむる丈其間違ひ多きものは全國に行渡るとなるべし、殊に寒き北海道より、暑き琉球まて一樣なる教科書を採用せしむる能はざるべく又文部當局者も屢々更迭し檢定年數の盡くる每に極端より極端に移る教科書を用ひしむる事もあるべし例へば井上毅氏の如き固陋なる思想を有する大臣の局にある時と西園寺侯の如き世界主義の大臣出る時とは教科書は必ず一變すべく著作者中又大臣の意思を窺ふて著作すれば假令極端のものな

採用せざるも之に近き者を採用するに至るべし。

國定教科書には以上の如き弊害隨伴すべきを以て止むなく檢定法を改めて廣く教科書を檢定し各校に採擇せしむるを良好なる方法と信ずれども其檢定に方りては檢定者亦其人を得ざるべからず從來の檢定法は隨分不完全にて例へば地理の如き亞弗利加は今も尚ほ三十年前の昔の如く暗黑界となすも打棄て置く等の類にて現在の國勢を知らざる著作あるも之を檢定濟となし居るに至つては實に不都合千萬といふべし故に檢定法は高等教育會議の如き組織を立て其方法を定めざるべからず。之を要するに予は現在の仕組は勿論國定教科書にも不贊成にて各學校をして檢定濟の教科書を自由に撰擇せしむるを可なりと信ず。

# 仝

江原素六氏

自分は現在の教科書を以て決して惡しきものと信ぜず其内容は誠に完全したるものと思ふ而して近頃社會の問題となりしは教科書其物の良否にあらずして其採用方法の惡しきが故のみ素と教科書審査會は書肆が利益を壟斷せん爲め其組織を促したるものなれば弊害の起りしも自然の結果にて此上は自分は檢定濟の教科書は自由選擇に任すを以て最上の方法なりと信ず。

元來自分は國定教科書に反對するものにて國定教科書には二大缺點ありと思ふ、第一今日まで教科書は自由に著述し、自由に出版するを得せしめありて教科書の著述出版は人民既得の權利に屬し居るに一朝國定教科書として其權利を奪ふは不道理なり尤も國民一般の公益に關しては或は私人の權利を奪ふ場合あれども國定教科書と爲すも私人の著述となすも其内容は似たり寄たりのものにて敢て公益上强ひて爭ふべき程のものにあらず第二、國定教科書と爲す時は其種類一定して國民を一種の鑄型に注入する事となれども國民教育は決して斯る狹隘のものたらしむべからずして教科書は是非とも數種のものと爲さゞる可らざるに國定教科書は此數種類を編纂する能はざるべし。

假に國定教科書となす時は文部省にて編纂するか又は民間のものを買上ぐる事となるべきが其採用されし數種のものが果して良好なるものなるべきか但しは選に洩れたる中に良好のもの存在すべきか其選擇の標準次第にて何とも分らぬ恐れあらん。

一體文部省の教育方針は我邦の諸學校を文部省の學校の如く見做し居る弊ありて此方針は屢發現せらるゝ事あり現に學制改革問題の際文部大臣は高等教育會議に臨みて大學卒業生の無職者ある旨を述べて大學の縮少を計らんとしたる事あり當時自分は大臣に向ひ大學は政府の大學にあらず其名の如く帝國の大學なれば其學生は卒業後清韓暹羅を開拓せんと希望する者もあるべく又外國より入學するものもあるべく其志す所は何れも蘊奧の學問を極めて國家に利せんとするにあれば左る狹隘の思想を抱くに及ばざるべし況んや我々が唐茄を作るに方りて總て元生ばかりは作る能はず多少の末生あるは免かるべからず、故に大學生が少しの手明きありとてさまで憂ふるに足らずと謂ひたる事あり、文部省が大學に對する考へは凡て斯くの如く固陋なると共に中學に對しても數年前自分は當局者に向ひ學校の建築、設備の如きものは公費より支出するも教員の俸給の如き維持費は授業料にて支辨すべしと建議したる事ありしに當時は全く此說を排斥し居たり然るに近頃文部大臣は中學校の授業料を高めて外國人を聘し外國語を練習せしむべしと訓示せり斯く施行しは喜ぶ所なれども哲學館にては個人主義を教へしとて其認可の特典を取消されし事

# 詞藻

## 漢詩

▲雪佛　　前田舍潤

六花皎潔現妙身。須臾變滅化爲水。空即是色々即空。空之與色迷幻耳。莫道眞佛歸無常。春風一夜梅花香。

一結悠然、曲終奏雅、不復見痕迹、

▲十二月廿八日即事

牛李議相分。政海風波起。思國無至誠。畢竟兒戲耳。閒說江東鼠疫侵。只斯一事最寒心。窓梅數點發素蕚。且對淸香酒自斟。

挾私怨以議國事、朋黨之陋、眞可歎哉、其害何啻鼠疫、

▲除夕

人生無病最可喜。名利至竟餘事耳。去年今年俱康健。吾生幸福何若是。辦梅一朶返香魂。寒月惠然臨小軒。捧觴偏謝聖恩渥。會計之事姑莫言。

眞個幸福、太平氣象、藹然于言外、

▲又

薄酒寒梅殘燭前。妻兒聚首餞徂年。遙思家弟猶行旅。今日又登遊竺船。（此日家弟上印度巡遊之途）

情趣盎然、聲調亦佳、

▲癸卯元旦

三百六十日。日日耽讀書。茲値新歲至。一日課聊紓。和氣何藹藹。梅花香滿廬。家風守淸白。卯飲摘園蔬。賀客紛如織。轔々門外車。俗禮不相管。一醉入華胥。

歲旦之詩、大抵陷俗套、陳々相因、屋上架屋、此篇獨不須粉飾、平淡饒趣、作者標格、可以想見、

### 一字到底三十四韻叙南征記後

高楠篝村

大越由來足史徵。堯命義叔宅交南。

書云。帝堯申命義叔宅南交。注云。南方交趾之地也。

三譯朝周越裳氏。成王恩賜車指南。

周成王六年。交趾南越裳氏重三譯來朝。賜以軿車五乘皆爲向南之制。指南車是也。

秦制郡縣置象郡。趙佗平越王武南。

始皇卅三年。秦師與南越戰敗。更遣趙佗平之。趙佗自稱爲南武王。

伏波將軍立銅標。孔明智畧冠斗南。

馬援立銅柱留漢人而居此。南蠻呼爲馬留人。「出師表云。三渡瀘深入不毛之地。陸放翁贊云。北斗以南第一人。

唐代鑑眞期東征。五踏東海漂海南。

過海大師鑑眞。去唐向日本漂泊至振州江口。即今海南島海口是也。事見于東征傳。

晁卿流泊再入唐。拜官都護領安南。

安倍仲麿在唐稱晁卿。乘遣唐第一使船將皈東。遂漂泊安南。再入唐拜國子監安南都護。卒于唐。

眞如親王去求法。空埋玉骨羅越南。

嵯峨天皇太子高岳親王。法號眞如。在唐十五年。欲赴印度過羅越國遇虎害而薨。傳在本朝高僧傳。

十萬里程雲路絕。無復東人向天南。

太平先皇建元初。宋命潘美平嶺南。

安南丁朝先皇帝始建元曰太平。時宋播美平嶺南。先皇遣使求好。

李朝八帝開疆土。古法發跡定大南。

古法卿李氏發跡之地也。李氏八帝大廟在此。扁聯云。歷八傳神武聖文。爲萬世開疆拓土。「南人自稱大南國。

元統三年分正朔。經畧大使征乂南。

是歲順宗改元至元。遣史部尚書鐵柱布告。秋九月哀牢侵南戎。乂安之屬邑。段汝階兼乂安經畧大使。爲督將征之。

黎氏莫氏相簒立。阮合南北建廣南。

阮氏一統。建國名廣南。

世祖屬清受封册。奠都順化號越南。

阮世祖受清封册改名越南、都順化府。古匕景是也。

由來歷世事拱北。又被西人試圖南。

明英宗天順四年。即大越聖宗正洪四十四年。賜御製詩云。交南三百餘年國。拱北一心歷世臣。

强敵好謀不敢迫。膺懲機熟戰城南。

再度干戈經營成。威風遠及湄水南。

河內鐵路達濱海。山防兵足壓雲南。

濱海指海防港在東京灣左岸。「山防佛領疆域之地。

烽火不擧邊塞靜。華軍不到諒山南。

諒山佛國堡砦之所在。

今年賽會招學士。迎客有舟號安南。

南人謂博覽會爲賽會。又云鬪巧會。

同人相約在舟中。憶起先師話笠南。

先師馬翁常話笠南二師之事。鞭撻懇切。故及。

擬代笠子傳笠經。却耻無人說高南。

以上二韵南字指南條碩果師。

此生若得起斯文。不厭雲北與水南。

益者三友今欽一。其人拮据在勢南。

常盤井會長在伊勢一身田。有故不列學會。故云。

別有道友號胆岳。一朝趁我出湖南。

藤島胆岳師住琵琶湖上。有事後至矣。

昇龍城裏笑相會。維詩維文敍征南。
二師尤長詩唱酬日作數十篇。昇龍城河內之古名。
使君今日優遇足。音樂翕如奏雅南。
佛総督美氏來學開東洋學會之式。詩云以雅以南。
一百鴻儒會翰院。語分西北與東南。
賀詞凡有十又二國語。
東亞興亡說得盡。尋古臨邑又扶南。
臨邑今占波。扶南今暹羅。
逢着山僧問佛理。笑指西方唱和南。
和南梵語。此云稽首作禮。
尤驚彌陀敎化遍。又自絕東及極南。
北寧紅雲山寺衆僧誦阿彌陀經。南音頗似東調。
身入交州不知寒。挿秧時節日至南。
綠樹森々終年夏。不見鴻雁飛向南。
山川依舊帶礪氣。柚橘千春香江南。
安南志所載詩云。山河帶礪保千年。
如今休說風語異。泰西文化遍日南。
日南漢制三郡之一。今安南総名。風語謂風俗語言。至清朝用之。
近時詞宗吳汝綸亦有風語不同云々之句。

（右一篇本號論說欄參照）

## 初午

紅緑選

初午や往來となりし畑道　秋子
初午や暮方寒き野の渡し　同
初午や神樂の太鼓夜の村　同
初午や五歩に十歩に赤幟　同
初午や勸學院の群雀　柳家
初午の筵を畑に花薺　癖三醉
初午や草履の跡の霜柱　同
初午や梅の蕾の小豆飯　同
初午や野蒜晴れたる日傘　同
初午の誰つまゝれて夜の囃　同
初午の老杉一を迎へたり　同
初午に蝶見るも此里早し　同
初午や藪の中なる百千鳥　同
初午や太鼓の菜種笛の梅　同
野の稲荷茅花日和を祭る哉　見獅子
初午や畑打て居る畑の道　摩天鶻
初午の伏見は遠き太鼓かな　同
初午の幟や紙鳶の下にあり　同

初午の餅撒かんずるどよみ哉　同
初午や幟も立てす藪稲荷　丁堂
初午や米屋が横町袋町　芒生
初午に去年の幟も立てにけり　萩生
初午にひとり店だす飴細工　牛歩

人
初午に小供の多き漁村かな　摩天鶴

地
初午や千の鳥居をくゞりぬる　秋子

天
初午の太皷野面の青むなり　癖三醉

選者吟
初午に贋の聾の乞食かな
初午や今年は早き宮の梅
初午に納めの文字や寺子供
初午や夜に入る村のうかれ男等
凧の輪に初午の幟り野末かな

次號課題　壺焼（二月十八日）
次號課題　藤花（三月十八日）

壺焼に就て壺焼は従來の季寄せに無し然れども壺焼なるものは最も春の趣味あるを以て余等同人之を春季として用ひ來りたるなり、榮螺の壺焼といふを至當とすれども單に壺焼とのみにても榮螺たるを想定し得べきは普通なるべし

## 寒紅梅

△　森爵堂

つらき〳〵憂世の波を君と吾と二人しづけき淵に避けんか。

茶の湯はてゝ歸る田圃の道はるか終列車のふゑ雪に鳴る。

君しかく呼きますな口紅の耳いろどらばひとあやしまん。

肱まくら秋の夜長をまちあかしわが手しびれて人竟に來ず。

戀ゆゑにわが學ならず學ゆゑに我が戀成らず二つながら成らず。

銃肩に山路わけ入る薄ゆきをあしたうれしきゐのしゝのあと。

德利片手猪の片足ひつさげてうれしわが友雪に訪ひ來ぬ。

△　栗山直扶

山かげの小田にたゝずむ毛見衆の筍笠にむらしぐれ降る。

ほそき手に鳥籠さげて父おやと山路わけゆく筒袖の子の。

たそがれをいたち横切る田圃道はら／＼雨の西にはれ行く。

雪はれて日かげうら／＼海しづか十里の漁村あさ煙たつ。

かるた會にふけて歸りの若夫婦もやひショールの睦言にくや

△　小池武俊

見下しの麓八千村たそがれて霧たちまよひからす群れ鳴く。

霧はれてしづくしたゝる山松の葉末の千露玉ぬくがごと。

雲に飛ぶ藥を得まくひさかたの天のかく山我よぢて見し。

△　鹽田香園

さく花のにほふが如く榮えにし奈良の都のむかし思ほゆ。

たゝなへる青垣山の山神に手向けんもみぢ八千くさの花。

青丹よし奈良のみやこの跡とひて八千草にほふ秋を虫聽く。

鹿鳴きて春日の山に星光るあけがたひゞくだいぶつの鐘。

川づゝみ一里老松なみたちて鳥とびたつあしたしづけき。

桃山や木幡も過ぎて宇治河の網代にさわぐ水のおときく。

△　百武阿東

繪師立つて梅に筆とる野のあした深山初出のうぐひす來鳴く。

吹きまくる枯野のすゝき婆娑として梅の花ちる風なゝめなり。

△　太美子

白ばらの蕾のかざしふさへりや君好ませる夜會むすびに。

あかねさす紫ごろも緋ばかまに姫ぶりしたるむかしは夢か。

まゐらせん此繪はがきに歌かきて難波におはす母御のもとへ。

△　渡邊光風

庭一反、松二百本、山茶花のまばら垣してわれそこに住む。

おのづから散るや山茶花うぐひすの笹鳴さむき朝の垣根に。

うたはんか聲のかぎりを庭にて丶庭の松ばら松もゆらげと。

あくがらよ紫にほふすみれ野の胡蝶となりてわが魂(たま)春を。

花ふゞく椽に立つ子ようつくしきリボン咬へて髮撫でながら。

雌蝶雄蝶菜の花畑をむつれ行く孃やお見やれ絹がさあげて。

むらがらす飛ぶよめぐるよ杉の森あかい夕日は五重の塔に。

紫蘇の實はこかず其のまゝ畑に枯れて老きり／＼す聲たえ／＼や。

（正　誤）

むらがらす塒あらそう野の杉に夕日なゝめや雲いろいろの

The Roses.

I wish to sit myself in gloom
For then I see the world in bloom.
I wish to be the root and tree,
On them then spring as thorns to see
How roses bloom and burst in glee.
How constant they in fragrance free.
They seem to me the Seers Divine
Just born on earth to teach mankind.
They are the Holy, the Wise, the Pure,
Have eyes to see and ears to hear.
Behold the Avtars of God so still
Scatter'd lie in dales and on the hills
Why go to Christ, Krishna and Veda
When you, can on your roses gaze.

あり又曩に小學校の修身教科書を國定と爲んとしたるも是亦思はざるの甚しきものにて倫理道德の如き品性上に關するものを國定と爲は學問上●の修身書としては稍可なるも信念上の修身書と爲す能はず故に品性上に關する事は國民の隨意に任せ或學校にてはバイブルを修身書と爲すも可なり或學校にては眞宗の教旨を修身書と爲すも可なり各種の信念に依りて國民は益々發達すべきものと信ぜらる。

要するに自分は小學校の教科書は文部省にて撿定濟の上は自由選擇に任せて各學校にて自由に採用せしむるを可とし若し文部省にて國定教科書の豫算を提出せば全然之を否決すべきものと思考す。

# 余は固く靈魂の不滅を信ず

「萬朝」　黑岩周六氏

余は固く靈魂の不滅を信ず、「我」と云ふ自覺が肉体死滅の後にまで自覺として存すること、肉体の生存せる時期の間に存すると相似たる心持なるべきを信ず、此信念は科學上に於ては唯物論の最も進歩したるヘッケル、子ーゲリ、ケーラス、ローマ子ス等の唯物一元説（マテリヤリスチック、モニズム）と牴觸すること無く、哲學上に於てはフエヒ子ル、ハートマン、ランゲ、デユリングよりヴント、ポールゼン等に至るまで自然に思想の系統を爲せる唯心一元説（アイデアリスチック、モニズム）と相合するなり、モニズムは十九世紀の末に至り、物質論の達したる窮竟の眞理なりとも云ふを得べく之を唯物唯心の二に分つは單に科學方面と哲學方面との區別に過ぎず即ち物心一如の説なり、廿世紀の思想界は一にモニズムの横行濶歩する所なり、モニズムの前には有神無神の區別無く、物質と心靈との區別無く、宗教と道德との區別無し、モニズムに至りて人生觀、宇宙觀、初めて合一して初めて絶對不動の根據を得、信仰と知識と、現世と未來と、復た爭ふ可き餘地無きに至らんなり、無神無靈魂論を唱ふる人も其の無神無靈魂論のまゝに靈魂不滅を信ずることを得べし。人生は夢に非ず假相に非ず、眞如なり實在なり、我れ天地と共に悠久なることを領得して、初めて造化に逼る品性をも得、乾坤を呑吐する大勇氣をも生じ丈夫兒の本領を發揮することを得べし、我れは神なり我れ神と共に在り、我は宇宙なり我れ宇宙と俱に在りて直ちに萬有と冥合す、人此境に入らずして何に據りて人たるの性を遂げんや、基督の道、釋迦の道、孔子の道、總て人の蒙を啓きて此境に入らしめんと欲するなり、余は孔子釋迦基督の熱心なる信者なり、宇宙の靈界物界の眞理を、打て一團と爲して發揮せるモニズムは我に此の如くなる可きを命ず。

# 女子の位置を高むるには其道を以てすべし

「東朝」　嘉納治五郎氏

從來は日本に男尊女卑の風が行はれて居つて、教育の如きも女子は男子に比して遙に不充分であつた、又女子は家のことを知るのみであつて社會のことは知らない風であつた、それが急に近年になつて男尊女卑の風を破らうとして種々唱道した人があり又外國の模様を見、外國人が本邦に來てするところの有様を察して外國の男女の關係を我邦に於ても模倣しやうといふ意見の人が出來て來た、又女子の中には今日まで男子に押附けられて居つた所の有様より一轉して女子の權利を主張しやうといふやうな考への人までも出來て來た、自分の考へるところでは此の如きこ

とは固より男子も女子も共に心配をせればならぬとであると思ふ、けれ共女子の位地を高めるといふとを女子が主として主張するといふやうなとは甚だ面白くないと思ふ、是は男子が力めてせればならぬ、それて女子の男子に對する心持も改まり男子が女子を待遇するところの仕方も改まりて社會に於ける女子の位地を高め、男子よりの待遇も改めるといふとは固より必要であるが是は主として男子の主張に依つて成し遂げ女子は此事に付いては寧ろ受身の位地に立つて男子が斯くまで女子を優遇するに至るに付いては益女子としては女子の本分を守らなければならぬといふ位地を取らせたいと思ふ、之を棄てゝ置くと男子に眞正の利益は女子を優遇するといふことから生ずるのであるけれ共、併しながら目前のことのみに付いて考へる時には女子を從來の如く男子の意の如くに使役することが便利であるところから男子は女子を優遇することを力めず或は却つて之を妨げる女子はそれに反して男子に反抗しさうして自分の當然の位地を得やうと思ひ或は當然以上の我儘をしやうと思ふに至つては社會は其弊に堪へぬとである、それて今日はそれらの問題が大に社會に講究さるゝ時であるから此時に既に先覺者は或る言論に依り或は實行に依つて社會を指導することを希望する、それは飽までも男子が自ら進んで女子を好く待遇し又相當な尊敬をするといふとにして女子は其男子の待遇に對して之を喜び、自ら益男子の爲に盡すといふ位地を取らせるとをしなければいけない。

Ask not shells from me when I have diamonds to give.

RAM.




# 社會時觀

## 烘雪錄

寥川

▲新聞の迷信奬勵

堂々たる首府の新聞にして「本年の恵方」と題して笑ふべき陋俗を紹介し、或は其日々の暗劍とか三碧とか、幹枝卜筮の御手先きとなれるもの多し。

我國の新聞は正く迷信の保護者なり、奬勵者たるもの何ぞ進んで濱口熊嶽の祈禱日を紹介せざる、天理教のお説教を掲載せざる。

▲曆類崇拜の新年

太陽曆の一月一日に、今年は寅の年卯の年とそれに因

める物語りや繪書やを牽强し附會し、各新聞雜誌只他に遲れざらんことを恐る、無意味も亦甚しからずや、萬國の新聞界に類無き事、これも新聞紙か迷信保護の一例なり。

▲平民の拜賀

落塲高きに過ぎて上下阻隔するに至らば、至仁の大御心に對し却て恐れ多き事なり。車聲轔々禮帽嚴めしき有位有爵の人々が、年頭拜賀の爲めに宮城に入るの特權有るは素より其處ならん。然れども我々平民も同じく陛下の赤子たり、忠良の臣民たり、新年に此等平民の爲めセメテ二重橋々外に於てなりとも參じて拜賀し奉らるゝ樣何等かの設けを宮内大臣に希ひ度思ふなり。左の一投書に接して吾人實に同情の念に堪へず。

(前略) 小生は舊臘東上仕候毎年新正には國許にて家族と共に兩陛下の御肖像を拜するを家例と致し候を以て本年は輦轂の下にて迎年仕候事なれば丸の内に參り二重橋の前面芝生の上より遙に兩陛下の萬歲を心唱したることに御坐候此時何とも云へぬ難有心地にて思はず淚に咽び申候

其後三度まで毎日丸の内に參り不圖感じたることと有之候恐れ多き事には御坐候へども若し兩陛下にして毎年一度新年にかゝる廣塲に少時御出輦を賜はり臣民一般の慶賀を受けさせられなば如何に嬉しき事ならんと存ぜし一事に御坐候

無位無爵平民の分際として天顏を拜するが如きは恐れ多き事にて御聽許を得ることは萬無かるべしとは存じ候へども地方の臣民は都下の臣民と異り行幸にても無之時は終生天顏の麗はしきを拜するの機無く徒らに渴仰の念に堪へざる儘一生を過ごす者大多數に御坐候若し一年一回定例として麗はしき天顏を拜するの機會有之候はゞ年々地方より集り來る臣子は非常の多數にて元旦丸の内は萬歲の歡呼を以て充されその喜び奈何許りならんと存じ奉り候

本月の貴論「世界の大勢と狹義の忠愛」を讀み候時は恰も右の感念に打たれし折とて一層深く感じ申候若し御同感に候はゞ小生等平民の意見を代表して右の微衷を代つて御執筆被下度切々希望に堪へざることに御坐候頓首

一月十一日　茨城縣の一平民

▲肺病と賄賂病

閣臣若し肺を病む者有る遠慮して天顏に咫尺し奉らさ

るを禮とすと聞けり、閣臣若し無責任病を病める時は奈何、綱紀紊亂病を病める時は奈何、賄賂病を病める時は奈何。

▲無責任無常識

文部大臣は何が故に責を引かざると問へば延て内閣全躰を打ち壞はすの恐れ有るが故と云ふ、長くて今後半年か一年しか持たぬ一内閣重きか、永久國家に大惡例を遺すが重きか無常識も亦極まれりと云ふべし。曾て故星亨氏は大臣として同様の問題に逢ひ潔く其職を辭したりき、乞ふ今回の事特に一國風教の中心たる文部省に於て起りしを記せよ。

▲恐るべき露西亞流儀

出版言論の自由を拘束せることの第一なるは露國なり、學校教科書の檢定最も嚴なるは露國なり、例令へば旅客の露國に入らんとする税關にて其行李中貨物よりも書籍の檢閲に面倒を生ずるを例とす。而して爆彈騷ぎはかゝる國柄なるを以て多し。偏狹なる杓子定規を以て露西亞風の虐政を行はんとする我邦の文部省は、實に國民の前途に恐るべき害毒を遺さんとするものなり。一倫理書引例中の隻語を捕へて直ちに從來許可せる哲學館の無試驗檢定の特權を剝奪するが如き、即ち其一例なり。

▲倫理と收賄

無害の一冊子に難癖付けて私立學校を迫害する一方には、泥棒の親方となりて國家の綱紀を無視す。此の如き教育界、此の如き文部省、而して主張すらく我國には宗教の必要なし教育のみにして足ると、又可笑からずや、聞説く哲學館の倫理書に故障を附けし視學官は同時に收賄の嫌疑者なりと、益す妙なり。

▲酒客と死刑

警視廳の調査に曰く、違警罪の殆んど總ては酒に基因し、死刑に處せらるゝものゝ多數も酒にありと。死刑に處せられし者八千六十人中、大酒客三千五百十四人、二合乃至三合の中酒客三千四百九十二人、酒の嫌ひなる者八百零六人、酒と犯罪の關係益明瞭なり。

▲讀むべきもの笑ふべきもの賛すべきもの

小河滋次郎君死刑廢止論前月讀むべきものゝ最なり
高橋作衞君の漢文奬勵論前月笑ふべきものゝ最なり
自由投票同志會の發起は前月賛すべきものゝ最なり

## ▲十人十色

△吳汝綸氏　支那に還つて曰く、日本に渡航して着するや否、第一に

置けるは長崎病院にて胎兒の第一月より第十月までアルコホル漬として陳列し在りしことなり而してかゝるものを見し彼等は感じてこれでこそ醫學が進歩せるなりとの嘆服となれりと

△アオシー氏　日本の菓子は目で喰ふ菓子で口で喰ふものではない暗中で喰へばドノ菓子も砂糖の變形と云ふのみで味は皆一つだ

△原　敬子　金瀧堂のお神さんなり、曰く「どうもトンダ事で皆様に申譯がありませぬ、アスか書物屋なんどのはマダ事がかるいのですが、これが、外の省でヾもあつて御覧ナサイ中々今度位の事では濟みませぬ」

△石黒忠悳氏　一體賄賂を行使するといふ事に付いて、使ふ者は罪はない、之を受る者が罪がある、商人や町人が儲けたいから賄賂を遣ふのだ、賄賂なしに金が儲かれば、誰が賄賂を遣ふ馬鹿があるものか、然るに一定の名稱と俸給を受けて居りながら、賄賂を受けて、其職責を空うするとは、實は受賄の奴は犬とも馬とも云やうのない奴だ

△島田番根氏　イツの代イカナ時でも賄賂の無くなると云ふそんな時代が來る筈が無ひ只其甚しきに至らしめない樣にするが爲政者の責であるあのやうにあばいて以て直とする樣なことはしなくてもよかりさうなもの

△長谷川泰氏　人は盗心が有る、但し盗才有る者が尠い、我々は盗心有て盗才無しと云ふものだ

△内村鑑之氏　政治家をして競爭せしめよ、犬をして嚙合はしめよ犬と政治家とが相互を嚙殺して後に好き時は來るなり。余輩は彼等の競爭の益々激しからんことを望む者也

△大隈重信氏　近頃は國の元氣が振はぬ、男子が多く女性化して來た、從つて國も女性化しつゝある、國はもと男性的のものである、決して女性的のものでない

△近衞篤麿氏　學習院の生徒に就て、曰く、寧り憫むべきは彼等が卒業後の狀態である、彼等は衣食に差支なく、地位があり、それで働き得る腕を有ちながら、社會の事に奔走する等の事は殆どせず、別莊に往くとか、溫泉に往くとかして、寫眞を撮り、遊なする位が殆ど毎日の仕事となつて居るのである、勿論其中には社會の爲めに盡す者もあるが、多數は此樣にして暮して居るのである、此樣な者は何う云ふ氣か知らぬか、多分父祖の財産を維持すればそれで靜いと思つて居るのであらう、誠に嘆息の至りである。

# 文藝時觀

虎　溪

## 闇中語

おんちうことだんぺいと地口りたがる、そんちよそこらの通樣まゐる。闇中語、「めざまし草」に知られたる雲中語の其れにかあらず、かれは、見下す雲中の長目觀察、これは、手まさぐる闇中の盲探索、あながしこ、かけても思ひ比べしなゝたゞ、闇のうつゝに、弦を放れし案山子の征矢の、夢野のあたりへ、がさこそ、音さすがせてもの命となん。

◎嗚呼高山樗牛居士　落莫たる壬寅文壇の末期に於て、才人樗牛氏を失へるは痛心の事なりとす。實に氏は、其の友芥舟君の言へる如く、春秋僅に三十二を以て終りたる短生涯にして、『毀譽褒貶一に喧しかりし

君の如きは謚し稀れ』なる所なるべし。夫れ居士が人格を許し、性格を品するは世其の人あり、われ等の容喙すべきにあらず、又文壇に致したる功過に至りても、他日の細察に竢たざるべからず。かの、居士を呼ぶに、「問題提供者」を以てし、ペダントを以てしたるが如き、或は居士を擬するに、評家を以てし、詩人を以てしたるが如き、孰れか當否を知らずと雖、必ずや其處に過實の跡を認めずんばあらず。古人曰く、「棺の蓋を掩うて論定まるべし」と、われ等は居士の眞價が同人の手によりて、顯彰さるゝ時を竢たんかな。

◎帝國文學の芝峰君へ　最近の帝國文學に、芝峯君が、俳人子規子を論じたる一節あり。其の起首に一喝して曰く『明治の俳人は現に病んで根岸の僑居に沒してより僅かに數閲月、大龍寺畔の晩風うら淋しくも詩人が墳塋の枯草を拂ふに反し、子が名聲隆然として江湖に喧傳せられしは奇と謂ふべし。』と。そもそも奇とは何の謂ひぞ、奇怪なりとや、不可思議なりとや、珍奇なりとや、奇といふ、必ずや尋常なるもの、當然なるもの、恰當なるものにあらずといふに在るべし。

われ等の所見は、この詩人が死後に名聲の隆々たるは當然の事にして、些の奇あることなく、寧ろ大詩人の短生涯が、閒寂として世に閑却されたるを奇なりとなすものなり、げにや樗牛子と子規子とは、壬寅文壇が失へたる二將星なり。されど其の明治文學史上に寄與したる効果に至りては、誰か軒輊の論に惑ふものあらんや。

抑々君は、子規子が俳句に成効したるは其の功甚だ小にして、和歌に於て失敗したる過は甚だ大なりと謂はんとするか。何ぞ其れ成効したる俳句を語ること少なくして、失敗したる和歌を論ずること詳かなるや。さるにても子規子が名聲の隆々たるは、其處に和歌に於ても成効したりと做す、世の惑ひありといふにや。兎まれ角まれ君の口吻は奇なりと謂ふべし。

見よ君は、子規子が詩人として價値あるものは、十七字の刷新に在ることを説き、一轉語を下して曰く『而れども俳壇に成功したる子規子は歌界に成功したる子規子にあらざりき』(圏點原文の儘)といへるを。思ふに君が下し給へる奇てふ文字は、此處に胚胎せるものにあらざるか。されど人の美を成すを君子の風なりとする古言もあり、われは君を以て人の過を責むる酷にして、人の美を揚ぐるに吝なるものと做すに忍びざる

なり。

然りと雖、君が世人のこの詩人を買被りはせぬかと案じられ給ふが如き口吻あるは、到底通讀するものゝ疑はざらんと欲するも能はざる所なり。見よ君は子規子が和歌失敗談を深刻の筆を以て描き『古人言へり俑を作るものは死すと、子規子また俑を作る者に非ずや』と結びて、和歌壇の敗將に死を宣し、其の結末に於て『知らず誰か詩人の作時を細想して其の偉勳を懐ふの時、僞なく飾なき子が一生を描破して赤裸々の眞相を傳ふるものぞ』（圏點原文の儘）といふ語を合せ考ふれば、君が意の那邊に在るか、豈夫れ察するに難からんや。

◎清少納言と紫式部　われは著者の序に據りて、『清少納言は新に執筆せしかども、其の實著者が稻門時代の研鑽にして、紫式部は其の卒業論文』なることを了しぬ。著者は、この二天才を中心として、兼て時代世相の面影を描破せんとしたるものなり。而して、特に著者の靈腕は、後半の紫式部に於て現れ、其の式部が理想を論じ、源語を品するあたり出色の文字と謂ふべし。

且又、式部が思想の源流を繹ねて、惠心が往生要集を拈出し、更にこれをダンテの神劇と比較し來る、著者が識見の、凡ならざるを見るべし。著者の序にいふあり『近頃源語の性格研究論や、人生觀、道義觀など云ふ議論が、ちらほら世間に見えるやうだが著者は少くとも六年以前其等を道破したのである』と。兎も角も先覺者の榮位は、著者に歸せざるべからず。若し夫れ、われ等がこの上の望みを言はゞ、今一層材料を精選し、全篇の結構を緊縮して、敍事推論の暢達を期する事なり。抑々著者が語らんとする處、論ろはんとする處、この書の量に比して多きに過ぎたる跡のほの見ゆるは、又止むを得ざるものありて然るか。

◎濱子　草村北星氏の處女作「濱子」一篇、壬寅文壇掉尾の作として、江湖の歡迎する所となりぬ。夫れ春蠶吐絲てふ語は、移してこの作家の筆致を評すべし。其の綿々として絕ゆることなく、縷々として窮りなき筆の、語りては餘蘊を殘さじとする戀人の怨言に似たりとや言はん。其の筆の何處やらにうら若き節あるはよく濱子の無邪氣なる幼稚なる性格と似通ひて、短處のやがて長處となれる姿あるはうれし。

われは更に一篇を貫きたる文致を品するに、溫潤玉の如しと謂ふべし、而して又この語は主人公濱子が性格

の一面を表するものと謂ふべし。若しこの作家の長は、其の心理的描寫に在り、精緻、暢達、流麗は其の長處にして、穿拔、深刻、機智は其の短處なり、されば健筆の欽羨すべきものあると同時に、冗漫の嘲り强ちに否む能はざらんか。これ大に他日の修養に期待すべき處なるべし。

若しこれを性格小說として見んには、恐らく十分に成功したるものにあらざらんか、濱子の性格の見るべきものあるも、他の人物は總じておぼろげにして、未だ一膜を隔つる感なくばあらず。かの作者が「惡魔の子」と稱する小菅の如きも、影の如く、幻の如く、殆んど捕捉し難く、爲に薄命に泣き失戀に哭する可憐の兩戀人に反襯して、一段の光彩を添ふる能はざりしは遺憾なり。蓋し作者は運命(フォーチューン)の女神が、人を簸弄する野心(カプリシャス)を以て葛藤の因となせると覺しく、小菅は其の女神の不機嫌なる所を代表せる權化なるべきか。何にしても小菅が濱子を死地に擠したる動機は作者の甚だ惜みて放たざる所なり。

通篇菊版三百頁の大篇にして、單にビューアなる戀に生きてビューアなる戀に死したる濱子の短生涯を敍す、如何に纒綿の情思を遺憾なく寫し出せるかは察するに餘りあり。而して特に末尾の「由井の濱邊」「その心こそ」「病院」の三篇を壓卷とす。

◎少年世界文學　其の第一篇は正宗白鳥氏の「ふしぎの魚」第二篇は中島孤島氏の「狼太郎」第三篇は河井醉茗氏の「神代のはなし」なり。而して是れ等は皆坪内逍遙氏が精細に朱を加へたるものなりといふ、其のありふれたる杜撰の昔噺類と撰を異にせることを知るべし。

先つこの書を手にするものは、其の製本の意匠に數奇を凝したる、其の挿畫の驚くばかり美麗なる、例の博文館もの、金港堂ものを眼前に控へて、泡吹かし呉れんとの書肆の意氣、甚だ壯なるを見るべし。

若しこの上に多きを望まば、

一、校正の今一層的確なるべきこと。

二、思想及び文字の程度を首尾一貫すべきこと。

三、言語は成るべく敬語を用ゐ、少年のテクニックスを正當に使用すべきこと。

等なるべし。

◎新小說第八年第一卷　この篇收むる所、柳川春葉氏の「泊客」、泉鏡花氏の「二世の契」、中村春雨氏の「野分」、小栗風葉氏の「有緣無緣」、前田曙山氏の「鶴」

後藤宙外氏の「公民」、其の附錄として尾崎紅葉氏の「新續金色夜叉」なり。
「泊客」は輕快なる新婦と、夫の姉との間の感情の蟠りが、一寸したる機會に出りて融和したることを描きたるものにして、別に着想取材の奇を衒はざるも、善く婦人の弱點を穿ち、急處を刺したる手際いとめてたし「二世の契」と共に篇中の佳作なるべし。
「二世の契」結構に於ても着想に於ても、例の鏡花式の險怪幽玄なる、又かと思はるゝは何時もの事ながら、さすがに棄てがたき節あるは、其の深刻なる筆の人を魅するものあればか。
「野分」は一旦墮落したる女學生の、中頃本性に反らんとしたるが、境遇の變化の厭はしさと、古き戀人の情の文に心迷ひて、老ひたる父母を棄てゝ走るといふ筋を書けるものなり。これはおなし人の「親心」に亞げる佳作なるべし。
「有緣無緣」及び「鶴」は篇中の惡作なるべし。
「公民」は例の田園生活の賜物として、何時もながら田舍漢の爲に氣焰を吐けるものなり。主人公の義氣あり、慈悲ある老人の性格は、遺憾なく描寫せられき。されどこの老爺人生の眞趣を解したる樣にもあり、世相を悟れる樣にも見えて、而も取り出てゝ言ふべきフィロソフィーなきは口惜し。
「新續金色夜叉」は嘗て一度「讀賣」に掲載せられたる宮より貫一に送りたる長文の艶書なり。

## ▲文壇むかし譚

花咲爺

むかし話左樣、ほんの昔話に過ぎない至つて詰らないものであるが、この頃、事に觸れて圖らず思い出したことがあるから、少しばかり話して見やう、
◎今年の元旦に『大阪朝日』が募集した「大阪市の歌」で第一等の選に當つた一柳芳風といふ人は、名を安太郎氏といふ國學院の卒業生で、今の『文庫』が未だ『少年文庫』といつて居た頃に、能く和歌や新体詩を投書されたことがある。その頃から穩かな暢和とした調子で、投書家中に一種の異彩を放つて居られたが、終に今度晴れの場所で譽を得られるやうになつた。たしか大坂は氏の故郷であると思ふ。
◎『文庫』といふ雜誌は、古い方では本誌に次ぐ程の長い歷史をもつて居るもので、『少年園』の木戸君時代から今までの間には、投書家の顏觸も幾度か變つて來たであらうが、その中には社會に出て文筆を以て立つて居る人も隨分ある。今の文士といふ人達に就いて、その過去を調べて見たら、一度同誌の御厄介になつた人が多少あるに相違ない。
◎一柳氏より前であつたか、後であつたか、古いことであるから忘れてしまつたが、今の『文庫』が丁度『少年文庫』といつて、やつと發行され

初めた頃、一柳氏と同じやうな傾向をもつた菊地端月といふ國文家があつて、楽子を主人公とした何とかいふ小説、その外、和歌や文章などを投書して居られた。その頃は、未だ關西某地の中學校に居られた頃で、その後、國學院へ入られたといふ噂までは聞いて居たが、此頃、小出粲氏の關係して居られる國文の雑誌を見たらこの人の書かれたものが載つて居た。

◎それから、『文庫』には、今の『大坂朝日』の角田浩々氏も櫻堤といふ名でたしか一二度投書されたことがあつたやうに思ふ。

◎薄田泣菫氏も、これは二三年前、即ち氏が未だ今日の名を成されない頃のことであるが、何とかいふ變つた號で、新體詩を投ぜられたことはなからうか。

◎『城南評論』といふ雑誌は、沒理想論の爭を知つて居る人は、未だ記臆して居るであらうが、あの頃同誌の大將株であつた寺山星川氏またの名鬼門關尹殿は、その後、相變らず『時事』に從事して居られるが、この頃は古實家になつて、瑞祥や、懸物のことを『國華』に書いて居られる。

◎同誌へ『非學研道』といふむつかしいものを書かれた臥溪大夢といふ人は、本名を土屋元作といふので、今大坂へ行つて、博覽會のことを載せる『三十六年』といふ雑誌の主任をして居られる。

◎あの頃、また同誌へ和蘭の美學などを紹介された新井虎南といふ學者があつたが、この人は『時事新報』の記者でたしか昨年歐州へ旅行されたさうだ。有名な國歐の押韻に就いて旗野秋坪氏と文壇に花を咲かしたのは、この人であつたが、旗野氏と共に、その後、文壇に跡を絶たれたのは、國詩發達の今日、のこり惜しいことである。

# 教育時観

環翠

## 教育界のペスト病

議會の解散なんどは生等の與かり知らざる所に御座候へども、都下のペストと共に教育界の醜態に就て默止すべからざるもの多く候。

ペストは野蠻病なりと申候由、收賄は文明國の流行に候哉、さりとて東洋の君子國に於て、而も教育者がかゝる失態に及び候事かへすがへすも苦々しき次第に候。

さて書肆は固より利あるを知るのみ、教育者と雖亦身に黴菌の侵入すべき瑕瑾有之、勿論信念の薄弱なる衛生上の不注意も有之べく其人に罪なしとは申兼候得共かの黴菌を傳播する運動員即ち教育界の鼠族こそ實に惡みても猶餘りあるものと存候。彼等は常に傲然として種々の教育團躰に出入し、黄白の黴菌を散布して恐るべき病毒を傳へ居候。

而して此等の鼠族は若狹其他の出身にて兎に角教育界に産れたるものに候由又或る教育大家(と自ら思ひ、又人も思ひ誤れる)は各書肆の運動員として嫌疑を受けつゝ尚且公徳問題など喋々致居候由言語同斷のことに

候。

近來都下の各工場は業を休みて大清潔法を勵行致し、且職員職工の健康診斷を行ひ居候、帝國教育會の如き茗溪會の如き教育界の大工場は此際大掃除を行ひ、會員の健康診斷を試みられん事希望に堪へず候。

嗚呼此鼠族、其死骸五錢に價すべくもあらず候得共、せめては教育界の柵外に打捨てゝ制裁といへる高塀を立て置き度候。

帝國教育會の如きは原亮一郎が先づ其會の幹事たるを止め、其他の鼠輩を驅り盡くして、能く／＼其內部を天日に曝さずんば同穴の誹りを受くべくと存候。茗溪會も同じく、茗溪會堂の建築費など一万有餘の金圓は或は鼠族の傳へたる病毒にあらずやとの噂も有之候由、兎に角目下の際に御座候間臭き物に蓋せぬ樣くれ／＼も願上候。

## 文部大臣の責任如何

先日の官報にて長野縣松本女學校長は寄宿舍の失火に就き、不注意なりとて文部大臣の譴責を受けたる由に見受け候。

目下盛に燃え上りつゝある教育界の大火事はいかゞに候哉。金港堂が火元にて都下の大書肆を燒き盡さんばかりに候、人畜の死傷夥しく火の手は何時やむべしとも覺えず候。あはれ／＼今後の教育界は人烟稀れなる燒野が原となりて、慘憺目も當てられぬ次第と相成申すべく候。

抑も文部大臣は此有樣を如何御覽被遊候哉。對岸の火には有之間敷、學校の火災に校長の不注意を責め給ふ御方にして、此拭ふべからざる教育界の大恥辱、學界の大火災を知らぬ顏にて居らせられ候御心底にや。此度の犯罪者は多く當文相の就職以前に其所業の成立せしものとするも、其餘烟をも認め得ざりしとは如何にも不明に候はずや。大臣は辭意なき旨斷言被遊候由に候得共、かの日英同盟成立の際、男爵に彌治り附き給ひし程の御力ならば、かゝる失態に及びても尙其儘に居らせられ候事は毛頭有之間敷と存候

又々ペストの事申出て恐縮に候得共、其發生地たる瓦斯紡績の社長は會社の株主の比較的冷淡なるにも係はらず。自己の資産を蕩盡しても、社會に對して申譯なしとて、善後の爲めに勞力と金錢とも吝まず奔走致し居らされ候。聊か御參考にもと申添へ候。

## 根底なき道德主義

敎育家は多く宗敎無用論者にて、能く自己の智識を以て、良心を以て總ての誘惑に克ち得る樣に申され候得共、此度の失態は如何に候哉、吾等は宗敎的信念を度外視せる倫理道德主義の、果して無上の力を有するや否やを疑ひ居候處、果せる哉、根底なき道德は美事に打ち毀され候。敎育家自ら其脆さを白狀致され候事已むを得ざる次第と存候。此上なほも負け惜しみ申され候哉、最早如何に負け惜しみ申され候とも無益の御事と存候。

## 同性間の誘惑（女學生墮落の源因）

女學生の墮落問題は昨今下火に相成、而も何等の救濟策も行はれずして其儘に消え失せ候得共、根底深く沈澱せる害毒は容易に去らず候。

世の人々が女學生の墮落に就きて、其源因を究められ候得共、なほ〱思ひ及ばぬ事數多く有之べくと存候抑も男子の誘惑は女學生墮落の源因として大方の人の知る所に御座候得共、却て同性間の誘惑に最も恐るべきもの有之候。同窓の惡女學生が純潔なる處女を闇路に誘ひ行く樣の如何にも陰險にして、而も其方法の到り盡くせる事實に驚くべく、女性の惡者は男子よりも一層慘酷に深刻なる手段を有し居候。されば假令知人の家に寄寓するものと雖巧みに自炊を勸めて同穴に引き入れ申候、感じ易く吝なる女の根性より遂に「お爲めごかし」と知らて、それに赴き一朝不倫を強いられても再び其穴を逃れ出づる勇氣無之、遂に心身を傷け候次第に御座候。

抑もかゝる惡玉は自ら陷りし恨を晴さんが爲めに、他を陷れて快とするもの多く、惡業を働かんが爲めに、無垢の少女を捕へ來らんが爲めに、日々殊勝らしくも登校致居候者有之候由、各女學校に於ては飽く迄かゝる惡性者を探求して故鄕の父兄に引渡す事、我敎育界の爲めにも亦我國將來の爲めにも寧ろ當然の義務と存候。

## ▲くさ〴〵

▲打算敎育　「此れだけ敎育を施したから此れだけの人物にする事が出來るといつて、差引勘定の附く樣なのは、世間の敎育が誰でもして見れます。然し三年と五年と骨を折つても一年か半年の效果さへ見えないといふ不具者の敎育こそ宗敎家が進んで之れに從事すべきてす」とはかの有名なる白痴敎育者石井亮一氏の言であつた。これぞ誠に神の福音て

はあるまいか。香川縣の或る教育家は齋戒沐浴して齊を認め、血判をして、石井氏に生涯の師と仰ぐ事を許されたいと申込んだそうだ。

▲好餌教育　宗教家の立てた普通の學校は信仰を強ふる傾きがある。吾人は之れを食はんが爲めに手飼の家鴨を肥すものに似たりといふ。

▲日曜學校　吾人は基督教會の日曜學校なるものを見る毎に、先天的に獨一眞神の觀念なき我國の兒童が神の話を聞ひて居るのを可愛相に思ふ。神とかエスとかいふ事をかの軟かな頭腦へ無理に詰め込むのは慘酷ではあるまいか。吾人は智識の自然の發達を無視する不倫の徒といひたくなる。苟も心理學が教育の基礎であるといふ事を知れる教育者にして之れを默視して居るのは、教育者の「正當防衛」を忘れて居るのではあるまいか。

▲天狗流行　岩谷商會は日英同盟天狗、國益天狗、愛國天狗などと種々の名を附げて卷煙草を製造販賣して居る。而して我國に於て以上の天狗が上下に滿ちて居るのである、即ち曰はく今の政事家は日英同盟天狗、實業家は國益天狗、教育家は愛國天狗

▲姑氣質　哲學館は文部省から御機嫌を損ねた。倫理主義がなんとやら主義ならまだしも、教科書の引例が而も餘所の爺さんの噂をしたのが家風に合はないとかて、憐れにも新嫁は夫の留守に去られたのである。今更の事ながら文部省の姑氣質にもあきれたものだ。然るに何ぞや、文部省の視學官、嫁の惡口をそつて告げた小姑がツマミ喰ひして縱にかゝつたとは何たる事だらう、其邊の所謂動機とやらを聞きたいものである。此れては日本の一家も治まらないと思はれる。

▲中島多數　我教育界には澤山の中島がある。曰はく中島力造、曰はく中島泰造、曰はく中島德。、曰はく中島半次郎、而して有名なる教育家神田中學校の幹事にも中島某あり

▲漢文廢止　吾人不幸にして未た曾て高等教育會議の決議なるものに感服する事が是迄一もなかつた。然るに昨冬に到つて一を得た、曰はく中學校に於ける漢文講讀の廢止。勿論である。誰が何といつても脊表紙の巾が效いた頃は天下様の時代であつたのだ。此決議をして用ひなければ文部省は明かに最高教育諮問府の面目を蹈み付けたものである。

▲新記學閥　我帝國大學の門前を過ぐるものは必ず見るべし、丸善最上インキの大廣告と、而して街の左右にはノートブック大競爭販賣の立看板とを。これても日本の大學校は學術に於て世界の大學に劣らないのである。

# 宗教時觀

## 殖民と宗教

篠原曉風

小國の民は、概して殖民事業の成功者たり。英國は更らなり、フイニシヤ、希臘、和蘭、葡萄牙、ともに世界殖民史上に於ける、月華星彩たらずや。而して獨り日本は未だ與らず古來三千年間依然たる小日本、唯だ内に尙武的日本を代表せる政府と外に淫樂國日本を紹介するの醜業婦とあるのみ。

英のルーカスは云へらく、冒險、商業、宗教、これ即ち殖民の三大誘導力にして、就中宗教の感化によるもの、常に至大の勢力を有すと。宜なり、日本は此等勢

力のすべてを缺げり。殊に宗教に於て何等の見る可きものなかりしは、洵に以て千歳の恨事ならずや。歴史は死せる證人なり、しばらく過去の事實に照して宗教の殖民事業に於ける、筋力たり、精力たる所以を說かしめよ。

▲宗教と冒險心

新開の後進國に對つて、其の人民に與ふるに嶄新の感化力を以てし、未墾の地方に於て、將來の好運を開發せしめんには、冒險心の勢力の外、他に何ものゝ存す可きや。是れ寧ろ自然の配合に近しと云ふ可し。而して宗教心は、また恒に其の冒險心を導くの、篝火たることを忘る可からず。熱中せる宗教的の信念の活火は外界の何物も之を奪ふこと能はざればなり。英國に於ける佛のユーグノー宗派の如き、ニユーイングランドに於ける淸教徒の殖民の如き、若しくは彼のナントの法令に對する、ネザーランド人の移住の如き縱ひ此等は一種の特例なりとするも、なほ近世探險家の鼻祖、プリンス、ヘンリーが、亞弗利加海岸を探險したるは、ひとへに曖昧なる蠻民をして、基督の感化を享けしめんとするの誠意に出てたりと云はずや。コロンブスが新世界發見の本旨も、其始め印度よりエルサレムに至るの航路を開きて、新十字軍を送らんとするの企圖、計らずも亞米利加發見の結果を來たせしにあらずや、其他チャンプレインや、ギルバルドや、殊にリビングストンの傳紀は、探險的傳導の一大著述と見ずや。宗教心は實に冒險の勇力を生みき。

若夫れ冒險心に伴ふ、殖民事業の成功に至りては、總じて信念確乎たる國民の、個人的活動によるもの多きに居れり。近くば西葡英佛、ともに其の探險者の勇悍に於て劣ることなかりき。但だ其の政府の力を借らずして、個人的殖民に勉むるの勇氣に至ては、彼等は到底英人の右に出づ可くもあらざりき。而して遂に英人をして最後の勝利者たらしめき。

於是か、殖民事業の成功は、由來宗教心に導かれたる冒險心の勢力によりて開發せられ、信念ある國民の個人的活動力によりて、最も能く成功したるものと云ひ得可き乎。

▲宗教と商業心

冒險心の餘りに强大なるは、稍もすれば一時の虛名に驅られて、永遠の大計を忘るゝなきにしもあらず。商業心は即ち其の純一の冒險心を輔けて、永遠的殖民の成功者たらしめんとするものなり。

彼の北地探險航海に就て例するも、皚雪氷凍の地、到底企業の望なきに當つてや、只獨り漁業に於てのみ成功を見たりき。但し漁業は一定の季節を選んで出航するに過ぎざるも、而も之れによりて、北米と歐洲との交通を開始し、寄航の海岸に於ては、自ら此處に永久殖民の基礎を定めぬ。或はまたヴアジニヤ商會、東印度會社を始として、當時興起せる幾多の諸會社が、如何許り探險者の成功を善美ならしめたるか、エリサベス時代の隆運を來たすに力ありしか。しかも其の商業の根底を確め得たる事の、宗敎の力に依る多かりしは正しく殖民史上に於て記憶す可き要事に屬す。

ヴアジニヤ商會は、宗敎を本旨としたる傳導及び商業の團体なりき。されば基督敎弘布の爲めに人を集め、財を貯へ、盛に改宗事業に盡したるは、世に隠れなき事實なりき。商業熱心の蘭人も、其のセイロン島に於けるや親摯に土人の改宗に努め遂に葡萄牙國羅馬敎徒に代つてこゝに印度貿易の要地を占めき。擧ぐれば數多き此等の事實は、史上これを記して餘りある所、加之、等しく殖民人種と稱ふるなかにも、印度の會計報告に驚て奮起し、たゞに掠奪と攻伐とを先にしたる西班牙殖民は敗れ忍耐と平和とを旨として、專ら商業の擴張を計り、宗敎の感化によりて、永遠の幸福を布がんとしたる和蘭殖民は、縦ひ當時殖民地諸王の侮辱を受けつゝも却て成功の地位に達したりき。或は又これを前者に學んで、唯だ少しく近世的なりと稱せらるゝ佛國殖民の現狀と寧ろ後者に鑑みて最後の勝利者たりし英國殖民の近況とを比較し見よ、吾人は此等の現象を以て、宗敎的勢力の干係なしに觀過する能はざるなり。

顧慮へば冒險企業共に宗敎心と相俟て殖民事業の三大勢力たるか、ルーカスは欺かざりき。

左れば吾人は云ふ、凡そ目的の善美なるものは、亦自ら之を遂ぐるの方法を具備す。而して宗敎家純一の目的は、即ち其中間の困難を排除するに足るものなりと。

然るに退嬰姑息なる、我國民の現態を患ふるもの、往々にして云はく、是れ畢竟宗敎の罪、寧ろ佛敎的感化の科なり。寒暖中和の氣候、封建鎖國の餘習、亦係はる所なきにしもあらず、されども、就中彼の寂滅爲樂主義の感化は、即ち日本國民をして遂に如此く然らしめたりと。噫夫れ果して然るか。

高原の牧業に、平原の農業に、而して海濱の商業に適

するは、是れ正しく社會物理上の原則とする所、港灣ありて此處に商業開け、外國交通起り、從つて其國民の見聞を擴め、氣力を勵まし、而して國家は進步す可し。是れ世界文明の幼兒は、何れも海なる母の恩惠に依つて哺育せられ、成長し來りたる所以ならずや。見よ、同じくイスパニヤ人種中に於ても、海濱に接する葡萄牙人は、自ら内地イスパニヤ人と異にし、別趣獨立の民となり、等しく獨逸人種ながらも、海邊に住する蘭人は、分れて一新富國を興しぬ而して共に特殊の手腕を振ひて、世界商業場裡に活步したりき知らず東洋の海島帝國民果して世界的商業國民として恥づる所なきや否や。

海國の民は總じて遠洋航海の術に長せり、從つて冒險的企業の念に富みき。蓋し彼等は渾圓球上、恒に澎湃たる大洋を以て通路となし、好墓田となし、敢て天然の威力に屈せざるなり。されば古來殖民事業は、主として大洋航海の人種に依て成れり、世界の拡大兵國、即ち昔日の羅馬と、今日の露國とを除けば、殖民事業のすべては、遠洋航海の結果なりとするも、敢て過言にあらざるなり、若しそれ英國を擧げて例せんか、彼れが十六世紀の記事は、殆んど暗黑諸國探検の航行と、大膽なる冒險家の傳紀とを以て充たされき。プラツド、ボーアを始めとし、北地探險者ウイローピー、チャンセローあり、フロビッシャー、ダビスあり、英國政府を誘導して、其生地デボンシャア人を世界各地に航行せしめ、英國民をして、西班牙殖民の勢力を嘲笑せしめたる、サー、フランシス、ドレークあり、彼れの勇悍に勵まされて、自ら世界廻航を企てたるキャヘンチッシュあり、其他宗教熱心のハンプレー、ギルバルドあり政治家にして一大英傑たるサー、ワルターラレーあり、如此くにして、十六世紀の英國は世界航海國となり、熱帶・寒帶、及び地方航海の危險を冒して、漸く世界殖民の根據を確め、而して終に今日の結果を來たしぬ。知らず極東の英國民、果して彼等當年の鋭氣ありや否や。

▲日本を誤るものは宗教家と實業家なり

海國としての日本は、凡そ天惠のすべてを有せり。中和なる氣候、灣曲せる海岸線、増殖多大なる人口、殊に三大陸間に介在せる地位は、自から航海に、殖民にはた商業に、あらゆる點に於て、こよなき天祐を有せり。而して共に振はざること、尚ほ今日の如きは如何噫これ或は宗教感化の罪か、さなくんば事足つて物成

らざるの徒か。

勞働者供給國としての支那醜業婦輸出國としての日本これ殆んど西人間好一對の俚諺となれり。此等兩國に依て起れる東洋の前途も亦禍なるかな。縱ひ勞働は神聖なるにもせよ、力役の業務と、腦力の業務とは、自らこゝに一種の區分する所なくんばあらず。矧んや甘んじて世界の勞働者たらんとするに於ては、中華を以て自任せる支那人種の、須らく三省す可き事ならずや。若しまた醜業婦供給國の語に至つては、吾人豈に恨みなからんや。美術國、君子國を以て居る程の日本、計らずも淫樂國日本として紹介せらるゝに於ては、吾人豈に慨せざらんや。聞くが如くんば、我醜業婦の散在せる、米洲は更らなり、濠洲、印度より、亞弗利加、西比利に至る迄て、苟も航通の便あらん限りは、殆んど殘る隈なく行き渡りて、世界の各所に醜態を演じつゝありと。本邦の地、胡すれぞ獨り彼等の、斯くも敏活剛膽なる擧動に出でつゝあるか。

醜業婦の出づる必ずしも日本にのみ限る可からず、必ずしも日本の先天的に、醜業婦供給國たるにもあらざる可し。佛國の如きは、殖民政策上、寧ろ陰に之を獎勵しつゝありと聞かずや。然るに獨り日本を目示する事の、如此く甚しきは如何。曰く故あるなり。

凡そ列國殖民の次第を見るに、上來少しく述ぶるが如く、冒險家出で、宗教家出て、此等勢力の誘導に伴ふて、企業者次ぎ、勞働者次ぎ、此處に永久殖民の基礎をつくる、是れ一般常事とする所なり。然るに本邦に於ては否らざるなり。次第は逆まに繰出されつゝあるなり。移民の幕の開かるゝや、卒先日本國民を代表して起ち。起つて最も勢力ある一團をなさんとするものは、即ち醜業婦なり。二三の野心家、少數の勞働者、而して稀れに布教者の之れに次ぐあるのみ。されば若し該地に於ける諸外人の日本を知り、日本人を知らんと欲せば勢ひ先づ此等醜業婦と云ふ、最も汚れ多き眼鏡を通して覗はざる可からず、遮莫あれ、其の他の方法によりて日本を知る能はざる幾多外人の、本邦を目して淫樂國、醜業婦供給國となすの宜なる事よ。

吾人は寧ろ服す。我醜業婦の膽力と、機敏と、殊に其眼界の廣きとに。内に蠢々として爲すなく、却つて彼等賤婦の先んづる所となり、徒らに淫逸譎詐、以て自ら足れりとする、我宗教家、實業家、これ果して何等の面目ぞや。日本を謬るものは、決して前者の科にあらず、實に後者姑息の徒に存するを知らずんばあらず

國土は奪ふ可し、國民は滅す可からず。吾人は我殖民と商業との不振を患ふると共に、更らに心靈上の腐敗に於て、前途甚だ慨嘆に堪へざるものあり。我國教徒は稍もすれば云ふ、現在は假りの宿りのみ、永刧の鐵鎖の一小環に過ぎずと。而して其鐵鎖のすべての力は又その最も弱き一小環に在るを知らざるなり。現在に於て活動なき國民は、是れ即ち亡國の民なり。寂滅爲樂は決して退嬰無爲の徒たれ、亡國の民たれと云ふにはあらず、國民の滅亡は、同時に宗教の滅盡を意味せずや。されども若し之を以て如上の意義に誤解するものありとせば、乞ふ其の語の母國たる印度を見よ、迷信國印度は、只今眞に寂滅の姿にあらずや。

▲猶太教徒を敬慕す

吾人は猶太教徒の元氣を敬慕せざるを得ず。彼等の本國を逐はるゝや、其の憎惡の甚しき、宛然野火の獸巣を拂ふにも似たりき、而して其の四方に流遇せるに當てや、恰も喪家の犬の如く、叱咤せられ、恐嚇せられあらゆる虐遇のすべてを受けて、而も尚ほ屈せずして云はく

精神の存するあり、吾人は之を永存の住所となし、長へに子々孫々に傳へん。吾人が來生の子孫は、此の精神に富み、不變の基礎の上に立てられたる希望を有し得るなり。

壯なる哉この意氣、是れ今日猶太教徒をして、堂々宇内に活歩せしむる所以なるか。猶太人種の生命は、即ち其の元氣にあり。敢て問ふ、我佛教徒尚ほ生命ありや。

財政の困難を哀訴せる日本、民力の休養を絶叫せる日本、而して尚ほ軍備の擴張を强逐せんとする日本。なんすれぞ其の本源たる、國民元氣の擴張を計らんとはせざる、精神上の領土を擴張せんとはせざる。二十世紀は實に平和的競爭の世にあらずや、圓滿なる生活の競爭場裡にあらずや。

殆んど日本全國民の心靈を支配しつゝある佛教、其の布教ありてより此の方、年を經る凡そ三千年、其の教理中に生死するもの四億八千万、其の精神上の領土に至つては、ニーポール、セイロンより、全半島を總括し、日本、支那、西藏、中央亞細亞、西比利に達し、更らに亦遠く瑞典のラプランド地方に播及せり。されば世界三分の人種の道義觀念は、即ち佛教に依て支配せられつゝあるなり。さりながら此等諸邦の多くは、概ね未開國、殘衰國、否らずんば亡國の遺民に過ぎず

中に在て幸に希望を屬し得るもの、獨り日本あり、小なりと雖もなほ世界に立つて、獨立の面目を有せり。嗚呼我國民、何ぞ奮つて彼等同胞を警醒せざる、而して世界の理想界に鼎立して、宇內衆生を濟度せんとはせざる。如此くにして殖民盛に、商業亦振起し、人富み、國饒に、所謂平和なる生活、圓滿なる開發を遂げ得可きか、東洋母國民の責務は、即ち此處に存するなり。

然るに恨むらくは日本國民は否らざるなり、人の氣如何にも狹く抱負も亦極めて小なり。思想概ね物質化して、而も唯眼前の小利を爭ふに過ぎず。約言せば進步的活動的ならずして、却て退步的、亡國的の歷史を繰返さんとするなり。借問す天下の士、如此くにして尙ほ日本の前途に患なきか、宗教の將來に慮なきか。青年教徒の責務、亦實に重いかな。

## 教界の明星墜つ

佛教界の柱石として久しく其重望を擔ひし本派本願寺法主は去月十八日を以て薨ぜり。明治佛教界中、獨り全派が卓然多數の愚論を排して世界の大勢に順應したるもの、只師が高邁の識見に依れり。その薨去を聞て嘆惜の念に堪へざるもの豈啻に教界の人のみならんや佛教界と云はず基督教界と云はず日本宗教界の全部を通じて其指導者に缺くる今日、高德達識師の如きを喪へるは實に國民一般の不幸なりと云ふべし。

因みに記す全派の有志者は永く師の高德を紀念せんが爲め、此際首府の中心に紀念會館か慈善病院か女學校かいづれかを建築せんとの計畫有りと、麗はしき希望なる哉、吾人は千百の銅像が建設さるゝよりも偏へにかゝる擧を難有感ずるなり。

## 入藏者の消息

萬死を冒して西藏より印度の北境孕士林まで歸着せし冒險家河口慧海氏に就て、カルカッタ在留中の社友より十二月付を以て左の書信を得たり

拜啓　横井時雄井上圓了諸氏の來遊に次で大谷光瑞伯の中央亞細亞探險を終へ一行十餘人の手を分ちて全印度の大探撿に從事せられゝあり印度の昨今は本邦人の影いと多く相成り申候

曾て御紹介相成り候河口慧海氏は天幸を以ていよいよラサより無事歸着印度全土の大評判と相成り居り候、同氏の風貌は一見西藏喇嘛僧と異ること

無く日本人にても初對面の者は同胞人とは知らず思はず英語又は土語にて話すことに候、氏がラサにて純粹ラマ僧に非ずとて將に死刑に處せられんとするを逃れ晝夜兼行ヒマラヤの積雪を踏んで五重の關門を無事に通過し候はサーベージランダーなどより苦辛冒險の度遙に勝り流石冒險に慣れたる英國人も皆舌を捲て嘆賞し日本喇嘛の西藏冒險を聞かんとて訪ふもの引きも切らざる有樣に候氏がラサ府遁走後氏を寓居せしめし西藏の大藏大臣等を初め大嫌疑を受け獄に投せらるゝもの多く且同氏の學び居りし大學は閉鎖するなど非常の騷動を起せしを以て氏も之に對し默止すること出來ず先きに在留せしニポールに赴き同國が西藏と親交有るを幸ひ同國王より西藏へ交渉を依賴して入牢者赦免の運動をなすことゝ相成り候實に氏が今回の冒險は日本人が世界に對して初めて誇るに足る大冒險と存じ候、猶氏は本年夏頃には歸朝の事と信じ候

（下略）

眞にこれ日本人として世界に誇示するに足る冒險的名譽なり、國民は須らく氏の歡迎を準備して可なり

## ▲二月だより

▲本派本願寺前宗主葬儀は本月七日執行、鐵道作業局は新橋より特に往復切符を賣り出し、又特別臨時滊車を出だし候、京都はサゾ信徒の群集を見ることとならんと存じ候

▲原胤昭氏の出獄人保護事業に就て同氏より例に依り一月十一日英照皇太后第六週年御祭日を紀念し奉り、謹て本事業の成蹟を公にし併せて贊助諸君に敬告すとて報ぜられしもの左の如くにて候

東京出獄人保護事業第六年報

○收容出獄人　總員五十二人

罪名　强竊盜四八二殺傷二九放火三二貨幣僞造三賭博六

刑期　無期終身一八八有期徒刑懲役禁錮三六四

犯數　初犯一七五再犯一四九三犯一一一四犯三八其以上七九

○成蹟　十二月末日調査

| | |
|---|---|
| 一保護所寄宿就業者 | 四十一人 |
| 二市中居住獨立自活者 | 百四十六人 |
| 三地方に轉住獨立自活者 | 百八十九人 |
| 四死亡したる者 | 四十人 |
| 五轉住後所在不明の者 | 六十四人 |
| 六保護所より逃亡者 | 二十九人 |
| 七再び犯罪したる者 | 四十三人 |

第五項以下を不良成蹟と見れば全數十分の七は良、十分の三は不良なり

○妻子　獨立自活者三百三十五人の内

| | |
|---|---|
| 妻帶せし者 | 二百十二人 |
| 其擧けたる子女 | 百五人 |

○施療神保院（北神保町）は本事業創立以來保護者の患者數百人を施療し屢々來診せられ傳染病豫防のためには年中懇篤なる施療豫防劑を投與せられたり故に六ヶ年間幸に病難を免れたり爰に謹て神保院の芳情を鳴謝す

○調査方法　在京自營者は常に往來交際をなし地方轉住者は通信により中に疑はしきは所轄警察署へ照會して其素行を確めたるものなり年賀欠禮右により小生夫妻は年初には在宿して被保護者の來賀の禮を欠けり今日此報告を呈して年賀の禮に代ゆ伏て宥恕を希ふ

○婦人出獄人保護所建設は官有地の貸與を得建設費三千〇九十圓は早稻田慈善園遊會の寄附によりて收入したれば進んでは此建築を擧て本事業に保護したる出獄人にて在京自營せる各職工の手に委ねて建設する用意をなせり

原　胤　昭

▲本派本願寺大谷光瑞師全派管長の任を覊かれ申候

▲内務大臣は内務省訓令第一號第二號を以て臨時總撰擧に神官僧侶の關係することを禁じ申候但し基督教傳道師はいかほど關係してもかまはぬことゝ存ぜられ候

▲東京高等商業學校教授ホソード、スワン氏より去月一書を本社に寄せ加藤弘之博士の宗教に對する考へ中宗教は無教育の民衆に向て說けるもとの意見を駁せられ候いづれ其中讀者に紹介可仕候

▲「基督教世界」と題する雜誌誕生致し候、「佛教文藝」と題するものも雜誌佛教に代つて生れ申候

▲右の外新年の宗教雜誌界は相も變らず落寞を極め申候、只「新佛教」は益す光彩を發し主義の爲に健闘致し居り候

以　上



雜評

# 好惡雜談

孟湖生

余をして理想團晩餐會の事を少しく語らしめよ。此會は每月第二月曜日に理想團の有志者が築地の精養軒に於て催すもので、來會者のうちには代議士あり、醫師あり、實業家あり、學者あり、宗教家あり、辯護士あり、新聞記者あり、學生あり、貴族と幇間紳士とを除くの他、社會の殆ど各々の階級職業の代表者が出席して、酒類は一滴も用ゐず、醜業婦は無論近つけず、淸き談話と邪氣なき笑のうちに淡泊なる晩餐を共にし、食後には豫め定められたる何人かゞ其專問の學問若くは業務について有益なる談話をするのが例であつて、現今の我社會に恐らく此會のやうに淸く樂しい且つ有

益なる集會は多くあるまい。

▲食後の談話の他に、食事中に來會者が各々姓名を名乘ると共に、種々の題目について五分間ばかりの小演説をするのが例である。前月及び前々月の題目は『我が最も好むものと最も嫌ふもの』といふのであつたが、これに對して種々の面白き、或は滑稽なる、或は眞面目なる小演説が試みられた。

▲こゝに其二三を書いて見やうか、内村鑑三氏の國家禁酒論が其日の談話に大に上つたからであらう、代議士細野次郎氏は内村氏に當てこするつもりでもあつたか、『さやう、僕の一番好きなものは酒で、一番嫌ひなものは耶蘇坊主の説教である』と喝破せられたが、苦笑をした人は内村氏ばかりでなかつた。

▲辯護士鹽谷恒太郎氏はいはるゝやう『誰であつたが一番好きなものは女て、嫌ひなものは借金であるといつたことがあるが、これは實に天眞爛熳の言てあつて恐らくは万人を通じての人情てあらう、然らば此二つは論外として、僕の一番好きなものは野外を散歩することで、嫌ひなものは空々しい諂諛である』と。

▲内村鑑三氏は鹽谷氏の説を賛して、『我國では自分の妻が好きだといへば、何んだか鼻の下の長いやうに聞えるが、西洋では何人も公言して憚らない、自分の妻が好きであるといふことは家内の平和と其人の品性の高いことを意味する、自分の妻を好く人は醜業婦に戯れたり、家を外にして馬鹿を盡すことはあるまい、願はくは我國にも妻が一番好きであると公言する人の多くならんことを』これに次きて余の好きなものは鹽谷君の如く野外の散歩で、余が想を練り思を凝らすは只獨り角筈の郊外を逍遙する時である。それから余は書物が好きてある。かくいへば余は如何にも學者を氣取るやうてあるが、書物を好むといふことは酒を好むと同じく一の道樂てあつて、決して賞むべきことでない充分に讀みもしない書物を買つて、其爲めに家族に迷惑をかけるといふ事は宜しくないのである。それから余の嫌ひなものは政治家で、中にも伊藤侯と大隈伯とが一番嫌ひてある』といはれたが、かゝる小演説のうちにも内村氏の特性が顯はれて居て面白い。

▲ユニテリアン協會長佐治實然氏は『自分の一番好きなことは總てのものを整頓することとて、嫌ひなことは亂雜てある』といはれたが、氏の性行を知つて居る者は如何にもと頷いた。氏は珍らしい整々な人て、交際、家政、金錢の出入等の規則正しいことは驚くべきもの

がある。余は先日氏の家を訪ふたが、其清潔にして片付いて居ることは、或人が『佐治さんの家は家中が佛壇のやうだ』と譬へた程で、隠れる場所が無いから、鼠は一頭も居ないといふことである。

▲代議士花井卓藏氏は『僕は辯論が一番好きで、洋服が一番嫌いだ』といはれたが、好きこそもの丶上手なれて、氏の辯舌の巧なることは世人のよく知つて居るまでである。然し世人は氏が洋服を嫌ふことは知るまいが、氏は一年中に洋服を着ることは只の一度で、それは議會開院式の時に燕尾服を着るのであるそうだ。

▲黒岩周六氏は曰く『自分は勝負事が一番好きで、玉突、角力、殊に五目ならべは大好きである。一番嫌いなものは手紙を書くことで、とりわけて返信用の郵券の封入してある手紙にはウンザリせざるを得ない』と。氏の如き繁忙なる人が返事を求むる手紙を嫌はる丶は如何にも尤なる次第で、氏の許には毎日幾通となく見ず知らずの人から種々の手紙が來る、これに一々返事を出して居ては際限もない事で、氏が一日これにかゝり切りにして居られても追付くまい。我國の人はかやうの事には至極遠慮がないが、これは大に愼むべきことであると余は思ふ。

▲黒岩氏が勝負事を好むといはれたのは頗る面白い、何となれば此一語は氏の性格を短かく言ひ現はしたもので、氏のこれ迄の經歷は絶え間なき勝負の爭ひである、今後も恐らくそうであらう。氏は負けじ魂の塊りともいふべき人で、何人にも助力を依頼することなく、常に强者に向つて戰を挑み、勝たざれば飽まで已まぬ人であることは、氏の經營せらるゝ『萬朝報』を讀む人の察する所であらう。

## 故高山君

小觀記者

△高山樗牛の一去、文界の爲め、洵に惜しむべし。彼が始めて「瀧口入道」を物して世の先輩などゝ云ふもののド膽を抜きし時代より日蓮論を描き出し御題目家の合掌三拜を博したるに至る十又餘年の間、立論家として批評家としてたしかに一光彩を放發したり。

△雜誌太陽をして文界に重きを爲さしむるに至りたるも彼か力なり。一時八ヶ間敷かりし「日本主義」も彼去てより單に木鷹一流の嘲罵となり終りたり、爾かのみならず赤門文士といふ者をして今日如く文壇に旗幟を飜さしむるに至れる恐く彼の鼓動に負はざる可らず。

△素より赤門の文士、笹川臨風あり、姉崎潮風あり、大町桂月あり、久保天隨あり、登張竹風あり、その他尙濟々多士たるべし、而れども如何にも男らしく堂々として文壇を濶歩し巨刄を揮て觸るゝもの皆斬るの槪ありしもの實に彼のみなりしと云はざる可らず。

△彼は左程深遠の學殖ありしものと思はれず、而も齡尙而立に達せずして姉崎潮風等と共に文學博士の學位を得たり、情實を以て滿々たる博士會なるものゝ推薦素より重きを爲すに足らざれども彼か赤門の一偉材として、勢力の鼓吹者として如何に諸教授輩に認識され珍重されしかを見る可きなり。

△彼は一二所謂博文館ものと稱する著述を爲したるの外、學者として特に彼が紀念を留存したるものに乏し唯記者として八面鋒鋩を脫し文學政治社會宗敎向ふ處に光を發し大文小文、悉く皆樗牛一流の氣勢を備へざるものなかりし。

△人は時として彼を衒學の徒として憎みたるが如し、彼はたしかに衒學の癖を有したり、ハイチはドウだ、ニッチエはコウだと如何にも齒の浮くやふなそ棚おろしを爲して得々たりし。而れども赤門一派が彼等の外に人もなげに生學問を振り廻はすのは卒ね皆爾らざるなし、特に彼をのみ責むるは酷なり、但、彼が容貌風采の如何にも美々しき丈けそれ丈け一種の氣取りものなんとなくキザなる男と見られたること多かる可く、又彼の文章の如何にも大家らしく構へ込める風ある、人をして不快を感せしめたるものありたるべし。

△爾れども彼か文學社會の偉器なりしことは毫も損益する所あらざるのみならず、彼れ年齒僅かに三十又三、彼にして若し病の爲に海外留學を沮止せらるゝことなく、假令病めるも今暫らく餘年を保ち得たりとせんか其造詣や蓋し測る可らざるものありしならん、吾國文學界の爲め惜しみても尙餘りありといふべし。

讀者の文壇

# 天下の新平民諸君に檄す

在廣島　前田三遊

▽卿等は其新なるを恥づる勿れ△

▽卿等は其眞ならざるを恥ぢよ△

舊平民の一人たる前田三遊、茲に檄して天下の新平民諸君に警告す、云く、卿等は其新なるを恥づると勿れ卿等は其眞ならざるを恥ぢよと。余輩の卿等に望む所

唯此の外に出ざるなり。而して此二拾字は、實に余輩が卿等の爲に、血を以て書し涙を以て記す所の箴語にして滿腔の同情を卿等に寄與する標幟なり。

余輩は本より卿等の同族にあらず、余輩は卿等の新なるに對して、舊の一字を冠せらる可き一平民なり。

余輩の祖先には、嘗て戰國の武士たりし者あり 然れども、余輩は其餘惠に依りて、社會の寵遇を受くる者にあらず、否、之を受くるとを欲する者にあらず、余輩豈に好んで襟裾馬牛、衣冠狗猴の徒たる者ならんや而して生平、一平民を以て自から甘んじ自から安んじて、寧ろ其最も自由なる境遇に在るを榮とする者なり余輩何ぞ昂然として卿等に臨み、其平民たるに於て、舊きに誇る者ならん。

既に然り、而して余輩は、別に卿等に對して、一の誇る可き理由を有せざるなり。是れ獨り余輩のみならず、何人と雖も、恐らくは一の誇る可き理由を有せざる可し、士族然り、華族然り。卿等何ぞ自から侮り自から蔑むとを須ゐん。

然るにも拘はらず、卿等は曾て久しく、他の爲に誤まられたり、卿等は甚だしき侮蔑を以て扱はれたり。その然るを致せし所以の者は、實に階級制度の嚴なりしに由ると雖も、又た卿等が自から侮り自から蔑みたるに由らずんばあらず。此他、一の正當なる理由あるにあらず。

人或ひは卿等の祖先を以て馬來人種となし、歸化人となし、俘虜となす者あれども、未だ一定する所あらず而して卿等の祖先は、何者なりしにもせよ、是の若きは、一も卿等を侮蔑す可き、正當なる理由となり得る者にあらず、否、たとひ他に余輩の知らざる、正當なる理由ありとするも、人道及徳義は、すべての場合に於て、卿等を侮蔑するとを容さゞるなり。卿等が自から侮り自から蔑むは、理に於て然る可からず。卿等それ宜しく自から任ずる所重く、自から負ふ所大なるべし。

想ふに、人の眞價は、其赤裸々なるに於て存す、余輩はたゞ赤裸々にして、眞價ある人を敬愛す。位階何かあらん、族制何かあらん。要するに皆是れ、詩人 Burns が所謂、The Guinea's stamp のみ。蓋し眞價は、Honest man たるに在り。人已に此眞價を有す、行ふところとして道に合せざるはなく、以て天地と始終するに足るかの赤裸々の人、そこに貴賤なく、そこに貧富なし、たゞ眞價あるの玉は、縕まれて胸底にあるのみ。而し

て人の、人として尊重せらる可き所以の者は、正に此眞價あるの玉を、其胸底に蘊めるあればなり。眞價あるの玉とは何ぞ、Honestyなるもの即ち是なり。故に余輩は、兒訓として次の腰折をものし、之を我が兒女教育の主義となしつゝあり。其歌に云く、

人となれ人の中なる人となれ
　男の中の男ともなれ
人となれ人の中なる人となれ
　女の中の女ともなれ

見渡せば、四千五百有餘萬の同胞中、眞個の人の中の人たり、男の中の男たり、女の中の女たる者、其數多からず。道義の腐敗は、比年人心を腐蝕して、虚榮の市に僞情を飾りつゝ、跋扈跳梁せる輕薄子の、徒らに時を得顔なるを見るのみ。是時に當りて、人の當に務むべきは、人の中の人たるにあり、男たるもの、當に務むべきは、男の中の男たるにあり、女たるもの、當に務むべきは、女の中の女たるにあり。而して其然るを致すは、たゞHonestyなるに在り。語に云く、一誠立つて萬善これに從ふと、佳いかな言や。已にHonestyならば、往くとして可ならざるはなけん。

新平民諸君よ、余輩の卿等に望む所は、また此に外ならず。しかも卿等の同族にして、徒らに其新なるを恥ぢ、士族の株を購ひ來りて、其准養子となり濟しつゝ士族としての僞なる者、平民としての眞ならざる者となり、以て自から侮り自から蔑む者あり。余輩は其心事を卑陋なりとし、窃に彼等の醜狀を嗤ふ者なり。

それ新は、活動の意味あり、進步の意味あり、廓清の意味あり。平民として新なる者は、宜しく正に活動、進步、廓清の原動力たるべし。また何を苦んでか、其新なるを恥づることを要せん。たゞ恥づ可きは、其眞ならざるにあり。人として、男として、又女として。故に余輩は、新平民諸君に向つて警告す、云く、卿等其新なるを恥づることなかれ、其眞ならざるを耻ぢよ、と。卿等それ、幸に三思せよ。

余輩の恩師中江兆民先生は、嘗て最も多く同情を新平民諸君に寄與したり。余輩の東雲新聞記者として、大坂に在るや、兆民先生の餘惠に依りて、屢々新平民中の有志者と、臂を把つて談笑せしことあり。此間、眞情流露して、交誼掬す可く、敬愛するに値せし人少からざるを見たり。之を他の交際社會に求むるに、殆んど其匹を見ず。蓋し今の所謂交際は、誠意を以てせずして、たゞ徒らに形式に依り、僞情を交換せるに過ぎざ

るなり。厭ふ可きは、かの權勢に阿附するもの、諂諛的動作にして、歡迎といひ、惜別といひ、祝賀といひ、弔祭といふも、概ね是れ名に於て爾か言ふのみ、更に誠意を以てする者は、之あらざるに非ずや。是時に當りて、大いに交はる可きは、唯それ新平民諸君あるのみ。

然れども、卿等にして若し、其新なるを恥づるあらんか。是れ自から活動、進歩、廓淸の原動力たるを厭ひ、尙舊夢を繰返しつゝ、強て其自然の運命を損はんとする者なれば、寧ろ與に語るに足らず。卿等はたゞ人として、男として、又女として、其眞ならざるを恥づ可きのみ。卿等にして、之を恥づるあらば、卿等は必らずや大いに發憤せん。而して卿等は當に、自から任ずる所重く、自から負ふ所大なるを得べし。果して然らば、又自から侮り自から蔑むとなきや論なきなり。備作二州の新平民諸君は、幸ひに自覺する所ありて、夙に備作同胞廓淸會なるものを組織したり。正に是れ新平民として、よく其本務を知る者たるに庶し。想ふに今後、所在斯種の團躰を組織する者あるべく、而して第一着に、先づ夫自身の廓淸を謀り、驀て全社會に及ぼして、廓淸、進歩、活動の原動力たるに至るの期あらんこ顧みれば、明治第一の革新は、主として士族の手に成り、舊平民の爲に、新紀元を劃したり。第二の革新は、舊平民之が主力たるべくして、未だ然る能はず、余輩は心窃に新平民諸君に恥づ。卿等、希はくばそれ自尊自重して、革新の急先鋒たらんとを、敢て望む、敢て望む。

廣島藝備日日新聞の樓上に於て禿筆を走らせ此文を草す

# 短文
## (我國の警官に就て)

▲我邦すべての階級中、其職に忠實にして腐敗の聲も無く、職の聲も無く、僅かなる俸給に怨望無く、時に非常の危難を冒かして顧みざるもの警官を措いていづくに在る、懶惰の日本、腐敗の日本に、大和魂の精粹を集めたるは只此一階級有り、吾曹は海軍擴張などの費を割ひても陸軍々人の俸給を削つても此貧むべき一階級に向ひ、今より一二倍の俸給にせんことを望むなり。(波濤)

▲これは時効とやらを失つた十年も前の話と思つて免れ給へ、僕の近所のある遊人の家へ折々制服巡査が出入するので、(戸籍調査ては無論ない)的確諜刑令か捕縛に就てゞあろうと、思つて居た處、一夜其家の前を通行した時に、酒を食らつたらしい、勢ひの宜い高調子の、談話が聞へた。悪るいとだが、戸の隙間から覗くと豈計らんや、オット怪しからんや、例の巡査殿が、正面に傲然と座し、主人の厄座者が、ペコ〳〵頭

を下げて、開のチヤブ臺は、杯盤狼籍といふ、小酒盛の有樣。其當時は些とも此謂はれを、知らなかつたが、往來でその遊人と出遇つた折、なにげなしに尋ねると、「エヘ、、、、、彼奴ですか、探偵でも無い癖に、錢を强請りやがるんです……………（花之丞）

▲東京の巡査は往々人に向て旦那と云ふ、地方の巡査は屹度人に向て其方と云ふ東京の巡査は親切で地方の巡査は生意氣なり（エ、S）

▲昔しの人は申さく、すまじき者は宮奉へと、今の人は云はん、すまじきものは人民保護の警官と

○優しくすれば犬同樣に卑しめられ

○威嚴を保たうとすれば毒虫の如く嫌はれ

○スワ虎列剌よスワ赤痢よスワペストよと、眞先に犧牲に供せらるゝ

○火事よ人殺よ泥棒よ命を無きものにしてかゝらねばならず

○寒し暑き夜眠りを耐へて宿直する苦しさ！雪降る曉き空腹を辛抱して張り番をする悲しさ！

○薄給妻子を養ふ能はず冷遇人に意張る能はず

ホンに思へば幼時の榮華につまされて、簡劒以て落る涙を横撫ぐりすること日に幾何ぞ、流るゝ水と人の身の行末は、昨日の淵は今日の瀬と、七轉八起、變るが浮世の習ひと聞きつるに、吾々に好運の風はいつ吹き來ることぞ、他人の運命はいつも交番して、吾々の運命は此交番所へ交番し來らざるぞ悲しき

（昔の貴公子今の鬼行子投）

▲田舍者と見て取ると、直ぐに聲あらゝげ「オーイ、コリヤ、其方は何んと云ふ不都合な奴じやろうか、左側を歩るかなくてはいかんじやないか、其方心得て居りながら、ズルイ奴ぢや、」なぞとチドシ附けて、可愛相に何も知らない質朴の民を狼狽させる。爾し鬚でも生やして金縁の眼鏡でも懸けて居る紳士でゝもあれば、右側を通行して居るのを見ても、直ぐ眼をそらして見ぬふりをする。是れが我が口の警官の狀態で、多くの事皆此の筆法でやるから癪にさはるて。（芝　北嶺）

▲イヤとカブリを縱に振りて立ところに幾千圓をせしめ、何喰はぬ高楊枝に屬官どもをイヂメちらす權利も無く、さては淺酌低唱、落花流水の情濃かに冬の夜の長きを忘れて、ドコヤラノ姉樣達と戯るゝ餘裕も無く秋の田の案山子の役目、ソンジヨそこらの小雀どもを驚かすがせめてもの得意顏、やれペストで候と云へば眞先に追走らされ、やれ盜賊が逃げたと云へば夜の目もろくに合はされぬときては、或意味に於て腕が無く意氣地がないからとは言ふものゝ、人間一匹何それ價値なきの甚しきや、我れ我國警官の爲めに萬斛同情の涙を灑かさるを得ず。やれ官吏ぢや、公職ぢや、國の爲め蒼生の爲めぢや、聖職の爲めに一身を捧ぐるは高下格縁りなどゝサ、あきらめられぬ明治聖代の今日、教育、政治、宗教、文學何も彼もヒツタクリ主義の東洋大帝國にあゝ思へば情けなき事に非ずや、（飯田生）

▲世界どの國でも、警官は體格の丈夫で身長有るものを採用するそうだ日本では往々五尺以下のを見受ける、曰く身長五尺五寸以上、曰く容貌これらは是非警官採用の一要件として貰ひたい（谷田）

▲亂暴な者だよ、左手劍を按して右手八字髯を捻れりながら、貴樣等がとやりだした所、我も彼等の一叱に逃出したることありての惡口ならねど、晏子が御者の家來のそのまた家來の末流としか見えず、まあいゝだろうよ、隨分希望者が多いからね。（眞砂夫子）

▲僕は燒芋をポツケツトから出してヌスミ喰ひして居る巡査を見たよ（喱々生）

▲同じく巡査の人民に向ての注意なり

その車夫に對する時

その紳士に對する時
その學生に對する時
その田舎者に對する時
その美人に對する時
その使ひ分けが中々面白ひや特にその車夫に對したときそれと同時に海老茶式部にても注意せねばならぬ事があると中々奇觀だよ、丸で聲の出所まで違ふ　（傍看生）

▲警官といふ者、餘り芳はしき職にはあらず、また好み進みて奉職しつゝある粹檬も近頃少なうなりけるらし、まあこれもまたどこやらな乾さぬため、さらば何れも職業なり、不足無く盡し給ふこそいみじかるべけれ　（さ、ば）

▲警官と總選擧、警官と博徒、警官と淫賣屋、乞ふ去て埼玉山梨地方警察の不取締を見よ（八王子の讀者）

課題｛我國の文學者に就て（二月十八日）
　　｛我國の教育家に就て（三月十五日）



## 新刊紹介

### ▲獨立自營大國民　慶應義塾譯

金港堂發刊

本書は佛人デ、モラン氏のアングロサクソンシユペリオリテーと題せるものを慶應義塾教員井上古部二氏の翻譯したるものにして原書は幾度か板を重ね、廣く歐米諸國人に讀まれ、目下彼地の輿論を動かしつゝあるものなりといふ。

全部三編に分れ第一編に於ては學校に於ける佛人と英人、第二編に於ては佛人と英人の私生涯、第三編に於ては佛人と英人との公生涯等を尤も詳細に對論し、佛人の英人と角逐して常に敗者の地に立てるは根本的に教育の目的を誤ることを指摘し、擧國一致大に獨立自營の浩氣を涵養せざる可らざる所以を痛論せり。

本書を讀み行く中に最も吾人の心を動かすものは佛國々民の病毒は今や正しく吾國の痼疾となり、殆んど拔く可らざらんとするものと成り來れること是なり、著者が指摘し來れる例證は一として吾國に於て見られざるものなく恰も吾國一部の時弊救濟策を讀むの心地す。吾國の學者と云はず政治家と云はず其他如何なる人々にても是非共一讀せざる可らざる良書なり。彼「一年又半」子規隨筆の如きものが幾十板を重ねたりといふを聞くにつけても本書の如きは百板にも達せ度きものなり。聞く所によれば本書の翻譯權は元と小林某氏の手に在りしを慶應義塾より强て讓り受け、一年已上の日子を費やして翻譯し删潤尤も勉めたりといふ。さればにや譯述正確平易明快にして世の翻譯的臭味を脱し、一讀直に主意を了すべし。吾人は深く譯者の勞を謝するものなり。（定價金八十五錢）

### ▲子規追悼集　ホトトギス社編

同社發行

ホトトギスの臨時增刊にて、子規子が百ヶ日に出てたる同人の追悼錄たること題號の如し、鳴雪の追懷雜記は子規が生立を知るべく、虛子の子規子の書簡は子規が精神と面目との活躍せるを知るべく、飄亭四方太紅綠鼠骨の文何れも人を感ぜしむが中に碧梧桐が裏側殊に佳し、尙は子規

が少時よりの寫眞を悉く集めたるは實に其人の面影を偲ふの好料たるべし、子規年表の後半疎なるは故人自らのなせるが故とは云へ寧ろ詳細に增補ありしこそよけれ、何れも此文界の偉人を追悼するの料たらざるはなし讀み去りて何となく我も追悼の念に堪へざるものあり。（定價三十九錢）

## ▲基督之事實

英國シムプソン著　千盤武雄譯

發行所　東京神田猿樂町　中庸堂

本書は題目の示すが如く基督の事實の意義を最も明確に説述せるものにして、基督に對する議論紛々として定まらざるの時、本書の如きは必ずや求道者に取りて好個の指南車たるを得べし　（定價三拾錢）

## 雜報

**●韓國の戶口**　韓國政府に於て各道郡守監吏の調査に基き統計したる光武六年度に於ける戶口總數は戶數百四十萬五千百九十六人口五百七十八萬二千八百六にして之れを前年度に比すれば戶數に於て四千百八十六戶を減じ人口に於て六萬九千五百六十二人を增加す今之れを各府道に列記すれば左の如しと云ふ

| | 戶數 | 人口 |
|---|---|---|
| 漢城府 | 四二、九三六 | 一九七、二一四 |
| 京畿道 | 一六六、七六八 | 六五三、六五六 |
| 忠清北道 | 七五、九〇〇 | 二九〇、五一八 |
| 忠清南道 | 一二三、一一三 | 四五〇、六八〇 |
| 全羅北道 | 一〇七、二一八 | 四一八、八二〇 |
| 全羅南道 | 一一八、一七三 | 四五六、〇五四 |
| 慶尚北道 | 一六〇、九五九 | 六〇六、五三六 |
| 慶尚南道 | 一三〇、九三二 | 四九九、一八七 |
| 江原道 | 八〇、六五七 | 二八五、六九五 |
| 黃海道 | 九四、三九五 | 三七三、〇八三 |
| 平安南道 | 一〇二、九九八 | 四〇三、二九二 |
| 平安北道 | 九六、九五九 | 四〇九、九九九 |
| 咸鏡北道 | 五九、八二四 | 四五〇、〇三五 |
| 咸鏡南道 | 四四、三六四 | 二八八、〇三八 |

**●小學校用教科書の概數**　文部省に於て調査したるところに依れば、每一年間に小學校生徒の要する教科圖書は、概要左の如しといふ

尋常科用

| | | | |
|---|---|---|---|
| 讀本 | 八百万册 | 修身 | 四百万册 |
| 習字 | 八百万册 | | |

高等科用

| | | | |
|---|---|---|---|
| 讀本 | 百八十万册 | 修身 | 九十万册 |
| 習字 | 百八十万册 | 地理 | 九十万册 |
| 歷史 | 九十万册 | 理科 | 九十万册 |
| 圖畫 | 百八十万册 | 算術 | 九十万册 |

即ち尋常科用計二千万册、高等科用計九百九十万册、總計二千九百九十万册なり、又右代價は現在の標準讀本尋常科十二錢、高等科二十一錢五厘、修身尋常科十五錢、高等科二十五錢等なり。

**●郵便貯金**　郵便貯金は昨三十五年中最多額に達せしは十一月十二日にして實に二千九百六十万圓に達し其後年末に近づくに從つて漸次引出せしも結局歲末需用として引出されたる金額は五十万圓に過ぎざりしといふ。

明治三拾六年

# 公論日誌

其二

# 公論日誌

# 公論日誌　自一月一日 至一月十七日

明治卅六年一月一日　○●△▲まづは天下太平と申し置き候はんか、唯それ萬歳の聲の各々異なる處を御聞き下さるべく候

○疑獄越年　德風落地　蠻歳々々蠻々歳
●學界不振　文界落寞　晚歳々々晚々歳
△內閣地震　議會噴火　萬豺々々萬々豺
▲黑病侵入　鼠賊退治　萬災々々萬々災

●此日發表されたる　懸賞募集歌三種、讀賣の大日本彭張歌　萬朝報の處世歌、大坂朝日の大坂市歌、其懸賞金を檢し候へば、大坂市歌は五百圓にて尤も高く、處世は三百圓にて一字一圓と申し、大日本の膨脹は五十圓に價ひしたるのみの由に候、　○目出度教育界新年の劈頭第一におけろ出來事は、教科書事件に關係したる、德島高等女學校長佐久間教元君元旦に拘引されたる事に候▲更らに海を越えて遠くあなたよりはサキソニー王妃と皇太子との不和より起りし訴訟の珍事を傳へ候、▲尙又今朝八名のペスト注意患者を出したりし由、あゝいかに目出度新年に候よ、▲砲兵の大佐殿屠蘇機嫌にて馬の曲乘り誤りて轉落したる珍事有之候

屠蘇に醉ふて大佐地上に曲乘す、

二日　○着々步を進めつゝある教科書事件の疑獄は今日も幾人か拘引され招喚され候　△本日の倫電は印度デルハイの舊都にて印度皇帝の即位式ありし事を傳へ候、

三日　△本日は元始祭の式典宮中にて執行さるべく候　▲今日は初卯にて候へば龜戶天神は非常の人出なるべくと存じ候、尙又本日の集會は●東京彫工會上野梅川樓にて　△政談演說會後一時橫濱にて有之候　△今曉四谷にぼや一つ郡部にも有之候又後五時には大傳馬町にも有之候　▲ペストと教科書の疑獄は不相變進行致し居り候、▲給金割增無くば働けずと江戶橋郵便電信局の配達夫は同盟罷工致し候

▲尙品川派出署に狂人が綱引車にて急訴の珍聞有之候、　△尙本日伊藤博文侯は大磯より葉山に皇太子殿下に拜謁致し候

四日　△本日は　天皇陛下午前十時內閣へ出御例の如く政事始めの式行はせられ、又臨時閣議も有之候、▲集會は日本力行會苦學生新年饗應會正午靑年舘にて催す由に候、尙は佛耶兩教日曜の集會は新年會かれてあるものもあれば、又殊更らにやめたるも可有之と存じ候、▲本日は消防出初式にて候、●歌舞伎座本日より開演致し候そは芝居にはあらで同國皇帝の天覽を賜はりしと傳ふ大淸國韓風山一座の曲藝にて御座候、○本日の電報は岡崎師範學校長と宮崎縣視學官の拘引を傳へ候、

彼れも先生賄賂をとりし報い哉

▲尙ほ又本日は海軍將校の新年宴會も水交社に有之候、▲ペスト眞症患者一名死去致し候、▲玆に三日間の洲崎と吉原の出來高を一見可致候洲崎）一日千九百八十九人藝者八百廿五本二日三千五十一人藝者六百六十本三日三千百七十人藝者六百七十八本にて吉原は一日八百四十四人藝者九百九十九本二日は千〇三人にて藝者九百四十三本三日は千〇九十七本藝者千三本にて候、▲本日女子美術學校舍監橫井たま子女史死去致され候、女史は橫井小楠先生の義子時治氏の未亡人のよしに候、

五日　●東京輸出金屬雜貨商新年會梅川樓にて　○元東洋英和學校同窓會後三時芝公園三緣亭にて　△進步黨領袖會議及び同黨新年宴會十時より、これ本日の會合にて御座候、▲倫電は上海を經て獨人プエ

ルトカペルロの稅關を占領したりと傳へ、又ニカラグワに於て三個の、智利に於ては五個の、火山は盛に爆烈しつゝありとも傳へ候、△正月の三ケ日もすみ候程、各地共にそろ〳〵撰擧準備にて忙しき樣子にて候、△尙本日小村外相の新年會有之候、△尙又桂總理は葉山に赴き候、▲尙本日は初水天宮なりし由にて候、

六日　▲今日は宮中にて御講書始有之候、●文墨協會新年會日本橋常磐木倶樂部に開かれ候、▲衞生講話會牛込區役所に開かれ候、△本日の倫電はモロッコ叛亂の平定と英國現政府不人望の兆と蘇士運河會社副頭取死亡せしに付きサー、トマス、スザーランド氏後任者となりしとの三件を傳へ候、▲淸國留學生七名長崎に來着の由電報に候、▲扨て今日は寒の入りにて候が各地共概れ晴天無風の樣子に候、○教科書事件遂に天朝にも逮せりと傳へ候、本日又々拘引されたる者三名許り有之候、▲本日品川に六十八の老婆の石に觸れて腦震盪を起して即死したる者有之候

　冬枯て六十八の木も折れぬ、

▲本日日本橋茅場町にて榎本武揚氏待合女將の葬式と衝突して落車されたる由に候、

　葬式や美髯將軍落車す春正月、

七日　會合は　○基督降誕祭、前九時駿河臺正教會聖堂にて　●東京彩霞會總會正午常磐木倶樂部にての二つにて候、次には各地の電報を錄すべく候　▲熊本、岡山長崎は降雪の報あり大分寒きと存じ候、○京都よりは同地大學內訌再燃と傳候、△名古屋より後備陸軍少將春田景義死去と傳へ候、○金澤よりは石川縣師範學校長拘引と傳へ候、更らに和歌山師範學校教諭も拘引とのことに候、何れ例の事件關係と存じ候、△本日市參事會有之候ペスト豫防費たつた三万圓支出可致相成候、これ鼠捕器械や石炭酸石灰なんどに化ける物にて候、▲扨て相撲協會は本朝早々一月場所の番附を出し候、大砲は依然たる橫綱にて朝汐の張出梅ケ谷、常陸山の大關も變りなく候、其外源氏山張出前頭となり大刀山、甲新たに入幕致し候、大刀山彼れは去年五月の本場以來鬼神と歌はれ候が今度遂に八枚一足飛びに跳上り候、鳳凰宮城野と改めて依然として振はず候、

　宮城野に朽つるつもりか桐の鳥

▲今夕中央幼年學校にて過ちの爲め大ナイフにて朋輩を殺したるの珍事有之候、

八日　○帝國教育會圖書館本日より開館、○佛教傳道協會演說會後一時築地本願寺にて開かれ候、△扨て本日觀兵式にて御座候、▲電報によれば茨城縣に大火有之候、多賀郡豐浦町字川尻殆んど全部燒失せる由に候、▲淸浦法相皇太子御機嫌伺の爲今朝葉山に赴き候、○又々教科書事件に新拘引者そは宮城縣知事及び奈良縣參事會員、山口縣視學官にて候、▲大阪相撲協會にても來る十二日より興行の筈にて本朝番附發表したる由に候、橫綱大關やはり舊の如しとの事に候、

九日　本日の會合重なるものを列擧すれば　▲日本實業新聞東京支局設置披露會　△政友會東京支部評議員會　●地學協會講演　●靑年會館の學術講演等にて候、△倫敦電報は傳へて申さく韓帝の慶賀式に參列する露大使は韓皇太子に露國宮廷を訪問せらるべしとの招待狀持參すべしとの事にて候、△曾禰藏相午前片瀨より歸京致され候、▲回向院大相撲は本日太皷を回し正に明日よりとの事に候、▲本日試驗の結果又々眞正ペスト一人出したる由に候、こゝに初發より眞正の者合計十人もありたる由にて候、▲今夜大川にて追込められて水に泳ぎ入り遂に捕はれたる賊有之候、

冬の夜や賊水に入て捕はれぬ、

十日　本日會合次の如くに候、●啜茗雅會新年大會　●荒木寛畝門生試筆會、○帝國教育會演説會、▲大日本婦人衞生會新年會、△普通選擧演説會、▲グラブニック歡迎會小石川植物園にて、●經理研究會例會、▲社會問題講究會、等にて候、▲尙衞生局會議朝十時より內務省に開かれ候、△今朝官報にて子爵の欠員議員補欠選擧の勅詔出され候、▲扨て本日の事件に曰はく

花嫁の捕縛　　名はお淺鬼十八歳の盜み哉
砒素の中毒　　鼠とらで女房かゝりし退鼠散
薪の泥棒　　泥棒の薪棒となんぬ冬の夜

十一日　本日の會合に曰はく
●東京學士會講演　▲北清會新年宴會　●國歌音樂會　○家事裁縫講習會發會　○日本積德會新年會　○曹洞第一中學落成式　其他佛耶兩教日曜講演々說々教等常の如く候、

本日の電報に曰はく
▲盛岡の大雪(同地發)　△山、伊、西會合(大磯發)　○縣視學拘引(前橋發)　○第一中學校長拘引(島根)　長野大雪(同地發)　◎縣會議長家宅搜索(名古屋發)　○外電には記すべきもの無之候、△本日菊池文相茅ヶ崎別莊に赴き候、▲尙本日芝惟一館にて黑岩淚香靈魂不滅論を說き又同社募集の處世歌試吟をなせしとのことにて候、▲尙回向院は一日延びて　△本日初日にて候本日の呼物は常陸と太刀との取組みに候

手初めや常陸が勝ちし相撲哉、

▲今晩火事京橋、深川、本所、神田淺草に有之候内深川本所は放火の由に候、

十二日　會合の重なるは　▲理想團有志晩餐會、△進步黨東京支部常議員會　△菊池文相新年宴會　▲東京紡績會社總會、△丸山名政々見發表會等にて候、▲今日は總ての方面別段珍らしき事も無之候、新紙の如きは內閣の動搖と教科書の疑獄とペストの騷動と更らに相撲の景況を備なんど入れての報をなす外何等の餘白も無之候、これだけの事にて餘は天下泰平御安心被下度候、

何もなしたつたペストと疑獄のみ、

▲本所病院に於てペストの治療研究に從事したりし醫學士横田利三郎君は過日來診察中發熱し同病院に臥床の處、昨夕に至り彌々眞正ペストと決定致し候職に仆れたる氏の如き實に氣の毒の至りに候、

十三日　△政治屋は選擧準備に日もこれ足らず、○教育家諸君は平常の忠君愛國も何處へやらペスト帝都を襲ふて震襟を惱まし奉るにもかゝはらず尻の下の火の手におづ／＼致し候有樣、明治卅六年の劈頭を飾る飾物としてはあまりに穢はしく候まゝ最早書き申すまじく候とは存じ候へどもさうもならず候程に少しづゝ申すべく今日は不平のかたまりのみ申上げてなにも申すべからずと存じ候否次手に風流心にても呼び起し發句にてもなろふづるにて候

大湊船黑き夜明かな
船員の万歳呼ぶや船の上
これでも新年の句になり申すべくや
和服きて女禮者のトンビ哉
凡調には候へど實見に候
新年の句は年末に吐きつくし
明けてはなにも無之候

十四日　本日の會合は　○明治女學校講話會、▲北海道士入救育會、▲

北海道協會招待會等にて候、○教科書事件漸次火の手は盛んになるのみに候、▲大阪博覽會審査官今日任命に相成候、▲本日は露暦の元旦に相當致し候由、同公使館及び在本邦同國人は一同に祝意を表したる由に候、▲ペスト菌のある鼠彼方此方にて發見せる由傳へ候いと恐ろしき事にて候、▲本日午後麻布に博徒殺し有之候、

十五日　▲本所病院にてペストにかゝり治療中なりし、横田醫學士は今朝遂に長逝致され候、武士が戰場にて討死すると同樣ほゝえみて瞑目せし由、市は見舞金を送り、官は位階をすゝめ、勳章を贈り候へども、眞實ペスト撲滅の爲めに其全力を盡くにあらずんば、横田醫學士何ぞ瞑せんや、學士の望みは虛位にあらず金錢にあらず病毒の撲滅法にあり黴菌の研究にあり、あゝ學士の心を知るものは誰ぞ、東京市は此職に盡くすの好青年をすてゝ尙願みずんば吾又何をか云はんやと嘆息致すことにて候

　　咲きもせで白梅ちんぬ此朝、

▲今朝貴族院議員三崎龜之助氏の實弟少しく狂亂の氣味にて自殺をとげ候、▲尙今日後八時芝浦あたりにて轢死をとげたる男有之候年二十歲位いとのことにて候

　　二十年徒らに轢死して夢いかに

▲尙今日は二の卯のよしに候、△政友會は東京支部委員會及び總會を午前に開き候、△舊三四派の工藤菊地外三氏は今日進歩黨に復黨致し候、▲本日岩手縣視學官入水して死せる者有之候例の教科書事件に連累しそを恐れてのことの由に候

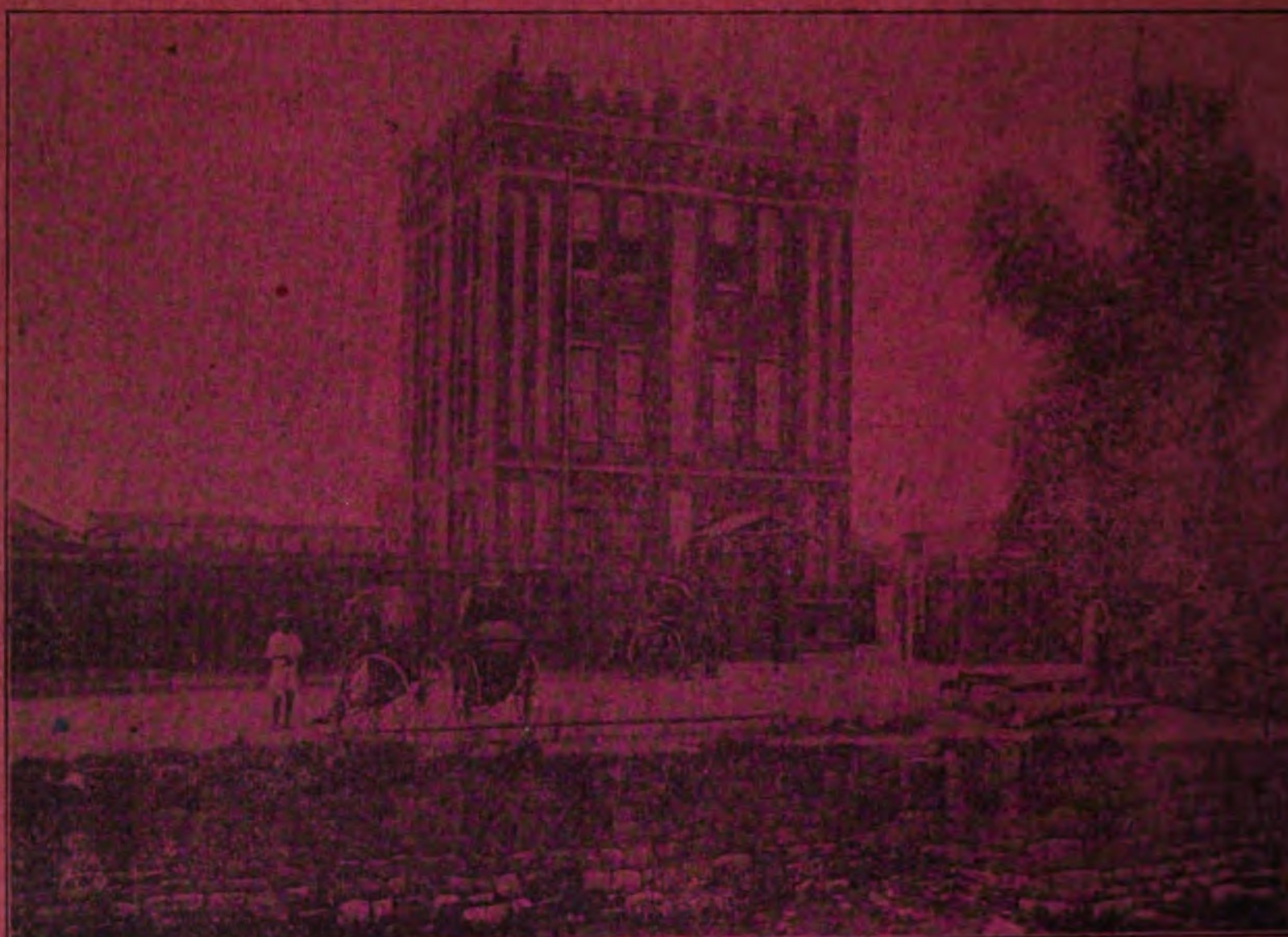
十六日　○午後七時帝室制度調査局にて皇族講話會　▲後一時商業會議所にて東京瓦斯會社總會　▲後二時東亞同文會幹事會、○本日午後二時嘗て病ひに臥し居られ候本派本願寺法主大谷光尊師危篤の報有之候　▲本日の電報に曰はく駿州燒津大に燒く、佐賀縣唐津虎病八名を出し四名死せりと、根室に漁業者大會千餘名來會せりとのことに候、△豫期の如く首相官邸にて地方官會議有之候、今日は其第一日に候が桂首相訓示を述べ申候、▲本日も進歩政友の兩黨領袖會有之候

十七日　本日の會合は　▲市民教育演說會午後六時數寄屋橋教會堂にて　▲佛教淸徒同志會の發起にかゝるペスト問題大演說會後一時より錦輝館にて　●日本美術協會常會後一時より　○學制研究會新年例會三時華族會館にて　●黃嘯會後一時常磐木倶樂部にて　▲歌御會習禮式宮中にて　▲第一倶樂部演說會後一時中央會堂にて其他土曜演說々教等常の如し

十八日　○本派本願寺法主大谷光尊師本日午前一時三十分遷化との發表有之候　△加藤高明氏橫濱より撰擧を爭ふことゝ相成候岩崎家と伊藤侯富と權とを利用して初期以來議院の一名士たる淸廉の聞へ高き島田三郎氏を倒さんとの事なれば天下の同情は自然島田氏に向ひ申候▲今夜橫濱に三人斬有之候

十九日　△政友會本部より各地支部へ撰擧に關して警告書を出だし候　▲午前十時宮中鳳凰の間にて新年歌會御始式有之候　△東北地方飢饉に就て免租の議其筋有之候

二十日　ペストの犧牲となりし橫田醫學士の葬儀は本日醫科大學より校葬を以て谷中へ送られ候　△神官僧職内務省訓令を以て總撰擧に干渉すべからざる旨發表せられ候　▲東海道鐵道新橋神戶間本日より大急行を實施山鐵初め全國鐵道の時間表に變動を生じ候　▲熊本第九銀行紛擾仕拂停止に次で疑獄の起りし由申傳へ候



# 中央商業學校

**文部省認可　甲種程度**

位置は永代橋西詰舊商船學校の跡にして鐵道馬車より五丁隅田川小蒸滊發着所より半町日本橋京橋深川本所の中央交通至便の地に在り

## 生徒募集

●本科一年生百名●豫科一、二年生各百名
●四月一日より新教室にて新學期を開く
●入學志望者は三月廿五日迄に申出べし
●高等小學二年修了者は豫科一年へ無試驗にて編入す

東京市京橋區銀町十四番地
**中央商業學校**